

がら頼りに密々話を仕て居たるは四十三四の先生その大政治家たる金縁の目鏡と顔一面の鬼髻にて明かなり。此政治家先生は猪口を女將軍に指して酌を仕て「ドウダ先程から余が心の底を打ち明けて此通り手を合せて頼んで居るもの、貴婦だつても人に知られた苦勞人、エ、余が胸の中を察して聞いて呉れたが宜いじや無いか、と口説きければ、女將軍は眉を蹙めて小さき銀簪にて丸鬘の下を搔きつゝ「サア其所で御座いますかコレ計りはどうも貴君の仰しやる通りにもなりませんから……（と小聲にて謝絶を云つて居る體を見て「コレハ珍らしい此見物中これ迄未だ斯かるなまめいたる事を見ざりしが扱は此政治家がアンナ眞目な顔をして此家の女將軍に思ひの丈を口説いて見ても女將軍承知せぬと見えるぞ『併しアノ女將軍の口裏も何だか障らば落ちん風情なりと云ふ景色だぜ』「ヤア妙だ〜女將軍が笑ひ顔をしたぜ『ム、又大先生が口説き出した、』「マア靜かにして聞きませう、と居士と夢野は床の間の隅に小さく成つて傍觀する）それとは更に心附かず先生は女將軍に向ひて「サア其様に木で鼻を括た様に他人行儀で扱はれては困るネ、此遠坂布衣蔵も（是が政治家先生の姓名なりと知られたり）モウ今日では依頼ところが無いワ、貴婦も知つての通り余も今では政黨仲間て先小頭株に立てられて居る身體、ソレが今度の選挙競争にまんまと首尾よく敗北したと有つては内外萬

端言ふに言はれぬ不都合が沸て出て来るじや、兎も角も擬員さんとか先生とか云ふ肩書が有ればこそ實の所が余を大層なもの様に買ひ冠つて呉れるのでドウヤラ斯うやら今日まではお茶を濁して居るが、貴婦も知つての通り貴婦が鳥森で商賣を仕て居なすつた時ソレ四谷の大將が繁々花月や濱の屋で貴婦と御出會ひソノ時は余も御太鼓で御供をして居た位だものナンテ學問や智慧が有るものか、其ても運よく斯うやつて居ると學者だと世間の馬鹿者どもが思つて先生お願ひ申しますと頼んで來るので綱渡りは仕て居れど何分にも根が附焼刃の天浮羅滅金だから動ともすると箔が落ちて銅が見えたるには閉口の仕合せサ、ソコテ今度議員にても成り損ね様ものなら一體に機關がガラリと崩れて取つて返しが附かなく成るは必定、コンナ事は七里缺敗他人には話が出來ぬが貴婦は年來の名染ゆゑ内幕を破つて話すのだ、是だから今度は一肩抜いて手傳つて下さらぬか、と内證を明けて達つての頼み、女將軍は「遠坂さん貴君がソウ仰しやるもの丸て否とは言ひませんがどうすりや宜いので御座いますネ「ナニ何うするツて別に貴婦に迷惑を掛ける次第でも無いが……ソレ此の家に毎日の様に来るお客の鹽辛長者ネ、あの人が斯うして遣ると肩を入れた日にヤア選挙投票の三十と四十は直にどうでも成るのだネ、ソコテ余もあの鹽辛に取り入らうと思つて内々は手を廻して見たが然るべ

き手便が無いに困つてゐるが、ナント貴婦の口先で甘く胡魔化してあの鹽辛長者を余の味方に付けては下さるまいか「へーエさうで御座いますか……併しお待ちなさいませよ、サウ仰しやられて見ると一昨日の晩に鹽辛さんが此綿さんや土雲丹さんと四五人でお出でなすつて廣間で藝者も呼ばずに相談ばなし、ナンデモ今度ば實語教の内から出す様に仕度いが誰れだらうと……「オイ／＼實語教じゃア有るまい實業者だらう」左様々々其實業者サ、其にやア雨滴點右衛門か紺野染太郎の内ではどうだらうと頻りに相談して猶篤と考へて見やうと云ふ事御座いましたヨ「サア其實業者が余に取つては大の禁物、鼠に三毛猫青葉に鹽と來て居るから其奴等に乗れり出されてお負に鹽辛はしめ此綿土雲丹の大頭連中に肩を入れられた日にやア此方の丸負は知れ切て居る、是じやに依つて鹽辛を何でも彼でも抱き込んで味方に附けるが尤も肝心、ナント骨を折つては呉れまいか、貴婦も秋千亭の女房と云つては女侠の顔利、ドウゾ男一疋助けると思つて手を借して下さらぬか、コレ此通り拜むく、と掌を合せて拜みれば「遠坂さんお止しなさいませよ、マタ例の辯茶羅て人を煽動なさるヨ、ダガネ遠坂さん貴君お氣の毒さまですが少し散財して下さらにやア住ない事が有りますがネ」ム、大層な事は出來ないが少し位なら譯なし承知だが……「ソナラ貴君あの泥新道のみだ子を直に呼

んで下さいな「ナンダむだ子だ……どんな奴だ……ム、一昨年までお酌で居た奴で……成るほど小咨の内  
の妹か、アレガどうした、眞逆に余が彼奴を……「アレサ遠坂さん貴君に周旋し様と云ふのじやア無いヨ、  
彼奴が此節は鹽辛さんの第一等のお氣に入り尤も是切りですが私しの家ばかりでも外に兩人ばかりお客が有  
りますけれど彼奴が年は往なくても、ソコは旨いから上手に鹽辛さんを籠絡て大てれの大的に仕て居ます  
から……「ム、宜し讀た、幸ひ小咨も余が昔名染、ソレじやア直に兩人を呼びに遣つてそのむだ子から鹽辛  
に吹き込む手段……宜しい／＼今日は二圓助づゝの祝的て御馳走をして返して遣て此次に口説き掛けて得心  
させる……大丈夫だハ、アこの場合だもの色氣どころか、欲一方ヨ……貴婦甘く往たらしつかり御禮をす  
るべし

戀は思案の外

物に慣れたる秋千亭の女將軍が才覺にて候補者の遠坂布衣藏は小咨むだ子の兩奴を招き頻りに御機嫌取々の  
擬應どちらが客やらどちらが御取持やら、車を引く人引かせる人、酒を飲む人飲まるゝ人、固より腹に一物

あつての事なれば其日は其儘にて遠坂は何にも云はず程よく切り上げて「お立ちでございますよ……今日は有がたう……何れ御近日に……歌舞伎座の見物は明後日きつとて御座いますヨ……と云ふを後に聞き流してガラ／＼と歸つたり。後にて小春は女將軍に向ひて「ネー貴婦あんの遠坂さんが久振りて私どもを呼んで、大層な御祝儀をくれて、御馳走をして遊ばせて、芝居まで見せて呉れるのは變じやア有りませんか、と流石は老練の古猫これには必らず仔細ありと早くも勘付いて尋ねれば、女將軍も打ち諾いて「サアそう云へばアノ遠坂さんが何だか、むだチャンに内々で頼み度いことが有ると云つてお出でだツたが、何れ明後日は其お話が出るだらうヨ、モシさうであつたら聞いて上げてお呉れな、私しも折角頼まれたものだからネ……と答へしかば「オヤそう、何れ……ナニむだ子だつて幾年が長なくツても貴婦さんの顔を潰す様な事は仕ませんヨ、ホ、ホ、ホと小春は齒齧をむき出して氣障なお世詞笑ひして秋千亭に暇を告げて泥新道の自宅に歸り衣服を着替へ姉妹は不斷着になつて膳に向ひ茶漬を喫べながら「エー姉さんお前アノ遠坂さんと云ふ人を前から知つて居るの「ム、四五年前にはチヨク／＼お座敷で逢つた事もあつたがネ、アレテ中々に狡猾ものサ、人の御馳走なら御遠慮なしに贅澤を云ふ代りに自分の身錢と來ちやア、五厘銅貨一ツでも滅多には出さない

質ヨ「ア、そうてせう、道理で御振舞の御客に來ても自分の御膳は手を附けずにソツと仕て置いて無暗に御杯頂戴と出交易に外へ出掛けて人のお肴を喰ひ散らし自分のお肴は折に詰めて持つて歸リドウかすると人の分まで胡魔化して外套の隠に押し込むのがアノ人の得意ですもの「ソノ狡猾者の遠坂が今夜お前と私を呼んでコレ此通り二圓助宛の祝儀をくれてお貢に旨い物をどつさり騎で器用に返つたのはどうしたのだらうネ「サア姉さん可笑ネ「所で先つき秋千亭の女房が一寸私に耳打ちした様子ではアノ遠坂がお前に頼みがあるとサ「ソウ何の頼みでありますネ「おとぼけて無いヨ、頼みと云やア知れ切つて居らアネ「デモ秋千亭の内じやア鹽辛爺に出て居るもの、まさか一ツ宅……「ハ、アお前は達者でも其所がまだ子供だヨ、一ツ宅だから知れずに濟むはネ「ム、そりやそうですネ、其にしても若し其氣なら私一人よんで直に話をすれば濟むことに「ソウヨ嫌な姉さん呼んだり芝居を驕たりして無駄な散財をする奴は、田舎山の妓員だつて此節じやア仕ない藝だのに、アノ遠坂さんの狡猾がソソな昔風をする譯も無いネ……お待ちヨ、是にやア何でも外に譯があるヨ……「ナニ何でも構は無いワ、儲かりさいすりやア、ネー姉さん「ソウ共／＼夫れが當世だアネ、思ふさま引つ掻きむしつて、むしやぶり取つて遣るさ、と姉も姉なら妹も妹、聞くも恐ろしき二人が

相談

斯くて其翌々日に成つて歌舞伎座の見物、打ちだして後は秋千亭へ引き上げて其上で遠坂は女將軍の手傳ひにて鹽辛口説き落しの頼みに小吝も側から太鼓を叩けば「ソナラ甘く彼爺を抱込て見ませう、とむだ子の受け合ひ「事成就の其時には莫大の御褒美を出すが先是が當座の手附、とお召縮緬が一端づ、「アラ遠坂さんお氣の毒さま濟みませんネー、貴婦さん、宜しう、と小吝むだ子は大悦び「私も有がたしと女將軍も同じく大悦び、

サアこれで『然らばむだ子、頼んだぞ』と幕を切れれば、遠坂もリツばな漢だが、此奴内々二足の草鞋を穿いて四文の錢で饅頭を二ツ買うと云ふ性質なるに、女將軍は『旦那それじゃア無駄では有りませんか』と火を附けるし、小吝は錢の出ぬ義理を妹の身軀で達たうと思つて未をするし、むだ子は此上にまだ幾でも小遣ひをせしめて遣らうと考へるし、ソレコレの思想は湊合して合意黙諾と相成りければ遠坂は色氣より慾と云つたる拜金宗の大主義をコロリト打ち忘れ色氣も慾もと一步を進め憫むべし鹽辛が禁鬻に指を染め路花椿柳に章臺の一夢を試みたり。抑もかの鹽辛長者と云へるは色黒、丸木偶、髯は胡麻鹽に似て生へて參差し口は腸

桶ときて嗅て辟易すと云ふ大變もの、欲の深きは山の手の井戸よりも深く、義理の薄きは損料蒲團の綿よりも薄く、世間一切金との相談に了簡を固め、小指の爪に糸心を入れて火止石油のランプを點し、澤庵の尻穗を千六本に刻んで惣菜の汁の實に用ひ、節儉變じて吝嗇となり筋道昇つて非道に陥り、交際どころか風下にも置かれぬ俗物なれど、扱々金の威光は剛氣なもので何百萬と云ふ身代が赫灼たる光明を放ち今では紳士仲間の大達でもの實業者の寄り合ひにも床の間を後にして上座を致す仙券なり。之に變つて遠坂布衣藏はたひ内幕は居間の真中で毎日火の車を廻したり、十四日晦日には槍が天井から降つたり、怪物屋敷の機關仕掛けて居やうとも、年は三十四五の若盛り、ペンペラ衣服のテレ姿で乙に躰裁を作り、加ふるに口先頗る滑にて追從輕薄世事程頼、程が能くて押しが強くて面の皮が厚くて根性の太い漢なれば、流星に鐵心石腸の豪傑たるむだ子と雖ども人間に生れたる悲しさには同じ事なら鹽辛のブンと臭きを嘗めんよりは寧ろ遠坂の後押したるに若かずと云ふ不了見を起して假變じて眞となり眞轉じて假となつたるぞ是れ遠坂が破滅の原因とは成つたりける

思はざる遺恨

「マア旦那お静かにお仕なさいましヨ、むだ子ちゃん、何うしたのだニ、と秋千亭の女將軍が一間の襖を明けて調停仲裁せんと入つて見たれば、むだ子は空涙を浮べて「貴婦さん、デモ旦那が色々な事を仰しやつて私が少しも覚えも無い事をお云ひなさるもの……と云はせも果てず鹽辛長者が鹽辛聲を勵まして「キ、黙つて居ろ、コレ貴婦、お前だつてソレじゃ餘んまり此鹽辛を馬鹿にする仕方だらうぜ、忘れも仕ない先月二十六日ごろて有つた、此むだ子が云ふには『旦那アノ遠坂布衣藏さんと仰しやる方は實は内の姉さんと少し譯のある人ドウソ今度はアノ人を妓員に出し度いと姉さんも氣を揉んで居ますから貴方その投票を手傳つて下さいまし』と違つての頼み。遠坂と小吝と譯が有ると云ふのも寢耳に水で初めて聞いた事、また其遠坂と云ふ奴は鐵道買上不承知論と水道工事賛成論で余の儲を妨けた似是物ゆゑ余は尤嫌ひの若郎だ、其上に余が貸金の勢ひで自由になる投票は彼是凡そ四五十枚ソレを知つて此綿は一枚拾圓づゝに買受けやうと云ふし、土雲丹は拾貳圓五拾錢づゝと云ふし、イヤ余は拾三圓七十五錢、イヤ余は拾五圓、拾六圓ト三十八錢五厘、

モウ一錢五厘買ひ上げやう、ソナラ拾七圓五十錢、拾八圓、飛んで九圓、モウ三十錢、三四の雜買ひ、と拾九圓五十錢と去年の霜月の米見た様に棒に上がつてモウ少し辛抱すりやア貳拾圓の上に出る相場、安く二十圓と積つて五十枚では二五十の千圓、ソノ内て五割方持主に遣つても残り五百圓、余が全くの所得、ソレを打棄て遠坂に安く譲ると云ふのは出来ぬ相談、なれども外ならぬむだ子の頼みだから、其無理を聞いて、ナニ余が損さへすりやア宜いと大様に氣を持つて、マア半分通り承知したワ。所が怪しからぬ、ソノ遠城とむだ子と怪しい譯があつて然も此家と云ふ事は儘かに聞いた、イヤ、其申譯は政府黨の宣告書や民權黨の檄文じゃ無いが少しも役に立たぬ、現在此家の廊下で昨日の晩遠坂がどてらを着て手水に往つた後からむだ子が長襦袢の上に衣服を羽織つて附いて來たのを見た人が有るから仕方が無いワ……イヤ、ヤ、何と云つても承知は出来ぬヨクモ、むだ子も女房もぐるに成つて余を欺したア……通り町邊の若旦那や傳馬町邊のお店者じゃア有るまいし、手前達に胡化にされて堪るものか……譬端の青味も脱げない癖に余をチヨロマカさうとは呆れた奴だ……神奈川の久兵衛さんとは譯が違ふぞ、山に千年海に千年住て酸いも甘いも飽くまで知つた鹽辛長者、ヤツト匙を延した總官員や源右衛門新田の多額納稅妓員とはヘン憚んながら一ツ

代物にされて間尺に合ふものか……人を馬鹿にするのも大概にしるゝ、と散々に罵り大腹立にて鹽辛長者は  
疊蹴立て、私千亭を去つたりけり

何が扱戀の遺恨の瞋恚が煩、胸に燃えたる憤怒の思ひ、坊主が憎けりや袈裟まで憎い況てやは當の女敵、  
おのれ遠坂目に物見せて呉れんずものと鹽辛が執念深くも思ひを凝せる一間の中、折りしも聞ゆる隣家の聲  
的が稽古の謡曲は葵の上

「恨めしの心や、あら恨めしの心や、人の恨みの深くして、轉啼と泣かせ玉ふとも、酒で此地にましまさば  
水臭き座敷の騒ぎの陰よりも、遠坂布衣とぞ契らむ、「己は焼餅の黒焦なりし身となつて、阿呆の顔と見え  
もせば、夫れさい殊に恨めしや、夢にだに、悟らぬものを仇契り、笑ひ草ともなりぬれば、猶も思ひは増  
す鏡、その面影もつら憎や、まばらに散れる投票を、引つかき廻しにゆかうよゆかうよ。」

オ、あの謡曲は六條の御息所の恨み余は六十の直安男の恨み「思ひ知らずや、世の中の、情は人の爲ならず  
我人の爲につらければ、かならず身にも報ふなり、何を歎くぞ嫉妬の恨みは更に盡きずまし」と胸  
間聲を震はせてぞ誦ふたる

斯かる次第なりければ鹽辛が遺恨を辨すは此時ぞと自分が進退する投票は云ふも更なり手の届くだけ掻き廻  
したれば、遠坂は忽ち勝利の前途を失ひ、黒幕大將には叱り附けられ、職員には議論を向けられ、其上に運  
動費の水の手は涸れるし、高利貸には嚴重の談判を喰ふし、秋千亭の女將軍には愚痴を翻され、小吝にはど  
うして暮れると懸合ひ込まれ、むだ子には胸ぐら取つて引つこづかれ、あたり近所は皆敵なれば正に是四面  
の楚歌に項王悲しみ漁陽の鼙鼓に明皇驚くの状と一般、遠坂クワツと逆上せ、忽ち笑ひ乍ち嘆き神氣を失ひ  
發狂なし桂に懸けたる櫻欄簀取るよと見えしが立ち上がったて

「抑是は暗夢先生希代の黨員、遠坂布衣藏幽靈なり。あら希らしや、いかに此綿、思ひも寄りぬ鹽辛の「便  
を求めて出面の」遠坂が外れし其有様に、又此綿をも無理に外さんと、いふ波に、浮べる演説焼き直  
し、議員解散の嫌味を並べ、議論を仕掛けて悪風を吹かせ、眼もくらみ心も亂れて、前後を忘ずる計り  
なり、其時此綿すこしも分らず、新聞切り抜き現の人に向ふが如く、選舉をあせり戦ひ玉へば、鹽辛  
おし隔て、議論づくにて叶ふまじと、珠敷さらくと押揉で、當分働三世、南法軍那利佐世、骨法大不徳  
尻穂を陰剛無茶商法、辛抱内消苦勞投票の差圖に掛けて祈り祈られ、悪計次第に知らなければ、鹽辛仲間

に力を合せ、区内をこぢ附け味方に寄すれば、猶怨讎は妨げなすを追ひ拂ひ祈りのけ、又引く沙にゆられ流れ、く〜て、當しら紙にぞ成りにける

### 恐入つたる答辯

「……實に悪例だ、東京で餘計な事を仕て見せたものだから忽ちに當地へも傳染して来て、トウ〜僕も今日には意見質問會に引きずり出されて選舉人の御糺問を蒙られば相成らぬと云ふ次第に歸着仕つたは實に迷惑至極でス、と投首したる自薦候補者は富足跳太郎と云へる蝙蝠郡の政治家なり。此愚痴を聞いて參謀の上邊飾はゲラゲラと打ち笑つて「富足君ソウ氣が弱くては逆も政治海の風波を凌いで政府乗取の大望を達する事は出来ませんぜ、ナンノ高が田舎の土百姓、府縣會を機嫌買と間違たり地方自治を痔の藥(秘方痔治)と思つて居る手合だもの、兼れて君が東京で教はつた通り上頭と下頭と打つかり次第を得意の大吹螺を吹き廻すサ「勿論その覺悟では居るが、相手の奴原が種々の説を述べて眞實の事を知らせて居るから田舎者の生物識で始末が悪いヨ」それ位の事は有るだらうが、ナーニ、少しも恐るゝ所なしサ愈々君が窮して來た場合には

僕が西洋直傳の出鱈目論を擔ぎ出して瞞着して上げるよ「何分にも君に應援を御依頼いたしますぜ」宜しい〜心丈夫に思ひ玉へ、と上邊參謀に力を附けられ富足跳太郎は質問會へぞ出頭したる  
質問會は蝙蝠郡内の選舉人有志家が集つて富足候補者の意見を一通り聞いて置かうと云ふ催しにて其場所は玉石町の混濟寺と云ふ寺の方丈なり。一應の挨拶も畢つて有志家の人数は凡そ三十一人各々富足に向つて質問に及びたる其問答の傍聽筆記太略は左の如し  
(問)監獄費を政府が引き受けやうと云ふのを矢張地方税に仕て置が宜しいと蛇々張る譯は(答)政府に任せると却つて入費が澤山掛るに由つて(問)デモ其だけ地方の負擔が減のに、地方に取つて不利益とは(答)サレバなり是は秘密だが、監獄費の代りに外の負擔を地方税に掛くるかも知れぬゆゑ、不利益じゃ(問)ソナ評議が議院へ提出になりましたか(答)イヤ〜未だ提出には成らぬが我が塔の大統領が天眼通で未前を察して御託宣が有たのだ(問)それでは條約はどうあつても勵行せれば成らぬ御心底で御座るか(答)イヤ左様でも無いが、マア當分は遣つて見る積り(問)ナゼニ(答)ナゼニと云て政府に信用が置けぬからだ(問)それでは誰れに信用が置けますネ(答)尋までも無い我塔にサ(問)貴塔なら信用が屹度置かれますか(答)ソウ推詰られては

屹度とも申し憎いが、ナニ金錢の外なら大抵信用が置けませうヨ

(問)貴塔の事を御自分では『ミンタウ』と仰しやるが其意味は(答)ミンタウのタウは世間で動ともすれば黨の字を書くが黨は徒黨の黨の字が耳障りて面白く無い、其上に書く時に畫が多くて六かしいに由つて昨秋の會議で塔の字に改めた(問)石塔の塔の字に(答)左様、石塔卵塔にて決死の意を示し、五重の塔の如く高慢の心を高くし地獄和讃に『一や二や三や四、十より下の幼児が一ツ積んでは父の爲、二ツ積んでは母の爲、菩提供養と積む塔を』とある如く間違ば直にガリリと崩るの状を表したる字じや(問)して又ミンの字は(答)ミンの字も以前は民と云ふ字を書たが我塔の目的は民の爲めでは無い即ち銘々自分の爲めじやに由つて先づ眠塔と書く、其譯は愈々議論が切刃詰つて一言の返答も出来ない様になつた時には塔の上で假眠をして知らぬ振をするに由つて眠塔と名づく、次に今日の場合の如く此方の都合の爲には驚を烏と言ひくろめ牛の糞をお萩と胡魔化し何んでも角でも世の中を掻き糞し兎角世間に事あれがし無事では此方の口が干上がるやと靜謐を素すを願りみぬに由つて或時は素塔とも名づけたなり(問)シテ又憫の字を書く譯は(答)それぞ即ち我塔の大秘密、議論に負て敗北する時は泣き言を並べて『どうぞや申し叶ひません塔葉には』と哀つばい聲を出して公衆を感動させ、ア、可愛想にと憫れむの情を興さしむに依つて憫塔とも書いたるなり、ナント是でミンタウの理由因縁が分つたて御座らうがナ

(問)そこで今度の選舉で貴君と某殿と所存の合はぬ其廉は(答)彼れは實業の爲めと申して吏權論の肩を持つべしと定め我は自分共仲間ゝの爲に危い橋は愚の事網糸渡りも致す覺悟、彼等に任せて置いては世の中が次第に腐敗て根から葉から面白く無い、我が塔に任すれば世の中がガヤ／＼と騒ぎ出して賑かに成つてドサクサ混れに百姓でも町人でも殊更山師心のある如何様師など、來たら思ひの外の儲けが出来て後は野となれ山となれ、先づ當座の所は一寸景氣が附いて來る様に見える、ナント不思議奇妙頂禮で御座らうが、サア／＼皆様此譯がお分りに成つたら僕に御投票なさいまし(上邊)ヒヤ／＼、唯今富足君が申された通り御座るから同君へ御投票なさい／＼、投票すれば功德に成つて投票されるれば御恩に着ます、サア／＼御質問が濟んだら本堂の側におまはりください、お茶やお菓子接待御代には及びません、(來會者)はアこりやア、何の事てがんと余はア呆れて口利けんゾ、胡魔化者の横着野郎め、とんだ奴に引掛つて、あつたら暇ぶつ潰したつ



## 神佛の應援

サア騒動に成つて来たぞ、富足跳太郎は一旦選挙人より意見質問會を促されて酷く味噌を附けたけれども謀の上邊飾が才覺にて何所をどうこぢ附けたか昨今に至つて様子を聞けば中々の人氣にて侮る可からざる勢なり。其仔細を尋ぬれば富足は上邊の意見に従ひて兼ねて己れが懇意なる菩提所の和尚を味方に頼みたるに、此の和尚頗る世事に賢くて「委細承知仕つた、ナンノ地獄の沙汰でさへ紫磨黄金の威光では重罪でも無罪になるが佛門の掟なり、況んや現世の投票に其利益が見えて成りませうか、宜ろしう御座る、愚僧きつと周旋いたして御覽に入れやう、併し御布施は……夫れさへ御承知なら何んな骨ても折りませう、と偏に右の肩を袒て檀家信者を説き廻つたる大盡力に法華の功德は忽ちに顯はれて「ソソナラ和尚さま」貴僧の仰せ通り富足に投票いたしませう、と續々と賛成者が出来たるも不思議なり

然るに此富足の向ふに立つて候補の競争者と顯はれたるは元は當縣某藩の士族その名をば宇賀野御魂と呼べる伴の武夫なり幸ひに廢藩の時に亡き父が祿券賜金を以つて田地數多買入おきたるに由り此漢の代になつて

一郡にて名を知られたる豪家なるが生得本居平山の學派に心を寄せて兎角に今日の進歩を喜ばざる守舊の精神は滿身に溢れ、時勢とは云ひながらたらちねが撫て玉ひたる黒髪を斬つてザンギリになつたと、先祖代々腰に挿みたる雙刀を廢せられたるが畢生の遺憾冥路の障りと心得たる困り者。されども此漢年來郡内にて幾分の人望ある上に此度はどうした風の吹き廻しか我議員の候補者と打つて出でんと云ふ謀叛を思ひ立ち城隍に三日三夜の參籠をなし御圖を取つて見たれば吉との御告に勇みを爲し、若し此競争に敗北せば標札うち破り腹切て人に再び面をば向かはん可からず今一度この世に居らせんと思召さば選挙を外させ玉ふたと祈念して、妻子には水盃の別れを成して押し出でたり。是を助くる輩の其中にて一際勝れし剛の者は此郡の生團堅石神社とて大宮寶神大宜都比賣神一言主神を祝ひ祭りたる神社の祠官鈴野振成と云へる神主とぞ知られたる此鈴野と宇賀野とは其の昔同藩の由縁あり、殊には年來日來鈴野の教を受けて神隨の道を學べる門弟ではあり子弟の誼み氏子の頼み「何條この振成助け參らせて成るべきぞ、心安く思はれよ、朝日に匂ふ山櫻大和魂の程を見せ申すべし、と乙な所に大和魂を擔ぎ出して村内郡内の氏子の家を一軒毎に頼む」と音信で「當區の候補は宇賀野御魂氏に限り申す、必らずとも此人を選挙あれよ、是れ某が私の詞に非ず、勿體なくも堅

石の御社に祝ひ奉る諸の神たちの思し召ぞや、神慮に背いて神の御罰な蒙り玉ひそ、と古風なる文句を並べて説き立たれば目明千人盲千人の世の中「然らば左様いたませう、宇賀野の旦那なら安心して御座いますから……と何が安心だか不安心だか理も分らず同意する輩の次第々々に増たりけり。是を見聞して富足は大に驚き「是ぞ油断の成らざる敵。およそ當區に於いて富足と競争を争はんずるものは實業者仲間の吉蔵兵衛一人と思ひ居つたるに、アノ宇賀野奴が打つて出るとは案外の沙汰、……何でも彼奴等に負けては成らぬぞ……宇賀野連と吉蔵連が合併せぬのが此方の特……併し淨かりしては取らるゝぞ、取られたが最期、兼て東京で約束の郡長には成れまい、ソレが大變一大事……と騒ぎ立ち周章まはり投票募集に他事なかりけり斯る状況なれば郡内の選舉人連中も二方三方から頼み込まれて板挟みに成り頗る迷惑至つて當惑「ナント吉兵衛さん貴君の所にも定めて來ましたらうネ「ハイ來ましたとも昨日は堅石の神主が來て忙がしい中を二時間ばかり座つて口説たし、今朝は又かの慈得寺の坊主が朝飯前から押し掛けて矢張選舉の無理口説で困り切りますヨ「ソウで御座いませう私共見た様な貧乏人の所にさへ、お前さん、アノ富足の女房が上邊の妹と二人づれて子供に飮弄品を土産に持つて來て内の媪さんを口説ますもの「ソウ云へば昨夜は新山の鮎藏が經節

の折を持つて勝手口に抛り込んで、いづれ明日上がつてお咄を致しますと云つて急いで返りましたぜ「て御座いませう、利刀横町の達摩の爺が八藏さんの所には十圓包んで持て來て投票買集めを頼んださうですよ、「隣村の投票が三十七枚揃つて居るのを七百圓が四文缺けても賣らぬと狡助野郎が力身でるさうだが、此様子じゃ賣れませうて「屹度賣れませうヨ「ソコで御同前に板挟みも苦しいが、夫れならばと云つて丸で投票の日に入札に出掛けないと云ふ譯にも往かず「往かなからうものなら、又町内のワイ／＼連中が悪く言ふだらうし「第一に郡長さんが何んか云ふだらうから「ハテ困つたナ「夫れじゃア明日の午から御同様に小田原屋の奥二階に寄つて評議を仕て誰に極めると相談を附けませうか「夫れが宜い／＼「ソソなら此連中が發起になつて廻状を出さうか「何れ相談の後には一盃だらうが一人前いくらにするホ「酒とも三十五錢で宜からう「ソリヤ銘々の自腹かネ「ナンノ落札の漢から五十錢づゝに増して取り上げるサ、人の事で三文だつて損を仕て堪るものかネハ、ハ、ア

## 鼻負の引倒

小田原屋と呼倣る料理兼旅兼暖味屋の奥座敷には新泥田の源右衛門、狼谷の牙九郎、猿岡の爪左衛門、古村の老兵衛、新町の若五郎、鼻窪の笠助などを初めとして其勢凡そ四十人思ひくゝの装束にてズラリと折り曲つて三方に座り、百日紅の煙草盆、檮の火鉢、日光製の茶盆、會津燒の土瓶、五家棒の茶菓子と云ふ飾り付けにて各々青臭い煙草を薫らして候補者選定の相談に他事なかりけり。相談漸やく酣なるを見て左の方より進み出でたるは是ぞ富足跳太郎に語らはれたる金光明山愷食院愷得寺の住職鳥高日當と云へる老僧下には白絹に白金巾の裏附たる白無垢の煤と線香の烟に色付きたるを着て、上には脱走縮緬の衣を纏ひ、先師日尻より譲られたる重代の袈裟の緋の色が煉瓦に成つたるを掛け、硝子製造の水晶の珠数を爪繰り、説教口調の勿體にて一同に向ひ「扱御一同の信者がたや、先程から段々の相談を承つた所が、孰れも一理ある様だが二十餘年未練心術と云つて本統の候補者にすべき程の器量で無い、此日當が眼を開いて見る所では富足跳太郎殿より外には有るまい、なぜと云ふならアノ跳太郎殿は法華の信者じや、第一アノ富足の家は勿體なくも

恭けなくも高祖日蓮大菩薩がお心易くなさつた富木殿の家筋で此お宗旨には至つて由縁が深いじや、既に法華經の中に『或ハ未練若ニ洋衣ニシテ民間ニ在リテ自ラ眞ノ道ヲ行スルト謂ヒテ人間ヲ輕賤スル者アラシ、利欲ニ貪着スルガ故ニ惡意ノ爲ニ法ヲ説テ世ニ恭敬セラルコト得ルコト六通羅漢ノ如クナラン、是人惡心ヲ懷イテ常ニ世俗ノ事ヲ念ヒ名ヲ政治論ニ假テ好テ我等ガ過ヲ出シ而モ是ノ如キ言ヲ作サン、コノ諸ノ愚頭等ハ利欲ヲ貪ルガ故ニ民主ノ論議ヲ説ク、自ラ此ノ演説ヲ作リテ世間ノ人ヲ誑惑ス、名聞ヲ求ムルヲ以ノ故ニ分別シテ是經ヲ説ク、常ニ公衆ノ中ニ在リテ我等ヲ毀ラント欲スルガ故ニ、國會大臣惠良門壯士及ビ餘ノ愚頭衆ニ向ツテ誹謗シテ我惡ヲ説ク、是レ邪見ノ人惡意ノ論議ヲ説クト謂フン』と仰せられた、何と有りがたい事じや無いか。今日は其通りに惡意の論議が流行る中じやに由つて法華の信者が出ねば世は治まらぬ、法華には『今此三界ハ皆是我有ナリ、其中ノ衆生ハ悉ク是レ我が子也、而今此處ニ諸ノ患難多クトモ唯我一人ニテ能ク救護ヲ爲サン』とあるじや、夫れだから此經を持して南無妙法蓮華經妙法蓮華經と太鼓をドン／＼叩いて題目を一心に唱へる人が議院に出れば天下泰平國土安穩、地租が輕くなつて負擔が重くなつて鐵道に草が生て諸色が高くなるは請合じや、是じやに由て御同様に法華經の爲に難儀を受ける覺悟なら富足さんを議員

にさつしやれや、ソウすれば法華の功德にて成佛する事疑ひなし南無妙蓮華經く、と説き立つれば何の話か更に分らねど功德に成つて成佛が出来事なら富足を選舉し様かと云ふ色は自づと諸人の面に顯はれたり是と見るより堅石神社の祠官戸間縣主鈴野宿禰振成はヤツキと成つて膝を進め張臂して聲を勵まし「コレコレ氏子の衆々々、アノ入道の言ふ事に欺され玉ふな、我五百秋千秋の瑞穂國を平けく安らけく治むる人は憚りながら宇賀野御魂大人の外にはあらじとぞ思ふリ其證據は延喜式鎮魂祭の詞に「高天原ニ神留リ坐ス、皇親神漏伎神漏美ノ命ヲ以テ、皇御孫ノ命ハ豊原ノ瑞穂國ヲ安國ト定メ奉リテ下津磐根ニ宮柱大シク立テ、高天原ニ千木高クシテ天ノ御陸日ノ御陸ト稱辭竟奉テ、上ゲタマフ味噌ハ上下煽ツテ烏奴ガ身手柄ハ分カヘ見ルカヘ知カヘ荒カヘ五色ノ物、好ハ螺ノ音高シト口ノ端チヨト管テ、山師ノ物ハ甘イト辛イ、背殿原ノ物ハ鼻ノ廣物胸ノ狭物、起キテモ寐テモニ至ルマテ雜ノ思チ横山ノ如ク奥高クシテ當マツル烏奴ノ身手柄ヲ安身手柄ノ空身手柄ト平ケク聞食テ常磐ニ堅磐ニ齋ヒ奉リ再ビ解散ニ逢ハセ王フナ長ク御座所ニ御座シメ給ヘト齋ヒ鎮メ奉クト申ス」とあらば解散に逢はぬ様な人を選擧するのが即ち神漏伎神漏美の命の思し召て御座るぞ、其人は誰あらう宇賀野御魂の大人じゃ、全軀この議員選舉と申す事は大切なる御神事、それに抹香臭い

坊主が出掛けて来るなどとは穢を恐れぬ不埒の振舞、速に千暗が沖に流して此席を攘ひ玉へ淨め玉へ、と息せき捲て述べたれば、慾得寺日當は満面に朱を注ぎ湯煮鮓の如くになつて「ナンジャ選舉の事に坊主が與つて悪いとは……コレ神主殿よう聞かしやれい、抑も議會に出す議員を選擧する事は憲法に於て定められた事じゃ、其憲法と云ふものは其昔聖德太子が我宗祖日蓮大菩薩と御相談なすつて法華十六卷に寒帷子經一卷を加へて十七の數にして即ち憲法十七條をお定めなされたに由つて佛法王法と一ツになるが聖德太子日蓮大菩薩の深い思召であるワ、夫れ故に愚僧が日蓮大士五百五十二代の法流を汲んで選舉の相談に出たが何んて悪い、それに引替へて神主などが憲法に掛つた事に口を出すのが笑止千萬だ哩と、罵り返せば、振成同じく活となつて「イヤ此奴がく熟入め、抑々議會は神ながらの道なり、天の安の川原の夕涼みに八百萬の神たちが神集ひに集ひ玉ひ神諫に謀らせ玉ひて今年の山王の祭には麴町からは象を出さうと相談をお極めなされたが即ち議會の始りじゃぞ夫れだに由つて長唄の雛鶴三番に「おさるく悦びありや有明の月の出しほに選舉が腹の宇賀野御魂の打つや鼓の狸の音もぼんくとして濟なりく音も住吉のいく世經ぬらん」と唄ふて無いか、と返答打さして威張つたり

サア騒ぎになつて来た「こりや神主さんが尤じや」「イヤ坊さんが理屈じや、と恰も般若神子が宗論の狂言を  
目の當りに見るが如き風情にて如何なる事に成りもやせんと案じたるが、兩方なだめて持出す酒に忽ち和  
睦となつたれど肝腎の選舉相談も是で中止とはなつたり

唐瓢 狂言に做ふ

アト「是は此邊に住居いたす紳士で御座る、此節當區内では議員の選舉殊の外に賑かて御座る、先づ候補者  
には示雄町の焼野洋八、怪珍郡の河合惣太、利刀村の御蔭幸無郎など申すものが必死に成つて頼み廻つて居  
ると申すに由つて、某も候補者に打つて出てヤンヤと勝利を得やうと存する程に太郎冠者を以て投票買集の  
事を申し付けると致さう、ヤツ太郎冠者有るかシヤ」「ハアアト「有かシヤ」「御前に候ふアト」「太郎冠者汝  
を呼び出すは外の儀でも無いが、某今度當區の議員に成つて都に上らうと存する間其方は急いで選舉人を頼  
み廻り投票を買集めて某が愛度當選いたす様に働いて参れシヤ」「畏つて御座るアト」「早う行けシヤ」「ハア  
（シカ）シヤ」「イヤ是は迷惑の事を仰せ付けられた、某し選舉と申す物を存じ申さぬが、頼うだ御方が仰

せられた投票とは何様な品であらうか、先づ當區へ参つて心利いた者に尋ねると致さう、イヤ彼是と申す内  
にハヤ當區へ参つて御座る（シカ）商人「ナニ唐瓢をお求めなされますと（シカ）シヤ「頼うだ御方  
は夫れに御座りますかアト」「太郎冠者か、念なう早かつた、シテ投票は買ひ集めの事に致いて参つたかシヤ  
「チャンと調べて参つて御座る（と瓢箪を示せば）アト「エイ、太郎冠者、某が申し付けたるは議員選舉の投  
票じや個様な瓢箪には無いぞシヤ」「イヤ是が其唐瓢で御座る、此瓢箪と云へば昔唐土の顔回と申す唐人が瓢  
の飲と申して不斷寐酒を一合づゝ入たる瓢箪にて故事來歴の正しい品じやに由つて唐瓢と名づけて大切に致  
いたもので御座る、此の唐瓢を肩に掛けて都に上ばらしやりますれば妓王妓女などゝ申す寐拍子を召され  
て此瓢箪の酒を飲ませられ時よりは此通りコロリと轉がいて枕の塵を拂はせらるるが凡の格式じやに由つて  
妓飲とも妓淫とも申します。又その昔何某とか申したる仙人が瓢箪から駒を出いて其に打ち跨つて天に登  
つたを登仙と唱へますれば瓢箪は縁由ある事で御座る。扱また妓飲に成らしやります時は酒戯と申  
して此瓢箪の如く腹の内は本來空の無一物で左ながら酒に酔て臆語を吐く様に（と瓢箪の口の栓を取て息を  
入て吹き音をさせて）此通りに吹き廻し天の班駒は愚か猿でも虎でも大蛇でも出る様に辯じますれど、イヤ

と云ふ場合には（と瓢箪の口に栓をして）此通りに口を閉ぢて敵對するが默敵で御座る。但し腹が据つては、  
 蕩波の儘に襲はるゝに由つて此瓢箪の様に右へ轉り左へ轉りと展げ廻つて居らねば相成らぬ事で御座る、  
 （シカ〜）唄「實に面白き瓢の喩〜」。八百の圓に望を掛けて。彼方此方を馳廻り、心の欲の煩惱に。世をも  
 人も顧りみぬ。物狂はしき振舞は。蕩ける波の有様や。斯る者等に語らはれ。身を誤るぞ恐るしき。いて  
 や此土の修羅をばのがれ。實しき業の人を選ばん。此狂言畢て酒宴に及びければ性來酒の上の酌き焼野洋八  
 は、最前からの様子を見て胸のムシヤクシヤ堪へがたく會主の某に向ひて「時に會主君、今日の狂言は貴公  
 方の御指圖で遣らせられた事で御座らうが、全く以て僕が當區に運動いたす勢力を殺がうと云ふ悪策と相見  
 える、扱は河合惣太氏に煽動されて其肩を持たるゝ儀で御座るか、夫れなら夫れで僕も覺悟が御座る、殊に  
 依つたら非常手段を相用ふる欺も知れませぬぞ、と此縣下には未だ豫戒令の實施なきを頼みとなして感し懸  
 ければ、河合惣太はズツと進み出て「ナント仰つしやる、僕が此座の諸君を煽動したとは怪からぬ……」「言  
 ふなく河合の奸物、抑も我が塔の申し合せでは一ツ選舉區にては眠塔互に争ふまいと云ふが約束、ソコテ  
 當區は初めから僕が着手して運動しつゝあるを知らながら足下が後から出て僕に向つて競争するとは一鉢全

鉢どう云ふ譯だ、此際同士打ちとは相濟まんじや無いか「イヤ同士打ちは致さぬ、併し既に當區の選舉人有  
 志諸君が不肖なれども僕に信用を置いて其事を我が塔の早利大和尚に頼まれ早利より指名されて僕が候補者  
 に成つた以上は君こそ退いて他に計畫を運らして然るべき筈で御座る」「是は怪からぬ僕が當區に運動を初め  
 て居るとは君の方の早利も承知のはず夫れに君が出て来て来て坊げをなすとは實に言語道斷奇怪千萬と申すもの  
 であるワ、「何が坊げだ何時坊をした」「坊げをせぬ所が、陰然奸策か運らして新聞に迄汝が早利の名を以つて  
 廣告したじや無いか」「ム、廣告したがどうした、青天白日正々堂々で押し出したは即ち政治家の政治家たる  
 所以だ「生利な事を吐すな、汝等如き反覆表裏の奴に大切なる代議士がさせらるゝ者か」「ソウ吐しや汝等如  
 き無智文盲の粗暴もの我利々々亡者の無錢奴に任せては國家の爲めにならぬ、汝の塔院は即ち利劍塔だ」「ナ  
 ンダ利劍塔だと汝が塔院こそ即ち内閣を乗取つて仕事を仕やうと云ふ破壊塔だ」「ナンノ爾が破壊塔だ」「イ、  
 ヤ奴が破壊塔だ」「破壊塔の糞野郎め」「破壊塔の芋食書生め」「盜賊め」「泥棒め」「詐偽師め」「ペラ棒め……車夫  
 も跣で驅出し折助も舌を巻いて後退りを仕そなる悪口雜言負ず劣らず罵り合ひしが遂には立上て掴み合つて  
 大喧嘩、上に成り下に成つて闘ひしが口は達者でも力は微弱な河合惣太酷く打ち擲かれて狂言詞「腕力では

叶ひ申さぬ許されい、と橋掛かりの方に逃げ出せば焼野洋八は追ひ掛けて狂言詞「コノ横着もの遣るまいぞく」

### 壯士の魂膽

「モシ先生、アノ赤居決唐と腕野弱九郎の二人が御玄關に参つて是非とも至急先生に拜謁いたし度いと申し居りまするが如何仕りませう、と玄關番の書生が取り次ば、焼野洋八先生不興氣なる顔付にて「エ、留守だと云つて斷つて返しなさい」「イエ中々返りませんヨ、私も如才なく遣つて見ましたが、先生の御在宅を承知て参つたる兩人ゆゑ昨夜から先生は御不快じやと申しましたれば、然らば御病牀に推参いたそうと申し居りまする」「ム、夫れじやア是へ通らつしやい、と云ふにぞ、書生の案内に打ち連てノソリ〜と座敷へ通つたるはツヒ此間まで焼野先生の爲めに盡力したる壯士の侍大將たる赤居腕野の兩士なり。兩士は一目してその壯士たるを知ると云ふべき装束にて其座に動と坐り一人は蟹が餌食を挟みたるが如くに兩臂を四十五度の直角に張り一人は兩腕を十文字に腕組なして焼野の額を俱に見詰たれば、焼野は兩人に向ひ「君たち何ぞ急の

用でも有るのかね」「イヤ急の用と申すでは御座らぬが、一昨日も昨日も書面にて申し上げたる如く此度の豫戒令は其實却つて保安條例より痛く身に徹へる御座る、ナンデモ必らず來るで有うと存じた所が果して昨夜警察に呼ばれて嚴重なる説諭を蒙つた次第「勿論正業に就く事は僕等が冀望する所なれど第一には其資本と申しては、素より一錢の準備も無く又差當り是と云ふ業も御座らぬ僕等ゆゑ「此場合に於ては先進先輩たる先生に御依頼申す外は策略が御座りませぬ」「尤も先生には是迄随分保護を蒙て居りますが此際は何卒僕等が正業に就く丈の資本を御恵み下さる様に願ひまする、と首をヒョコ〜と下げて強求かゝれば、焼野は「ム、大方ソナ事でも有うと思つたが、貴公たちに恵む金は今と云つては少しも無い、モウ少し先に成つたら又少々の工面は出来るかも知れないけれど、差當り御断りだ、と木で鼻を括たる挨拶。腕野はムツとして「イヤ先生憚りながら夫れは御挨拶とも存じません、僕等が是まで先生の爲に身命を犠牲にして盡力いたしました事はヨモヤ御忘却は御座りますまい……と云へば赤居は其詞を續いて「左様々々御忘却どころか、貴公たちの盡力は實に感佩する、と先生は屢々仰せられたては有りませんか「既に先月陰氣閣の演説に於てい吏黨の小陰幸無郎の方には十分に準備のあるのを合點で兩人が仲間のもの十八人を召連れて向ひ警察官の制するに拘

はらずノ一と連呼して物の見事に演説の妨害したる勳功は一方なりません。其から逆胸樓の選舉相談會に亂入して態と暴行を働き折角の相談を中止解散となし其爲に兩人とも三日間の拘留に逢たる苦現。其から又選舉人に脅迫状を送り喧嘩を吹掛けて怖もて反對黨の投票を妨げたる効力は容易ならぬ仕事で御座る。夫れに今日と相成つて先生が御構ひ下さらぬと云ふは甚だ以て輕薄で御座りませう、と云へば、燒野は眼をむき出して「何が輕薄だ、抑も君たちを頼んだに付いては先づ兩君には日常五十錢づゝ支給した外に辨當代と酒代を臨時に出して其上に三十錢なり二十五錢なり時々の賞與を出したぜ、又平壯士の向には辨當ぐみ四十錢づゝの日常は十分過る位だと現に君たちも明言したて無いか、其通り勞力に對する報酬は立派に支辨してあるに恩に掛けたる如き無氣は甚だ以つて其意を得ぬワ、君たちが豫戒令で困るは當前だが、僕は其豫戒令の爲めに思ひ切つて壯士を利用する事が出来ぬので今度の選舉に殆ど其目的を失ひそうだが、其損失は幾多と思はるナ、又脅迫で怖かざるゝ様な燒野じゃ無いヨ、失敬ながら腕力威迫と來たら僕の方が先生だ、グズグズ云ふと僕の方で承知せぬぞ、と取つても附かぬ斷り方。ソッ云はれて見ると原來壯士の秘密傳授して貰うたる燒野なれば流石に兩人とも強くも言はれずどこの詰りが相談づくの懇談と成つて「ハイへ

イそリヤナニ先生が方法さへ御授け下さりませれば屹度働きます。ナンノ二週間や一ケ月の禁獄は新聞編輯人の名を冠つて居た時から度々經驗して居りますれば固より何とも思ひませぬが、只其の方法に困ります。成るほど表面は筆耕書にマツチの箱。ソッで妨害にならぬ様に妨害するには、欠に仲に居眠に附。是は妙計名策早速に行つて實効を奏して見ませう。右に付御手當。タツタ二圓。イヤ、中々少ないとは申しませぬ。併し先生いよく御當選の上は其節別段の御賞與は必らず下さるで御座りませう。有がたう御座ります。又へマを働いちやア往けないゼ。大丈夫、ハイさよなら。

### 熊鷹長者

熊鷹長者は朽先馬之進に向ひて、シテ先生、御來臨の御用筋は。と尋ぬれば、朽先はづつと火鉢の側に捐り寄りて「扱て今日參上の用向と申すは別儀でも御座らぬ今度の選舉に付き是非とも貴君の御手許より運動費の御立替を相願はねば成らぬに出つて實は早利の内命にて罷り出たる儀で御座る、と云はせも果てず熊鷹は「イヤ夫れは存知も寄らぬ事、まづ早利様の御印形を當にして一昨年から無抵當で御立替申した元金ばか



り二千圓に三千五百圓に千八百圓とめて七千三百圓是に利を乗せて凡そ八千七百圓にも成りますに今以つて元も利も入りませんが、是や何して下さいますね、尤も早利様の御印形がチャンと据つて居りますから大丈夫と仕た所でアノ怪軒殿に用達つた五百圓、あの金にや早利様の御判は無くてもどうぞ頼むと云ふ御口土もあり其上に貴君の保證ですが一昨年の六月から丸二年半以上利息も入れず書替へもせず置かれては私も大困却で御座います、ソコで先づ此方から形を付けて下さらぬか、と尤も至極の請求大體の者ならばヒタと返答に差支へる筈なれどソコは朽先馬之進少しも騒がず打笑ひて「カウく熊鷹さん、何も其貸金の事をソウ仰々しく仰しやらんでも僕が善く存知て居りますヨ、夫ればかりじや無い、マダく早利に貴君が立替へた金は夥しい事で凡そ三萬にも成つて居るて御座らう、其上に怪軒ばかりか既に僕だの闇雲だのが拜借して居る丈でも惣メては殆んど六七千に成つて居りませうが夫が有から唯今僕が申し入る運動費の御立替は出来ないと仰しやるのですか「左様サ、既に是まで四萬餘にも成つて居るもの、モウ此上は出来なないじや有りませんか「御常人が出来ぬと仰しやるからは出来ぬに相違ありますまいが、貴君は扱々損得を知らぬお人で御座いますなア「ナント仰しやります、此の熊鷹が損得を知らぬとは「サア其事です、御承知の通り我早利は

あの通り活潑な御人だが金と來たら有れば有りたけ宵越の金は今以つて持たぬと云ふ氣象、之に従ふ政治家は僕を初め皆其通り、ソコで貴君が其貸を取ると力身に所が無いものは仕方が無い、執達吏を連れて來て財産を差し押へて公賣に仕て見ても詰り百兩の形に編笠一蓋なんの足にも成りは仕まいぜ、全體貴君が當然一通りの金貸なら初から貸ない方が好かつたが、併しモウ貸した以上は取る様に仕て取れるのが專一じや無いかと思ひますネ「何にも其通て御座いますかシテ取れる様にして取る仕法がありますか「有りますとも、即ち今度の選舉に肩を入れて何でも我塔の連中を議院に出して今の政府を乗取り早利を總理大盡にするのが一の手サ、ソウさへ成りやア何の三萬や五萬十萬の金は朝飯前の仕事だらうじや無いか、又怪軒にせよ僕にせよ、諸省の次官か府縣の知事に成る上は眞逆に二千や三千の工面を附けるに譯は有るまいと思はるゝネ、畢竟ぬ先こそ露をも厭へ乗り掛かつた船でモウ切口に水が染て來た上は虚ても實ても物に仕上ぐる外はないぜ、今日の場合では先づ日本全國過半は我塔の勝利だけれど、今日が尤も大切言はば天下分目の合戦だから大丈夫の上にも大丈夫に勝つと云ふ手筈を連らさねば相成らぬに由つて運動費が入りますじや、勿論たんとは入らぬ先づ五千ありや差し向きの所は差し支へない積りなれば其五千を貴君が奮發して出して是迄の貸も

取れ其外に資本が忽ち角兵衛に成る様な旨い儲け口を突當る様にするか、但しは一文者の百知らずで早利の勝軍を見ても助けずに置いて授かつた運を取逃がすか、二ツに一ツよ、熊鷹さんどうで御座ります、御賢慮次第有無の御返答を窺ひませう、と建板に水を流すが如くに説き付けたれば、ソコが即ち熊鷹長者「宜しう御座います、御尤もの御譯合ソレじや後刻私が早利様へ参上いたし其節御證文を載いて金子を御川達ませうが、時に先生、愈々我塔の勝利と成つた晩にやア外國人雜居は屹度ソウ成りませうか、一昨々年から背負込んだ地面で此熊鷹も持ちあぐんで居りますが……ソリヤ勿論の事サ條約改正で外國人の雜居を許し地面で大儲するが第一の目的「ア御座いますか夫れから早利様の天下に成つた時には日本銀行の重役には差詰私をと云ふ兼ての御約束「勿論々々貴君が日本銀行總裁サ「ナニ總裁にやア成らずともアノ金を自由に動かす事が出来りやア面白い事が有りますからネ」その段は御安心よ「夫れから鐵道買上一件は必らずせにア成りませうまいてよ「勿論買上サ一旦買上廢止で直を下げて置いて内々買入れて置いて「オットそこは承知、其時こそシコタマ儲けますぜ。ハクシヨ。トコ萬歳。オヤ風を引いたぜ

### 不意の敗北

選舉人有志集會所と総頭目流の書體にて認めたる看板を掲げたるは他所は知らず當選舉區に於ては隨一の顔役と知られたる鎗栗烈郎先生の本營なり。此先生の敵手として候補の競争に顯れて此程より頻りに其勢を張つたるは屑輪誤財と云へる演説遣ひの大辯士「我等が言ふ如に政費を減じて儉約すれば今日の半分で政治の財は屹度附けて見せる、さうなる時は諸君のお望次第に地價も修正する地租も三分一に減じて上げる、納税は今日の半高で宜しく成る、農家の爲には米を高くして上げる、商家の爲には商物がドン／＼と賣れる様にして上げる、此年や世が好て濡手で粟の金儲戸棚の上から牡丹餅がころりと落て口の内ヨイ／＼ヨイ／＼サと云ふ様に仕て御覽に入れる、これが即ち我等が西洋直傳空理菩薩御夢想の名法で御座る、偽か信か御買なすつて御試し下さい、サア彼方からも同意と仰しやる此方からも賛成と仰しやる、ハイ／＼左様で御座い、と口から出まかせ吹き立つれば「ナント源右衛門さん、屑輪どんがあれ位言はつしやるから眞更丸つきり虚てもあんめいか「サアあの齒磨賣りが吐かす言は引き當にやア成り申さんが少しやア形の有る事てがんすか

ナ「余そこまでは知んねエが、知らざア半分價ねと云ひやんすから村内の投票を少許ちとせべい賣つて見やんすか  
 「ソウてがんすが、直が廉くちやア駄目だんべい、など、流石さすがに田舎者の悲しさには狡猾の様でも眞逆にと  
 思ふ所に世間知らずの本性を顯はし欲が手傳ひてソロ／＼と屑輪誤財の手に引き入れられ其味方に屬するも  
 の日に増し多くなつたりけり。是を見て鎗栗烈郎は大いに驚き東京の本部に電信を掛け『テキトウ、イキチ  
 イ、ヒドイ、キウニ、エンペイ』と頼みたれば『スゲニダス』と云ふ返詞に引續いて『オイトコ、イタコ、ア  
 スーバンデタツ、エンゼツ、ヨウキ』と本部より通達あつたれば、鎗栗は大喜びにて腹心股肱の面々に向ひ  
 「ナント本部は中々手が廻るじや無いか、吏塔の政治論者雲霞うんかの如くに數ある中で生牀惣太興せいどそうたよ、潮來山島之助  
 と云ては政談演説の印可を取つた大名人、この兩人が來て邪道退治の演説を開いて呉れる上は僕の勝利は疑  
 ひなし、屑輪誤財ごとき木の葉天狗は一息で飛ぶに違ひない、サア其用意せよ、演説場には大師堂を借り受  
 ける、辻々には張札を出せ、警察の届けはよいか、夫々それぞれに案内を出したかと、差圖して兩參謀の來るを俟ち  
 受けたり

兩參謀の到着は、午前十一時に涼車たろろくがステーションに着いて、夫れから三里十一町を人力で當所へ參らるゝ

に付き一時になる、ソコで相傷亭あひせうていで午飯を出して、二時半に演説が始まつて、晩の六時から安可樓やすかろうで大懇親  
 會を開くと云ふ順序に定め、仰ひの者は九時よりステーションに出張なし、鎗栗は十一時に集會所しうかいじよに來たり  
 注進次第ちゆうしんしだい直に宿外しゆくがいまで出迎ひする支度にて今や遅しと待拂へたりけるに、十二時頃に至り迎ひに出でたる某  
 は息せき歸り來りて「先生困りましたステーションには人力車が一挺も御座りませんに由つて、直に此方こちらから  
 迎ひの車をお出し下されい、との事「委細心得た、と命じたるに當宿にも今日に限て人力車が一挺も無いと  
 云ふ仕合せ、是は變だと八方に手を分けて人力を頼み廻つたるに、當宿は愚か隣宿までも同様の次第集會  
 所は大狼狽上を下へと周章廻しゆうしやうつたり。斯りける程に痛いたまじや本部では人に知られし生牀惣太興は潮來山島之  
 助すけたけと兩人づれ田舎道の三里十一町迎ひの人々に助けられ沓くつの痛いを忍びつゝたど／＼と宿外しゆくがいまで來りしは午  
 後三時すぎ、サソ大師堂では傍聽しやうりやうの輩しやがらが待詫て居る事ならんと鎗栗の案内にて其足で往いて見たれば聽衆僅  
 かに十七人半はなは（半は寺の雜僧なり）世話人を入れて漸く三十人足らずの見物、コレじゃ演説をする張合ひも  
 無い他日の事に致さうと成つて演説未遂志願解散と成て集會所しうかいじよに來り一休息したるが、幸ひに短日の事ゆゑ  
 程なく日も暮たればイザ去らばと鎗栗烈郎の一系列人數を揃へて安可樓に赴きたるに、兼て「當日の酒食は一

切鎗粟の御馳走なれば安心して御出下され後日に至り割前等は決して請求仕らず候』と慥かに案内状に認め然も承諾の返辭まで有つたるに、コレは如何、扱々不思議、過半は斷りなしに無出席、偶々あれば病氣差支へ餘儀なき用事出来、など云ふ斷りにて同じく僅かに十五人ばかり、安可樓の廣間座數百疊敷の所にシヨンホリ膳を並べ吸物は冷たくなり蠟燭の心は溜るし頗る以つて陰氣を極めたる宴會。モウ焼だ、藝者を呼べと命ずれども常宿に五人ある藝者が平時お茶を礎が常なるに今宵に限つて一人も居らず、下女のお酌に焼飲みの地酒は頭に上り、話は理に落ちて心細き有様にぞ有りける

兩軍の謀計

屑輪誤財は居屋裏の側に胡座を搦て手下の者等に打向かひ「ドウダ昨日の計略は妙で有つたらうがな、と誇氣に言へば、手下の者は「實に先生の計略は愈々出て愈々妙、唐土にては淮陰侯諸葛武侯我朝にては九郎義經楠正成と雖ども恐らく是程の智謀才略は御座りませぬ」だから我塔勝利の上は先生が參謀本部長にお成りなさるゝ役割は實に其當を得て居ますヨ」「イカニモ左様、あの生牀惣太與潮來川島之助等が來て政談演

説、引續き懇親會と云ふ鎗栗方の手順を聞くが否や先生が御差圖を成つて一昨夜の晩の内ステーションを初め常宿隣村まで人力車を一挺残らず借切つて彼等に泡を吹かせたは古今の名策、エ、先生、僕は彼等がどうするかと存じて昨朝からステーション迄參つて見物いたした處が東京から應接に參つた生牀と潮來の兩人が洋服鼻蹠で威張つて着きは着いたれど、人力が無いので大ブツ／＼サ、鎗栗黨の提灯持が駆け寄り廻つても素より車の有る筈は無し、とう／＼彼等同勢五人で荷物の皮靴を自分で背負つてエツチラホツチラ三里半の山道を翻し／＼歩行て來た様は敗軍の落武者同様、イヤハヤ見られた様じや御座りませんでした、「ソレから大師堂の演説に成ると明神の相撲に押されて誰も傍聴に往なかつたが、一體先生アノ相撲はどう云ふ譯で昨日俄かに催したものでせうね」「ハ、ア貴公も迂遠究まるネ、幸ひに隣宿に床の山巨燧櫓の一组が來て居ると聞たから一昨日急に使ひを走らせて買ひ込み其晩の中に土俵を築かせて接待見物の奉納相撲を余が仕たのヨ」「ム、道理で思ひ掛けない俄かの相撲、アツ天の助け造物者の擁護と存じて居ましたが、扱はあれも矢張先生の謀計で御座りましたか」「イヤ／＼夫ればかりじや無い、昨夜葛西屋の芝居の催しは益々妙計であつたらうが、然り然り、實に妙不思議で有りました、アノ芝居で安可樓の懇親會に往手が丸て無かつたは十二分の

効績で御座りました「その代りに僕は又一昨日先生から芝居の内命を蒙つて、サア方々と騙け廻り振り付けの愚頭安座や義大夫の鼻本思案大夫を頼んで来て同勢の芝居狂を驅集め急稽古の一夜漬で忠臣蔵を五幕出す事に仕たが、座元頭取狂言方、何も彼も一人で骨が折たぜ、是まで東京では素人芝居の世話人で實地經驗の功を積んだる僕だけれど、昨夜の芝居ぐらゐる氣が揉めたのは無かつたヨ、併しアノ芝居の無代價で法樂に見せた所から安可樓の懇親會が空拂きに成つたは愉快極はまるネ「此通り先生の謀計は着々緊切に當るから當選は大丈夫……屑輪萬歳……三河萬歳、ヤアボンク」

話が一轉で銚栗が集會所にては郡議區々なり銚栗烈耶は烈火の如くに怒り齒齧を爲して「實に實に屑輪誤財の鄙劣野郎、憎むべき奸策を施したナ、素より陰謀術數は彼等が長所とは存じて居つたが人力車を借り切つて往來の自由を妨げ、故意と奉納相撲を明神の森に催して演説の聽衆を奪ひ、加ふるに葛西屋の芝居を以つて懇親會の來客を妨げたるは憎んでも猶餘りありと云ふべしだ、モウ此上は宿内の若者を語ひて彼等が土頭を擲らせるか、裏手の泥川へ投げ込むか仕なれりやア此腹の愈し様が無い、と涙を流して愚痴を翻すにぞ、上座の生床惣太興は莞爾として打ら笑ひ「イヤサ銚栗君、さな怒り玉ひそ、成るほど卑怯鄙劣の愚策に

遇つたは残念だが、凡そ君子が小人に負るは個様な所にあるもので御座るテ、併し惜い哉彼奴が此策を昨日に行ふて選舉の日に行なは無いのが即ち猿は賢きに似たれども毛が三本足らざる證據、ソコテ我塔ては其策を其の儘用ひて今度は常月廿六七日頃から手を廻して我が選舉區の人力車を盡く此方に借切り此方の爲に投票に往くものには無代で乗らせ敵方には一切人力を用ふる事の出来ない様に仕て遣らうと云へば潮來出島之助は手を拍つて「妙々是ぞ即ち胡服して胡を征するの奇計で頗る宜しい方略です、併し僕は又その上に蒲團攻を用ひ度ネ、蒲團攻と云ふは當宿の損料蒲團を残らず借り込んで宿屋の分も同じく借り込む事にして置いて投票の前日より選舉の爲に此地に参つた輩が我が味方の外は宿屋に泊つても蒲團が一枚も無いので困ると云ふ目に逢はせて此方に降参させる様にするのは名策だらう「ム、蒲團攻も面白いネ、然らば人力攻の復仇には人力攻のお返し、蒲團攻の新策を用ふると仕やう……ム、至極宜ろしからう、銚栗君その貸金催促攻は直に行ひ玉へ……イヤ」

經節攻や菓子箱攻じやア廻り遠いから現金で投票買入と仕たまへ……ナンノ憚る所が有るものか國家の爲だもの表面きに買入れ人を巡回させて直段を取り極める事にするサ……此際買けたまるものか買入代金は支出の金主が附いて居るもの敢て自腹が痛むと云ふては無し値が高くて買込むサ

兩參謀の裏切

今日は最早二月廿三日關ヶ原の合戦には僅か五日の日合と相成つたれば競争の烈しきと復前日の比に非ず、同じ眠塔の内にて一方は焼野洋八郎一方は朽先馬之進の兩英雄左右に分れて選舉の競争、事危しと聞こえしかば焼野が陣には南海大先生の代理として綾志經策應援の爲に出張なし、又朽先が營には早利大明神より侍大將の鼠取楠猫を軍師に差下されたりければ兩陣互に旗鼓を整へ甲越が川中島の戦も斯くとぞ思はれたり。綾志經策は味方を集めて軍令狀を讀上て云く

- 一我塔に非ざるものは都て眠塔の敵たる利塔なりと認め遠慮なく之を攻撃する事
- 一隨意に他人の名前を濫用して我が塔の利益になる廣告引札書狀並に脅迫狀を製造して味方の勝利を謀るべき事

一投票買入は相當の直段までは熟談を以つて取り入るべしと雖ども餘り不當の相場を申し出るものあらば利塔が土地公用買上規則に倣ひ此方にて至當と思ふ價を定め腕力を以つて買取るべき事

一壯士には酒食の代ともし一日金三十錢づゝを支給すべし尤も人数拂底の節には車夫ごろつき其外無頼ものを臨時雇壯士に申し付ける事を得

と殿かに相達し鐵釘蚯蚓齋は第二條に由つて新聞其外を引き受け榎木捨喜は第四條に由つて壯士の總督となり中野才土郎は第三條に由つて投票買集め掛かりの主任になり追北承知兵衛は第一條に由つて攻撃事務を心得たれば綾志經策は都て其差圖をぞ成しにける

却説朽先が本營にても亦これに劣らず計略を運らして味方を募るに他事はなかりしに案内を申し入れて罷り越したるは綾志經策、イザ先づこれへと客座に招じて應接に出でたるは鼠高楠猫互に東京にては或時は敵となり又ある時は味方とも成つて顔を知り合つたる間なれば時宜の挨拶を畢りて何御用ぞと尋ねるに綾志は形を改め「外でも御座らぬが御同前に一旦は眠塔結合して内輪の同志打ち仕るまいと契約は致したなれどコウ御互に陣を張合ふ上は敵味方と相成るも是非なき事御座るが、朽先氏が先づ約に背かれしからは同氏は勿論貴君がたは眠塔と御名乗は無用で御座る「コレは驚き入つたる御掛け合ひ眠塔は塔院の勢を以て門閥の利塔を退治するが目的にて即ち我々其目的を存する間は眠塔なり、原來眠塔は普通名詞にして貴塔の固有名

詞では御座りませぬ、「イキ／＼」文法書の講釋は承るに及ばぬ、我が塔では貴塔を目するに利塔の悪名を用ひ申すに付き兼て御断り申す「御念に及ばぬ、然らば我が方でも貴塔を破壊塔と名づけるで御座らう、夫れに付き我が方の賛成者たる内股金太夫は現に朽先を候補に選定する發起人で御座るに、何んて今朝の新聞に正誤を出ださせて貴塔の焼野氏の推薦者連名に加へられましたな」「ソリヤ此方より申すと、論より證據は此通り」と懐中より奉加帳を出して鼠取に見せし御覽なされ、然も常人自筆で記名調印いたして御座る、シテ又貴殿には内股が一味の證據が御座るか「無くて相成るうか、ト是も同じく奉加帳を見せて「御覽なされ此通りで御座る、と云ふに紛も無い同筆同印、コレは如何と互に奉加帳を出して引き合するに通り町の誰横町の某等誰も彼も雙方に豫約の調印をなしたるもの彼は凡そ五六十人さすがの兩參謀も呆れ返つて「時に鼠取氏「綾志氏「ナント驚き入つたでは御座らぬか「ヨモヤ／＼」と思つて居る中この俗物の慾張奴等雙方に口を掛けられ承知をして兩點のズリを張るとは怪からぬ「是れが賣買兩立の計略中々以つて油断が成り申さぬ「是に付き綾志氏僕と君とが仇同士でも無し、原を質せば信田の狐、ナニモ御同様が此選舉で議院に出やうと云ふても無し「イカニモ其通り畢竟は親分の爲にコウ出張して働く分のと「夫れに付けでも儲から無くて

は骨折の妙が無いが、コウ見渡した所が焼野氏の爲に勞しても「朽先氏の爲に盡力してもタント得にも成るまいが、「イツソの事福富鈍助が頻りに議員になりたがつて居るこそ幸ひ、彼奴に内應して兩人がシツカリ儲ける計略は何で有らう、君同意する氣は無いか「大あり／＼、至極妙だ「然らば焼野と朽先と同志打させて、と思はず大きな聲を出せば「コレ、と制して耳に口よせ叫びば「ム、承知だ、…：時に鐘の音コーン

### 臨時村會の議案

櫻癡居士の魂は夢野實の魄に誘はれて一月下旬以來諸所方々と選舉競争の見物に遊歴なし「成る程面白い事は面白いが去りとて一月餘も書齋を留守になしたれば徐々歸らうては無いか、と相談したるに、夢野は頭を振つて「否々是からが見物ものじや、マア少し辛抱して余が案内する所に御出てなさいと無理に勸むれば、居士も今更歸る譯にも往かず「エ、いつその腐れ見る所まで見て來やう、と又もや兩人の魄がフワリ／＼と浮れ出してとある田舎の村に着きて窺ひ見たれば是は村内の某院と云へる寺の本堂にて催したる臨時村會と見えて村長殿は正面の佛壇の前に卓を据ゑて正座を占め、其の左右には書記殿が狻猊貌狗の如くに隨つて筆

記をなし、向かふ正而より左右に連なり三方に折曲つて村内八百三十五人の人民に代つて村政に參與し玉へる村會議員殿二十八人づらりと並びて今日の議事問題如何と堅唾を飲んで待受けたまへり

此時村長殿閣下は靜に起つて容體を繕ひ説き出だして云はく

扱ハヤ今日諸君を集めて相談を仕る臨時村會の議案は外ても有ンまし無エが、今日は二月十日で議員選舉

の三月一日にやア間も無エから緊急問題で御座ればさう思つて下さらつせいや、此議案は是に御座る赤腹

垂右衛門殿、田畔泥助殿、深田蛇内殿の三人が建議を致されて即ち余が村長たる資格を以つてハア提出する

理で御座り申す、依つて朗讀を致させ申すてがんす

と演説して一禮すれば流石に村會は村會だけあつて禮儀作法は遙かに衆議院などよりも正しく議員みな一同

に起立して答禮に及びたり、其時書記は突起ち上がり震へ聲にて議案を朗讀して云はく

村會議案乙第十九號

一當某村ニ於テ我村民ガ所有スル衆議院議員選舉投票ハ其數合セテ七十八票ナリ此投票ハ選舉人隨意ニ之ヲ

消費スルコトヲ止メテ盡ク村會ニ寄附スベシ

二村會ハ此寄附ヲ受納シテ其投票ヲ望ノ候補者ニ約定ヲ以テ賣渡スベシ、但シ其賣渡シ方ハ村長ニ委任スト

雖モ直段ハ一票ニ付キ三十圓ヨリ少ナカラズ五十圓ヨリ多カラザル範圍内ニ定ムベシ且ツ村會ハ特ニ投票

賣方委員三名ヲ選舉シテ村長ヲ補佐シ兼テ監督ニ當ラシムベシ

但シ此寄附ハ選舉有權者七十八人中ニテ五十人ハ既ニ贊成ノ調印チナシタルニ付餘ノ廿八人ニテ村會ノ決

議ヲ以ツテ壓制シテ寄附セシムベシ

三右ノ寄附投票ヲ賣却シタル金額ハ當村臨時收入トシテ是ヲ以ツテ當村ノ共有基本財産ニ繰入レ秣場ヲ買入

レ其利益増殖ヲ謀ルベシ

理由書

當村ノ統計表ニ據レバ去ル明治廿三年ニ衆議院議員選舉人ハ七十三人ニシテ即チ今年ニ於テハ五人ヲ増加

シタリ。抑モ議員ヲ選舉スルハ有權者ノ權利ナリト雖ドモ其權利ヨリ得ル所ノ利益ハ原來法理上得ベカラ

ザルノ利益ナルヲ以ツテ其者ノ所有トシテ之ヲ自分銘々ノ巾着ニ納ル、コノ德義上ノ制裁ニ於テ禁止スル

所ナリ然レドモ其實際ニ於テ得ベキモノヲ取ラザルハ是レ即チ天ノ與フルヲ取ラザルニ比シキヲ以ツテ受



納スルコト固ヨリ當然ノ理ナリトス。斯ノ如ク既ニ之ヲ受納スルノ理アリテ之ヲ巾着ニ納ル、可カラズトスル以上ハ之ヲ村會ニ寄附スルハ信ニ其當ヲ得ルモノト云フベシ、況ヤ選舉人ニ取ツテハ自分ニ一錢ノ損ナクシテ一村ニ對シテハ莫大ノ財産ヲ寄附スルノ榮譽アルニ於テヤ。是ノ如クニシテ寄附シタル投票七十枚ノ價ハ少クモ二千三百四十圓多ケレハ三千圓ニ及ブテ以ツテ兼テ隣村七ヶ村入會秣場一圓ヲ買入ル、モ猶許多ノ剩餘ヲ見ルニ付テ我が村ノ共有基本財産ニハ實ニ此上モ無キ最上都合ナリ。幸ヒニ本會ノ決議ヲ以テ此寄附ヲ強制執行シテ以後ノ例トナサバ本年モシ再度ノ解散ニ由ツテ再度ノ選舉ニ會スルコトヲ得バ忽チニ此共有基本財産ハ二倍タルノ慶アルベシ。今日ノ勢ニ依ツテ豫算スル時ニハ今ヨリ十年ヲ出ズシテ此基本財産ハ此寄附方法ノミニテ二萬乃至三萬圓ノ巨額ニ増加センハ疑ヒテ容レザル所ナリ。廢物ヲ利用シテ基本財産トナシ選舉ノ禍ヲ轉ジテ共有基本財産ヲ得ルノ福トナスハ是レ自治制ノ功用ニ非ズシテ何ゾヤ、是レ此議案ヲ提出スルノ理由ナリ

と讀畢れば村會は皆バラ／＼と手を拍つて先づ贊成の意を表したり

## 投票賣却決議

此時議長殿と一聲高く呼んで起ち上がったるは年の頃四十三四の分別盛り色黒々として眼光リ口大きくして鬼背逆だち一目にて理屈者と見えたる議員絲瓜筋藏と云へる口利なり「唯今期讀の議案は如何様當村方の爲には至極結構な工夫がアす。既にハヤ兩三日前置右衛門殿が、時に筋藏どん是々の工夫が有る貴君投票を寄附するか、と云はれた時に余は、ソリヤ宜しい余眞先に寄附しやんせうと返答ぶつた位だから余イ異存は有りまし無エが外の人はどうで御座り申すな、議案にヤア承知なけりヤア強制執行すると執達吏どんが瓢箪葛籠を借金ついでの形に押へる様に書てあるが、ソレが屹度出来る事がアすかチクと質問の仕り度がんすと云へば、發議者の深田蛇内は起ち上がつて「成る程御尤もなる御質問ですが、是は法律學士仲間でも随分議論のある點で、僕が東京で法律學修行中にも是に類したる問題が起つて既に法制局では三日三夜休息なしの討論、司法省では其爲に考を凝して腦病を惹起したる局長書記官が四人出來て内閣御雇のアウステンと内務省御雇ブラックストンの論が全く反對になつて、夫れから獨逸の大學者のクラットストーンや佛蘭西のホ

ルランド又は米國のジスレリー氏に電信を以つて問合せたるに、其往復が何れも長文で電信料ばかりが六萬八千圓掛かつて、定額に不足を生じ勅令を以つて豫備金から支出したと云ふ位で御座つた、夫れ程の論題だから中々一朝一夕に講釋は出来ませんが普通思想を以つて解釋する時は『郷に入つては郷に従がへ。長い物には巻れる』と申す格言の通り七十八人の中で既に五十人が絲瓜さんの通りに寄附すると仰しやる上は殘の廿八人は我慢をして村内の爲だから寄附の方に同意するが即ち村内の安寧を謀り秩序を重ざるの道理、ソレを自分の欲にかまけて強情を言ひ張る時は是ぞ安寧を破り秩序を紊るの所爲たるを以つて全株ならば警察權を用ひ場合に由つては憲兵の派出を乞ふても鎮壓いたさねば成らぬ、ソコで大勢の力を以つて何でも角でも寄附の方に無理往生に得心させるは至極尤もの譯合で更に不都合では御座りません、と辯明すれば、一同は成るほどソッパだ流石に東京で法律を修行した深田社内はあらいものだと感服したりけり

次に出でたるは開業醫の金生語と云へる先生、まづ鼻風の外は診察御免を願ふ方が安心なりと思はるゝ程の名醫、羊羹色の黒縮緬の羽織を着て起ち上り「ソコで七十八人の選舉人が投票の代金は寄附するが投票する人は我々が隨意の人にすると云ふ時は如何なさるゝな、と質問すれば、赤腹垂右衛門は悠然として「ソリヤ

行けません、畢竟この村に七十八枚の投票が揃つて一纏に賣り物があるちうので直か有るのでござんす、ソレを一枚づゝ離して賣つちあア、ハア可惜ものが二足三文で三十圓は愚か三圓位ぬにしか成りません、それだから寄附する以上は誰に投票するとも村會委員の差圖次第にせにやア成りません、ソレそれで寄附者に差支へは有りますまいか「ナニ有りやア仕ません、ヨ牛の骨を出さうが馬の骨を出さうがどうで我々共の爲に成る事を相談して呉る奴どもじやア有りませんもの、誰でも構ふ事は無エ、價高く買ふ奴に打ち賣るが宜ござんす」夫れは驚き入つた、貴重なる議員閣下大人の候補者を左様に安つばく言ふもので無い、ソコで僕は現在競争の候補者四五人の方々には執れも人民の爲を思召し下すつて此上も無い立派な人物たれかれ甲乙なしの人物だから誰を選擧しても我々の利益になると信じて此議案を賛成しますが、扱その賣込み方はどう云ふ都合で御座りますな、と穩に如才なく質問したるは馬井幸次郎と云ふ吳服屋の主人なり。田畔泥助は鹿爪らしく之を説明して「云く御尤もなる御質問ですが其實本選舉區の競争は昨今益々烈しく相成りて當村に投票買出しの仲買が入り替へ引き替へ參つて頻りに相談を持ち込みまするに由つて此議案が決しますると委員が村長閣下と打ち合せをして買手を糺らせ廿七日か廿八日の釣際になつてシツカリ上直に賣拂ひまする積りてござり

ます「ウム其でモシ仲買を當村の内て仕やうと云ふ人が有る時には村長閣下は其者にもさせますか、と質問すれば、村長は傲然として「勿論させます、五十圓の上に賣れば其剩金の半額を手數料に與へる積りで御座る。之を聞いて一同は皆我もく仲買せんと心に思ひたれば賛成々々惣起立にて原案の如く議決し直に委員選舉を了り七十八枚の投票一纏直段次第賣渡し申すべしと口上を以つて候補者に通知せしめたり

佐渡は四十九里

「ソレでは先生愈々明朝御出立で御座りますか、と尋ねれば、唐野道筋とて其別號を寒轉輪齋と呼べる候補者の大先生悠然として座蒲團の上に胡座をかき恰も藝者屋の縁喜棚の上に祝奉れる御狸様と一般の形狀にて水戸名産雲井の煙草を村田張の銀管に次で煙を輪を吹かせながら欣然たる顔色にて「左様サ足下も知つての通り佐渡の相川郡には先年僕が遊歴した時に英學法律學經濟學論理學などを教授して遣はしたる門弟どもが凡そ三萬三千三百三十三人三分強もあつて酷く僕を信心なし既に一昨年初度の選舉の時にも達つて僕に出てくれいと態々選舉人總代の者が其勢二十人あまりで依頼に參つたけれど生憎其節僕は足下たちが承知の如く

此東京で運動を初め中途で斷る事も成りかねたに由つて、折角の御依頼だけれど是々だから今度は御斷りを申す悪からず思つて呉たまへと謝絶したら、總代どもが大層殘念がつて皆豆粒ほどの涙を流してシホく〜と引き取つた次第であつた、所が聞きたまへ去冬議院解散の報知が有るや否や其門弟共が僕には一言の沙汰もせずニチャンと被選の資格を拵へて、サア是非とも今度はお願い申す是を聞き入れて下さらぬ曉にヤア私共は相川一郡の選舉人に生きて再び面を合せる顔が無いに由つて身共は痛くツても切腹いたす、イヤ私は寒いのを我慢して角田川に身を投げます、イヤ拙者は王子赤羽の間で鐵道往生をいたす、イヤ某はモルヒネ最期を送るで御座ると揃ひも揃つて死を決したる申し分、ア、此者共に無慚の最期をさせるも氣の毒と例の通り僕が慈愛心の深い所から人情負けをして、エ、そんなら承知して進ませうと返答したら門弟の者共がお蔭さまで命を全うして歸れますと大喜びの大恐悦ヨ、此譯だから仕方が無い此一期は否でも出て遣る積りサと辯舌滔々と吹き立てて、其翌日の一番瀛車にて専生兼執事一人を召し連れ門出を祝ひて出立したりけり。此唐野先生がどう才覺して拵へたるか、政治商賣の連中が思ひも附かざる佐渡の國に由縁を求め漸々の事て候補者に成つたる喜に心も勇み野こえ川こえ山こえて遠路の所を大きに御苦勞、柏崎へ着したるは恰二月廿

六日の午後六時ごろなり。旅宿の店頭に出出したる大字のびら、唐野は生得近眼なれば讀みかねて書生に向ひ「是より朝顔日記宿屋の段の淨瑠璃」コレコレあの張札に何んと書いてあるか一寸讀て聞かせてくれい、「ハイ」ム、選舉演説二月廿七日相川眠黨俱樂部に於て催す、傍聴無料「エ、眠黨の演説と其張札に。「オイ、ハ、アはつと計に俄の仰天。エ、知らなんだ」わいなア。道理で此中から胸騒がすると思ふたが。ソンのならやつぱり阿曾次郎様(オット)眠黨の競争であつたか手後になつては大事。かう云ふ内にも心がせく。直に是から乗船。と行かんとするを引き留め「ア、コレコレマア」御待ちなされませ。折悪う雨も降り出し此暗のに近眼ではあぶない「イエ」たとひ死んでも厭はせぬ「サ、…夫れはそれでも近眼の身ではあぶない」イヤ放して、と突きのけ退却眼鏡を力に降る雨を。更な厭はぬ候補の念力、演邊をさして三重「是より竹本愚頭太夫出語りになる」

「追て行。名も高き。北國一の越後湯。篠を亂して降る雨に打ち交つたるはたかみ。漲り落る水音は。物凄くも亦すましく。選舉を望む念力に道の難所も見えぬ目も。厭はぬ深雪が(オット違つた唐野が)こけつ轉びつ。漸々此に濱の傍「ノウ船頭衆、佐渡の相川では選舉の騒ぎが初まつたか。聞かして、といふ

聲さへも息切の。聲に船頭口々に「オ、其騒ぎは今が真最中だ。ガ俄の大雨で船が留つた笑止々々、と計りにて。皆ちりり〜に行過ぐる「ヤアナニ船が留つた。ハ、ア悲しや、と張り詰めし力も落て伏轉び。前後不覺に泣けるが。又起き直つて霞む目に。空を睨んで「天道様エ、聞こえませぬ〜わいなア。此年月の艱難辛苦。どうぞ一度は衆議院に出してたべ、と片時祈らぬ間とても無きものを。今日に限つて此大雨。船留とは〜エ、何事ぞいのウ。思へば此身は先の世で。如何なる事を罪せしぞ。扱ても〜あぢき無き。焦れ〜て今度の選舉。それに洩ると云ふ事の。此身は如何なる悪業ぞや。三井の戒壇ゆるされず。鼠に成つたる頼豪が。經を嘔りし残念も。身に比ぶれば數ならず。三府諸縣を尋ねても。こんな因果が又と世に有るべきかは、と口説きたて。拳を握り身を震はし。泣涕こがれ嘆きしは。餘所の見る目も哀なり。折柄此に旅宿の亭主。あわてし儘の徒跣「申し〜相川からあなたへ、と差出す電信取る間遅しと押しひらき「なににスクニコイ」と思はず顔に押し當て。落る涙はハラ〜。向ふを見つめて氣も狂亂。扇をつ取り立ち上がり。うるみし泣き聲張り上げて

いと云たとて。往かりヨか佐渡へ。佐渡は四十九里浪の上

大騒動

但見る一個の演説場、聴衆無慮三百七八十名、蓬頭虎髯破裂け鼻怒り、殺氣は酒氣に助けられて紛紛として奥を放ち、賛成は罵詈と共に喧然として場に諱し。樂屋の方にては出席辯士の内幕談「エー會主君、今日の演説は斯いふ人氣が立たる時ゆゑ止にしては何だと昨夜も警察から内々注意が有つたのを君が大丈夫と云つて開會に及んだが、アレ見たまへ、アノ通り、蝶貝君が憲法論を少し初めると忽にワー／＼云つて演説も何も出来は仕ないぜ、其上に煙草盆を打つ附けられたり演臺から引き摺下されたりする様な騒に成つては大變、第一に僕なんぞは怪我でも仕ちやア夫れこそ埋らないからネ……と頗る心配して談じ掛ければ、會主の武甲水之助は内心これも險艱に思はざるにはあらねども弱味を見せじと張臂なし「ナニ大丈夫だ、大丈夫だ此方でも照援の壯士を三十四五人總衆の中に入れてあるから敵塔の奴輩に腕力を用ひさせる様な事は決して無いよ、勿論僕だつて盲じやア無し今日に成つて演説をした所が逆も選舉の間に合ふもので無い事は百も承知て無駄だとは思つて居るけれど、ソコが商賣だ、演説費運動費を請取つた上は眞逆無手で居る譯には往かない

ワ、現に君たちだつて日當一圓の外に今日の演説料を五圓より少なからず十圓より多からざる範圍内で銘々に受け取つたから否でも其價相當だけの事は饒舌つて敵方を悪口して味方の提灯を持つが是れ當然の義務だらうじやア無いか、……ナニモ怖いのは君ばかりじや無い、皆怖いワ、襲撃に遇ふ日にやア一所だもの君一人が今更演説を止ても禍ひを遺るゝ事は六かしいよ、だから死地に陥つたと覺悟して死中に活路を求むる氣になつて勇進し玉へ、平常の廣言にも似合ぬぜ、と會主の武甲に勵まされて辯士の澤蟹無腸は是非なくも順番に至つて演臺に昇り怖々ながら眠塔嘲弄の演題を始めたるに否々の聲諸所より起つたれど幸ひに巡查が豫戒令の権力を以つて制したるに付き少しは靜になり、加ふるに味方の御雇壯士が謹聽々々と拍手するに乗じてズツと氣が乘て来て「實に聴衆諸君の賛成なさる通りで有ります……政黨内閣を立て議院に責任を帯はしむるが立憲の大目的では有りません……我黨が實業者の名を假て政府の提灯を持つのは當然の義務で有ります……我黨は公明正大……民黨は利慾狡猾……民黨は議論を主とするに由つて貧乏無資力、借金山の如く運動費に窮して居る……我黨は財産を鼻に掛けて拜金宗の糟粕を嘗て居る……我黨が時を得れば世間が沈着して國家の元氣が振は無くなる……民黨の利運になれば、社會一般に騷擾が起つて世の中が喧嘩くなる……

反對黨の候補者は民黨の大莖棒……糞野郎……國賊……奸物……民敵……公仇……社會の害物……立憲の障礙物……と悪口を極め掛かると否々の聲が起ると比しく「おのれ怪しからぬ、ソコ動くな、と演臺目掛けて暴れ掛かつたる一隊の壯士。ソレ相止ると味方の護衛。警察官の大喝。中止解散の命令。火入は空を飛び、煙草盆は地を舞ひ。亂拳は亂拳と相打ち。狂叫と狂叫と相闘ひ、恰も是れ一面の修羅場。……事に慣たる會主の武甲水之助は裏口より辯士を逃して用意の樗棒小脇に挟み演臺に飛び上りて「警察官が解散を命ぜられたにナゼ穩に解散をお仕なさらぬ、モシ警官に抗抵する人あらば秩序安寧を重ずるが我塔の主義たるに由て武甲水之助は警官に力を添へて此棒を以つて正常防禦を仕り升るぞ、といつものに無く警察官の命に従ひ尤もらしい假聲は流石に氣轉の利たる漢なり

辯士の宿所では演説の歸路に一行のものが暴徒に襲撃せられて命からんぐ逃げ歸つての大騒ぎ。寶丹よ千金丹よソレ水を顔に吹き掛けよと介抱すればウーンと云ふ息を吐き、虫より細い聲を出して「オイ此は何所だエ」こゝは旅宿よ「ソウカ、僕は閻魔の廳かと思つて居た、それじゃア僕はマダ生きて居たのだナ」生きてる所かピンくだよ「ウ、早く醫者を呼んで療治に掛かつてくれい大方灸所に掛かつて居るだらう」ナニガ

サ、何處がサ「何所どころか肩先から脊髓に掛けての大傷だもの」ドレレレ見せ給へ……傷どころか何んとも成つて居ないよ、と言はれて澤蟹無腸は両手を廻して撫廻し「ム、成るほど何處も傷に成つて居ない、ハテナ過刻稻邨の陰から出てアノ騒の時に儘に僕に研付けた暴徒が有つてヒヤリト仕たに相違なかつたが……ム、扱は造物者が身替りに御立下さつたのか、イヤ待てヨ僕は神佛不信心第一だから神だつて酔狂に身替りにも立つまいヨ」見せ玉へ……ドレレレ、ハ、ア君の桶神襟から背中に掛けて少し濡て居るぜ「ソレレレや先きの騒きて松の枝から雪の塊が落たのだらう」道理で冷りとしたと思つたハ、ハ、ア折しも開ゆる騒ぎの物音。又もや襲撃かと驚き周章で様子聞けば「大變々々利塔の壯士が反對塔の候補者を擲たと云ふ噂ヤア」又騒動が起つた、反對壯士が眠塔の辭無所を打毀したぞ「壯士が強談に押寄せたぜ」「向ふ横町では掴み合つたぞ」「アレ道悪で按摩さんが轉んだ」「オヤ藁所でお三どんが桶盆を破した」「ヤア小僧が廊下で土瓶を引くり返した」「裏の藪では犬が噛合ふ」「天井裏では鼠が驅廻る」「屋根の上では盛の附いた猫がニヤムウー。フッー

案外の合戦

明れば三月一日源平兩家の國争ひも今日を限りとぞ見えたりける。平家の陣には彌隙の内腐胸凝候補この四五日以來軍の駈引投票の借集に夜も碌々御寝ならざりければ御頭にはピン／＼と頭痛を打たせ御眼は眦釣し上つて朱を注ぎ呼吸の息に胸の焔を吹せ玉ふ御形容は左ながら生身の天狗を拜むが如くにて凄まじくも亦怖ろしく見え玉へり。明ゆくまゝに森の鴉の二羽三羽を離れて打ちつれ／＼此方を指て飛び来る、内腐は小博士辻裏を召て「あれは如何、と問玉へば 辻裏「さん候ふあの鴉御陣の屋峰に止つて喜び鳴きを仕候はば今日の御勝利疑ひ無く候ふべし、去りながら飛び去り候ひなば事危く思召たまへ、申す間も無く彼鴉共は阿房々々と嘲り笑つて飛び過ぎける。是を見て内腐は門出の悪さよといと心細うぞ思ひ玉ひける

源氏の陣には大將軍愚弄御候補押強、陣頭に床凡を立て自から下知を傳へておはしたりけるが、朝霧のほの／＼と消ゆく隙より遙に平家の陣を御覽じて宣ひけるは「如何に殿原、敵方の有様をば何と思ひ候ふぞ、抑も先年第二期の選舉に於て味方の輩油断なして候ひける不覺より此二ヶ年の間は言ひ甲斐なくも利塔の平家

に世を狭められたる無念骨髄に徹したり、今日こそ一戦に勝ちを得て、且は年頃日頃の鬱憤を散じ、且は君の御爲に世を鎮めばやと存じ候ふなれば殿原にも其心得あつて働きたまへ、構へて貳心あるべからず。似是三郎傍盛承はつて「御説信に尤もにこそ候へ此傍盛を初めとして是に候ふ者ども命をば何時の爲にか惜み候ふべき今日の戦必定御勝利と覺へ候へば御心安う思し玉へ、と申しければ押強も頼もしうぞ思ひ玉ひける

はや卯の刻(午前六時)にも成つたりければ平家の陣より一人の壯士、借金地の直垂に液臭にほひの鎧きて強迫造りの太刀を佩き二十四差いたる寄留の矢を背き毘藤の弓脇に挟み厚皮面の兜をば脱て高紐に掛け、橋の板挿退て現はれ出で源氏の陣に向ひ、大音聲を揚げて「是は彌隙の内腐に頼まれ奉つて是まで所々の演説に妨害の功名を上げたる悪質病衛禿清と申す剛のもの、頭の光にても見覺えておはし候はん、抑も今日の競争に向はせ玉ふ大將は誰殿にて候ふぞ御名乗らせ玉へ、承はらんと内腐の仰せられて候ふぞ、と喚はつたりければ、源氏の陣より痛字擾突、才覺に小刀縫はせたる直垂に大螺目の鎧きて鼻耳打つたる兜の緒を締め似是もの造りの大刀を佩き大風呂敷の襦袢を懸け出鱈目の明神より現に賜はつたる大長刀を杖に突いて門の扉の内より顯はれ出で「言も愚かや今日競争の御大將は平和權道奇代の浪人齟齬紙悪友の苦男愚弄御候補押強、

こんど無智院の御使として此手には向はれて候ふなり、斯申す僕それかしは痛宇滑稽尉いたうすつげい擬突ぎつと申すもの、此旨屹度彌この旨屹度彌隙の怖こわいどのへ申されよ、と返答したりける。悪質病衛禿清あくしつびやうきよは啞々からくと打笑つて「扱つかは此程迄某新聞社の食客あきやうして役にも立たざる理屈を書散し眠塔の提灯持して僅に其の目をば送つたりける愚弄書生であるよな、其それに従ふ和殿わだんばらば一日二十錢の下錢げせんにて雇はれつる瘦浪人の似壯士にせぞうしなるらんが素剣みんけんの功力を頼みになし内府に向ひ奉つて闘たかはんずると思ひも寄らず、疾々旗を巻まけて歸るべし、と罵りたりければ痛宇擬突いたうぎつあざ笑つて「和殿原こそ官の塔王が後胤とは名乗れども官塔稼くわぐに追おひ附かずとは昔のよ今では官塔子澤山世を駭おそがせる非違ひゐの習な唯今にも保安條例公の譴責とがめを蒙らぬ内に其陣を拂はひ候へ命知らずの田舎者かな、と罵返したり「言闘ことばたかに悪口申さんに於てはなどか己等に負くべきぞ、勝負は今日の辰の上刻うしじ(午前八時)其時こそ思ひ知らせて呉べきなれ「云ふにや及ぶ正八幡弓矢神の擁護ようごは正しく我方にあるべきぞ……と罵り合ける中に、はや刻限になつたりければ兩陣互に我劣らじと旗差物を三月の春風に翻やまひして選舉の戰場へと押寄たり。兼て期したる今日けの戦なりければ、投票の買入同志の響應もてなし、演説、強談、脅迫、詐誦さまつ、壯士の遊軍、俠客いんせの援兵は云ふに及ばず人力攻、蒲團攻の奇計妙策くわいめうさく、を先途と争ひしかば其喚聲おほこゑは上あげ梵天ぼんてんまでも聞え下しもは底根磐そこねいまでも響く

とぞ驚きたる。戦の勝負は申の刻まで(午後四時)定らざりしが其中に所々方々にて小路合戦の打ち合掴み合ひ起つて果は敵とも味方とも見え分らず、當るを敵と引組んで淺ましき有様は見るべうもなかりけり。内腐はかすり傷少し負ひ給ひたる上に侍士まじらひともを見失ひ茫然として御座おはしたりけるが天を仰て嘆息なし「歸ラン乎歸ラン乎我黨の壯士狂亂驟然トシテ暴ヲ成ス之ヲ制スル所以ヲ知ラズ……」

○嘘八百の嘘の皮全く剥はけて選舉競争の結果は各新聞に報道せられたる如し、固より居士の魂は政治海の風波には蛋たまごが食くつた痕あとほども掛かり合の無い身分、誰が勝かつて誰が負まつて誰が我ニ於テ何カアラン先づ是て筆戯の年明け率一睡いせと肱枕ひさまくらア、世の中に寝る程樂は無いものを何所いどこの痴漢ちかんが起騒たちさわぐらんと口吟みて夢野が魂に眼を告げ少し打睡うちまどろみける、時に影の様なるもの居士の前に來り壁に建掛けたる琵琶を取つて乙おとに半間はんまなる聲にて可笑おかしう平家をぞ語つたる、好める道とて耳みみを飲のみて聞けば○六道むだう(平家物語灌頂卷の原文を参照すべし)(柴口説)總領おほせありけるは、夫れ我國は立憲政體なりとは申せども、恐ろしくも民權世たみけんに蔓はり、塔派たつぱの主とはなつて、随分一ツとして心に叶ふと云ふと無し、就中英學流布あひやくの世に生れて、政塔内閣せいとうないかくの志こころあれば、世間の迷惑めいわくは疑ひなし、人間の仇なる習、今更驚く可あには候はねども、又御形勢おんけいせいを見參らせ候ふに詮方しんぽうなう



こそ候へと、仰せければ、門員重ねて申させ玉ひけるは、我身走利公の乾兒として政談の辯士たりしかば一  
 天四海は皆螺吹きほらふの儘なりき(折聲)建白の春の初より、色々の心變り、解散の年の暮、中等以下の末流末派  
 にもてなされし有様は、六欲五障ろくよくごせうの雲の上にて、八萬の諸鎮しよちんに圍遶かねうせられ侍ふらんが様に、惡漢盡く仰がぬ  
 ものや侍らひし(中音)厚生錦輝かうせいきんまの館の内、演壇の上にて持囃され、春は骨牌の櫻に心を留て日を暮し、九夏  
 三伏の熱き日は氷を飲て心を慰み、秋は海の上の月を獨り見る事を許されず、玄冬素雪げんとうそせうの寒き夜は火燧を懐  
 いて暖にす(初重)内閣更迭かうかくの時を願ひ、政黨軋轢あつれまの機を尋ねても、只騒がん事を思へり(葉口説)明けても  
 表面は榮へ侍ひしと、官員の果報も是には過じとぞ見えし。斯て己丑の年の暮、一味の人々、保安條例のりやすそりとか  
 やに恐れて、住馴し都をば雲井の餘所に顧みて、東京を燒の、腹と詠めつ、昨日まで現を拔せし新橋より  
 汽車に乗せられ宿送り、流石まさかあはれに覺えて(中音)晝は茫茫たる枯野を分けて袖を濡し、夜は洲崎の千鳥  
 と共に泣明す、浦々國々山ある所も有りしかど、相談の事は忘らせず(葉口説)斯くて頼かた無かりしかば、  
 五衰必滅ごすゐひめつの悲かなしみとこそ覺え候らひしが、人間の事は愛別苦離怨憎會苦あいべつくりおんぞうあな、俱に我身に知られて侍らふなり、四苦  
 入苦一ツとして殘る所侍らはず、偕ても鎮西をば國民派帝權黨とやらに、九國の内をも追ひ出されて、山野

廣しと雖も、立より語ふべき輩たがひもなし。同じき秋の暮にも成りりしかば、昔は隅田の川の畔ほとりにて見し月を旅  
 店の窓に詠めつ、明あし暮して侍ひしに、斯て神無月のころ躁顔せうがんの衷狂あつらが(折聲)都をば政府の爲に追ひ拂は  
 れ、鎮西をば國民派が爲に追ひ出さる、網に懸れる魚の如し、何かは望を達すべき(指聲)永らへ果べき身に  
 も非ずとて、塔員除名して吏塔に沈み侍らひしぞ、瓦解わかいの始にては侍ふなり(三重)漠然たる政治の論にて日  
 を暮し、評議の中にて夜を明す、稼業かせわざも無ければ工夫を附くる道もなく、(下ケ)適々なまく工夫を運めらさんとすれ  
 ども、資本なければ整はず、貸手ありと雖も、抵當なければ借様もなし、是れ餓鬼道の苦とこそ覺え候ひし  
 が、(白聲)去る豫算審査其他の問題に負けしかば、一味の人々色少し變つて見え候ひしに、議院解散とかや  
 にて、二度の苦心水の泡と消え、宗徒しゆとの輩たがひ半過はんかて背そむきしかば、各洋服高帽を引替へて、旅の支度を身に纏  
 ひ、明けても暮れても競争いそぎの聲の絶ゆる事の無かりしは、修羅しゆらの闘争とうそう、帝釋ていしやくの争も是には過じと見えし。斯  
 て眠塔ねいとうの寨せを攻落されて、親は子を怨み、妻は夫を罵り、沖に釣する船を見ては、憲兵の來るかと思を消し、  
 遠き松とほきに群居むれる鷺さぎを見ては、反對の旗を上げるかと心を盡す。扱選舉いさくけふの曉に、軍いさけふは今日を限りと見えしとき猪  
 鼻のびな申し置くとこそ侍らへ、されば今度の競争いそぎに御身が多數を占んとは、千萬ひとが一つも有り難し、假ひ又遠き

由縁は生残つたりとも御身が本望達せん事は有り難し、選挙には力を用ひぬ習ひなれど、如何にもして當選なし利塔の目的を遂げんには、壯士とて助けさせ玉へ、と申置候ひしを唯夢の心地して覺え候ふなり(口説)浮雲厚うたなびき、風急に吹き覆ひ、輿論公議の攻撃に運命盡て腕の力に叶ふべしとも見えざりけり。既に斯と見えしとき、猪鼻我等を勸めて這々と場の外に出しかば、我等は心も身も落附かず、抑も我をば何地へ具して逃んとするぞと尋ねければ、猪鼻涙をばらりと流いて、(折聲)君は未だ知し召れ候はずや、年來の法螺高慢の御力に依つて、今候補の員に入らせ玉へども、悪縁に引れて御運は既に盡させ候ひぬ(菜口説)先東に向はせ玉ひて、似是門閥連に御暇申させおほしませ、其後西に向はせ玉ひて、再應騒動の教唆はせじと誓はせおほしませ、此塔は破壊革命とて、恐ろしき境なれば、國民民福とて愛たまき所へ移らせ侍ふべしと、泣々搔詢いて申しければ(中音)甘鳩色の此顔に鼻毛の延たるが、おろろ涙に濡れ、穢く汚れたる帽子を取つて、先づ東に向ひて似是門閥連に後足にて砂を蹴掛け、其後西に向ひ身の懺悔をなせしかば、猪鼻やがて手を引き、逃出したる有様、目も暮れ心も消え果て、忘れんとすれど忘れず、忍ばんとすれども忍ばれず(初重)残り留つたる人々の嘲り罵る有様は、叫喚大叫喚、焔の底の罪人も是には過じとぞ見えし(白聲)人目

の關を忍び来て、舊里に歸り侍ひしとき、わがみの國横しまの市とかやに着て、些うち睡みたりつる夢に見候ひしは、都の俱樂部には少し勝たる所に、大盡を初め參らせて、一味の人々、心細氣なる顔色にて並居たり、選挙に負けし後は、個様の所をば、更に見ず、此を何くと問ひ候ひしかば、龍宮城の利劍國と、答へし迄は愛度かりし所なり、扱是には苦は無きかと問ひ候ひしかば、足空の殿と覺しくて龍齋經に見えて侍ふ、後世よく吊はせ玉へと、申すと覺えて夢覺ぬ(菜口説)其後は殊に讀經念佛して後世を願ひ候ふなり、是皆六道に違はじとこそ覺え候ひしかと申させ玉へば、塔領仰せありけるは、異國の虚騷三藏は迷ひの前に民権を夢み、我朝の正付上人は翻譯講義の力に依つて獨逸を夢見たりとこそ、承はつて候へ、眼のあたり六道を御覽せられける事こそ寔に有りがたらは候へとて、御泪を流させ玉へば、愚部の人々皆袖をぞ濡されける(初重)門員も水涕を流させ玉へば、參り合せたる壯士たちも皆欠をぞ仕たりける(琵琶の音)レントン

是でおしまひ永々御退屈さま

667

片輪車叙

666

嘘八百

嘘八百終

## 片輪車叙

癡病ちへいの女乞食をんなこつじきの片輪車かたわぐるまに乗りけるが、鮫さめが橋はしの畔ほとりにて自害せるは、由ありげなる事なりとは、天明七年の老人記に見え、また某の大名の次男が、賤やうしやしき女俳優やうしやに契りて、子を設け、其爲に世評に懸りたること、明和頃の雜記に載せられたれば、彼と是とを一つに成し、且つ某が家の騒動と言ひ傳へたる事蹟に基きて、此一小説を作りたり。第廿回までは、數年前に稿を畢まへたれども、其後さほる事ありて、其儘はこそ匣底はこに埋め置きたるを、取出して、更に十回を書加へて一部となし、春陽堂に付與して印刷に附す。讀者の爲に徒然つれづれの一興とも成らば、著者の幸甚し。

明治三十年四月

櫻癡居士しるす



## 第一回 朝倉家の繁昌

一門の榮華此こゝに集まり、一族の富貴益々榮え、世は泰平たいへいの久しきに、劍は鞘かたに納め弓は囊ふところに入れ、四海浪風穩なごみに治まれる徳川家の世盛りなれば、上は將軍家を初として、諸大名旗本より、下は町人に至るまで、華奢くわしゃ風流に心を委ゆだねね、樂しみ暮して日を送るに他事なかりければ、江戸の繁昌、今を極まりと見えたりけり。いで其頃は天明五年神無月かみなしづきの上旬じやうじんの事なりけるが、澁谷の里なる朝倉家の別荘は、庭の紅葉もみぢも節知顔せつちがほに染出し、花壇の菊も猶秋の名残を留とどめられたれば、例年の如く一家一門の方々を招じて、紅葉の宴に半日の興を催すべしとて、其催しに及ばれたるは、是ぞ東山道にて指さしなり敷へられたる名門の諸侯、朝倉修理大夫景元あさくらしゆりだいのかげもと(廿八歳)にておはしける、其座くらに列つらなりたるは、先づ嫡子式部丞景正しやくのじやうかげまさ(十八歳)已に將軍家の御目見おめみえも濟みて、家督に定まつたる方なれば、争ふべき人なしとて、景元の

傍らに着座ある。次に客席の上座には、朝倉大内記則重(三十一歳)分家と云ふ條、八千石の交代寄合ひにて、幕府にては大名同格を以つて取扱はれ殊には嫡流の家柄なるを以つて、上座御免と席に即けば、續いて其弟、妻木雅樂助信重(廿八歳)是は妻木の家を相續して、二千石の御旗本、書院番を勤めらる。次には其弟朝倉采女元重(廿五歳)また曹司の身なれども、修理大夫の烏帽子子なれば、此座には据られたり。此方には大内記に相對して着座あるは、脇屋下野守義勝(五十九歳)これ修理大夫の叔父にして、御小姓組番頭を勤められ、三千石の御旗本なり。其次には同じく新太左衛門義春(三十五歳)去年御使番より御目付に昇り、權威尤も盛なる方なり。其次には星影宮内直勝(三十二歳)修理大夫が異母の弟にて、幕府の御使番を勤め、二千石を領せらる。其次には下野守の次男、脇屋小次郎義秋(二十六歳)いまだ曹司の身分なり。扱て其次に、横座を打つて同席したるは、當家の家老職岩田備中信高(四十二歳)とて、修理大夫が妹婿。その次には、子息岩田大内藏晴高(二十歳)修理大夫の姪なれば、當家の御嫡式部丞とは從兄弟の間柄と知られたり、其外重職重役の面々には、御相伴を免されて、次の間および三の間に伺候して、綺羅星の如く袖を列ねて居並びたるは、誠に時の催とぞ見えし。既に配膳に及び、献酬の禮、一順事畢りし頃に、入側の杉戸を靜に明けさせ、

徐やかに入り來り玉ひしは、當家の後室眞弓の方とて、修理大夫の義母、先君朝倉彈正小彌景則逝去の後、剃髪あつて身を佛門に委ね、貞松院殿とは稱せらる(五十六歳)その次には當家の奥方操前(三十四歳)まだ左せる姥櫻にはおはさねども、御子數多設けさせられたれば、御粧もわざと目立ぬ様に沈たまへるは一入満たしく見えたりけり。貞松院の御手を取つてお側に附添はれたるは、朝倉家一門の中にて、絶世の美人と聞え、其名は江戸市中までも響き、其噂も早月御殿とて、世に高き静姫君、(十七歳)これは貞松院の御實子にて、即ち修理大夫の御弟、故民部少輔景友の忘れ形見にて、貞松院には眞實の御孫なれば、常に側に同住して、寵愛殊に勝れさせ、修理大夫御夫婦にも分て不便がらせ玉ひけり。此外一門の奥方、御新造、姫君たちを初め、局侍女まで、次第を紊さず附き添て席に着きければ、夫々の挨拶に及び、貞松院より杯を廻らされ、其作法を畢りて、又もとの如くに退座ありければ、後は酒宴と成つたりける。修理大夫は初より正座に居て、機會を計り玉ひしが、折こそ宜けれと容を正し、兼て心に思はれたる一儀をぞ發議に及ばれたる。

## 第二回 景元の義心

朝倉修理太夫景元は、やをら一座の面々に向ひて、「今日は入來を幸ひと、篤と相談に及びたき一儀の候ふなれば、一門たりとも曹司の方々、並びに家老重職の輩には、暫し遠慮あるべし」と宣へば、面々は畏つて其席を退きたり。後には嫡子式部丞、朝倉大内記、妻木雅樂助、脇屋下野守、同新太左衛門、星影宮内なりければ、修理太夫は膝を進めて、「方々の賢慮をも相尋度きは、餘の儀にあらず、唯今某が母上(貞松院)と共に出座いたせし静姫は、御存じの如く、某の姪女なるが、抑も我等が祖父越前守殿(景光)には、年五十に及び玉ひし迄も、一人の男子なく、實子とては眞弓御前とて一人の女子、即ち貞松院殿にて御座すなり。依つて親族の縁あるに由つて、淺井家の次男を以つて御養子となし、家督を譲られたり、其御養子こそ我等が父上の彈正少弼殿にておはせしなれ。然るに、貞松院殿には御婚姻の後、正に數年を経れども出生の御子なきを憂ひ、父上に勤めて側室を置かれたるに、程なく其側室の腹に宿りて出生せしは即ち某。貞松院殿は大きに喜び、出生の時より直に其養子と成し、惣領には立られて、御慈愛恰も實の子に異ならず、斯て、六年を経て、

貞松院どの常ならぬ御身とならせ玉ひ、月滿て生み落されしは男子にて、民部とは名づけられたり。父上には、民部こそ正しく朝倉家の血統なれば某を廢して民部を家督に定めんと仰せありしを貞松院殿は堅く吞みて、いやく修理は妻が惣領の嫡子にて候ふを、民部が生れたりとて嫡を變へんと思ひも寄らぬ御事なりと、父上に諫め止め玉ひたり。其後某總角の頃に至り其由を承り、更めて民部家督の事を父上に願ひ、其御許しを得たる上にて、所存備さに母上(貞松院)に申し上げたりければ、以つての外の所存なり、卿は妻が子にてはあらざるか、何とて母が心に悖り、由なき隔意を懐けるぞと、御涙を流させての御不得心。この上は力無し其儘に致し置き、其後父上には御隠居あつて、某家督相續なし當主と相定まつたる後に、民部には當家十八萬石の内より三萬石を與へ、内分分地の願ひを出し、將軍家の御許を得て分家せしめ、民部少輔景友と名稱らせ、定府の諸侯に爲したれば、父上の御悦は申す迄も無く、母上にも此上無き御満足これ方々にも御承知の所なり。然るに民部には今を距ると十年前、安永三年七月に廿三歳を一期として死亡りければ、父母の御嘆き一家の悲み、實に限り知られぬ事どもなりき。其うへ民部には別に相續の男子なきを以つて、分地は其儘某へ返り、元の高には復したるが、民部の墓を拂ふべき血の無きは遺恨千萬、尤も某が兄弟には、

妹澤姫とて家老岩田備中の妻、並に宮内殿とも現に三人あるなれども、何れも側腹の出生。あはれ正腹の民部の由縁、せめて落し種にてもあるならばとて、其の頃密に聞き及びたる事もあれば、六角左太夫に申し付け、内々尋ね出せし處、民部いまだ司曹のころ、賤き女に情を掛けて出生の女子ありて、佐々木源五兵衛に托し、人知れず養育せしめたりと相知れたれば、直に迎へ取つて面會せしに、其傍は亡弟の忘れ形見、依つて母上に願ひ、我館にて成長せしめたるは、即ち靜姫にて候ふぞ。此事十年の歲月の其間、方々に秘し家來どもにも漏さざりしは、別に仔細あつての故にあらず、元來彼が父民部に一旦分ち與へたる三萬石、再び彼に戻し遣はし、民部が血統を立んと、某が望なれば年頃に成るを俟て一門の中より良銀金を擇ばんに、早く此事明白に知れ渡らば、却つて一門の争ひを起さんかと、掛念いたせし故のと。然るに靜姫、今年既に十七歳、見らるゝ如く容顔も醜はしければ、一門の若殿は誰にもあれ、よも不足には思はれまじき歟。是に就いて某が第一に望を掛けたるは大内記殿の弟采女元重なり。尤も烏帽子子ゆゑ、殊に寵愛の故にあらず、采女が祖父の能登殿は、我等が祖父越前守殿の御兄にて、原より朝倉嫡流の家筋なれば、此人を以つて靜姫に配せんば、先祖へ對して孝養とは思ふなり。方々御所存何に聞ま欲し」と演たまへり、

### 第三回 脇屋父子

朝倉修理太夫が心底を打明したる相談に、一座の方々は互に顔を見合せて、答ふる人もなかりしが、稍あつて大内記は扇を笏に取り直して申されけるは「御説至極御尤に存じ奉る、故民部殿の御形見たる靜姫殿に、分地三萬石を與へ、良銀金に相續せしめんとの思召こそ、御慈愛の至りに候へ、誰かは異議を申し述べ候ふべき。但し其養子に愚弟采女元重を擇ばれんと、如何これあるべきか。尤も殿の御烏帽子にて、既に御一字まで賜はつたる者なれば、兎角の仔細なきには似たれども、此大内記は敢て其儀を勧め奉らず。諾否の如何は、此議に限り、都て當人の所存に相任せ申すべし。詮ずる所は養子御分地の御趣意は、御同意仕れども、弟采女その仁たる儀は、御當家の御爲かつは當人の爲にも、然る可らずと申す愚意にて候」と、詞涼しく述べられたる大内記の心の底、仔細ぞあらんと思はれたる。修理太夫は案外の思にて、「養子分地の事には御異存なけれど、采女を其仁に勧めぬとは、ム、扱は某が姪の靜姫が、御邊の氣に適はぬ故か、但しは三萬石の分地は、采女に取つて不足なりと思はれて歟」と、詞忙しく尋ねらる。大内記は威儀を正して「こは存じ寄りざ

る御尋かな、静姫殿の御事は當代の美人その隠れなし、斯る姫をば妻にさんは申さば男子の果報と云ふもの、又采女事は某が弟、この末他家へ養子に参るとも、若くは當人の器量次第で立身いたさうとも、凡そ先の知れたると、夫れに三萬石の大名に列せんは、望ても得られざる仕合、いかて不足の候ふべき、然るを某が御勤め申さざる而已かは、然る可からずと申し上げたるは、御當家の一門、某が一家のみに非ず、此御列座は何れも殿の御連枝にて、殊には御血統の近き方に、然るべき御養子の御人體も數多これあるに依つて、斯御辭退は申し上げて候ふなり、願くは御分地の事、先づ今日の御相談は止められ、御養子御人選の儀は、後日の御評議に御延し成され度」と、一座に心おく霜を踏んでは堅き氷の至るをば、未前に察する大内記、實に朝倉の嫡流なり。初よりして默然と評議を聞いたる脇屋下野守磯勝は、己が次男の小次郎養秋、丁度似合の年頃なれば、静姫の嫁になし、三萬石の分地大名、自分は其隠居ぞと、相談の央より其内心にて居たるに、采女と云ふを聞よりし、目的は外れて心中に快からず思ひし所に、大内記が辭退を聞き、是幸ひと進み出て、「天晴なり大内記殿、御手前様の御辭退は理の當然、この下野實に恐入つて御座る、併し折角に太夫殿の思召なれば、御得心なされては如何て御座るな、失敬なる申し分だが、骨も折らずに寢耳に水で、三萬石の大

名に成れるとは、采女殿の身に取つては牡丹餅で頬端、夢見た様な身の果報で御座るぜ」と、勸る様に見せ掛けて、綿に針を包みたる下墨詞の嘲弄口調は、意地を持たせて采女が事を破談させんず下地。夫れとは知らず、子息の新太左衛門義春は、兼てより持たが病の嫉妬根性、采女が出世を娟く思ひ、父が底意は更に知らず、何がな障碍なさんとして父が詞の畢るも待たず「コレサ父上、何を仰せらる、凡そ大名の内分分地には、夫々慣例作法のあるもの、民部殿こそ太夫殿の御舍弟なれ、其息女に嫁取つて又候ふ分家再興とは、是迄諸家に是なき新例、大小日付の評議にて、御聞届けに相成る事やら甚以つて浮たる事柄、尤も拙者御役目に於て、斯様の事を口外すべきは御座らぬが、御一門の御間柄ゆえ、内々御心附けを致し置く、殊更あの静姫は、賤い者の腹に宿つたと申す事で御座るが、母親の素性は相分つて居り申すが、イヤサ、素性不慥の女の出生、それが判然致さぬ内は、良んば御願立てに相成つても、御沙汰の程は覺東ない、先づ夫れから御取り調べが第一で御座らうぞ」と、夫れと知つてか知らずか、當時御老中出頭第一の田沼殿の氣に入り、然も御目付と云へる御役柄を肩に着て、傍若無人の挨拶振。修理大夫は、其詞に不興を増し、何か言はんと仕たまふ様子、場合悪しと星影宮内、眼使にて押止めて「先づ今日の御相談は是迄にて然るべし、尤も御一門の



密議なれば、御他言は無用なり」と、鏝打て其座は是にて終つたれば後は酒宴に時を移されたり。

#### 第四回 朝日の巫

茲に淺草の片端に、朝日の巫と云へる婦人あり、何れの出生にて如何なる素性か、誰ありて知る者もなければ、其言語にて察すれば、慥に江戸生れと思はれたり、年の頃は三十五六にて、盛は過たる女なれども、世に勝れたる美人にて、其若かりし頃は、嘸かしと思ひ遣られたり。二三ヶ月以前より此所に来り住ひ、京都土御門殿の許を得て、人相手の筋を鑑て吉凶禍福を占ふ事を業となし、門弟および下部などの男ども三人を召し遣ひて、朝日の神子と標札大きらかに認めて、訪ひ来る人を俟たりけるが、此巫の占は不思議にも宜中りて古の指の神子にもをさく、劣らざる程なりと云ふ噂の立つや否や、其評判忽ちに江戸中に聞え渡り、遂には名門高家の奥向にも召されて、親しく占を命ぜられ、頗る繁昌を極めたり。朝倉家にては後室貞松院かれてより人相占等の事を好ませ玉ひ、殊には御寵愛の御孫静姫君の行末に附き聞ま欲しと思召し、此程より屢々御使を朝日の巫が許へ賜はりて、參上すべき旨を仰せ遣はされしに巫は何と思ひてや、朝倉家の御奥

とあらば、存する旨のあんなれば、辭し奉るとて出向はず。然るに辭退さるれば、猶見たくも聞たくもなるは人情の常にて、大名高家とても敢て異ならねば、枉て參上すべしとて、御使三度に及びしかば、巫は人々の勧めに任せ、去らばとて高弟の勝見權四郎を従がへ、淨らかに身を整へて溜池なる朝倉殿へぞ伺候したる御奥の阜月御殿には、御隠居貞松院殿、静姫君と共に、尊を並て御座を据させられ、朝日の巫を招き入れさせ玉へり。朝日の巫が、局の案内に連て入来るを見玉へば、髪は平元結にて髻を結びて長く後に下げ、肌には白の二ツ衣に紅の切袴を着て、上には唐織の袷を襲ひ、白木の文臺の様なる机に幣束を載せたるを、手から身から両手に持つて、重々しく設けの座に就き、禮儀を畢りて後に机に向ひ、侍女が持出して傍に置いたる手箱の内より、天眼鏡および笹竹算木など取り出して机の上に置きならべて、用意已に整ひたれば、貞松院殿は「如何に巫御前、これなるは妾が孫の姫なるが、其身の行末吉凶如何に、占もし、又その人相をも視て思ふ所を述べ聞せてよ」と仰すれば、巫ははつと畏まりて、初より静姫をも貞松院をも見ずして眼を閉ぢて居たりしが、この時恐るゝ顔を上げて姫を見しが、忽ち顔色蒼白になり、思はずワタと震へ出したり、コハ口惜と心を勵し、幣束取つて何やら呪文を唱へ、やがて卦を置きて後に、姫の近くに進み寄り

て、御顔ツクくと打眺め、右の手を取つて天眼鏡に透して篤と見畢りて、如何は仕たりけん、兩眼に纏る  
 許の涙を含みて蓄の座に直り、唐衣の袖にぞ落る雫を止めたる。貞松院殿、靜姫君を初として、其座に並  
 居たる局女中たちまでも、不審の巫の振舞やと怪みたるに、巫は再び眼を閉ぢて黙然として居たりけり。貞  
 松院は堪がたく思召して「ヤヨ巫御前、姫の身の上如何ぞや、利御前の舉動いとど心に掛かるぞや」と仰せ  
 ければ、巫は兩手を机の上に置きて「思はぬ涙に、御心を苦しめ奉るこそ恐入つて候らへ、既に封面にも顯  
 はれ、御相にも見えて候ふ上は、憚り存じ奉る節の侍るとも、アナ勿體なし、争て神の御告げを偽り隠し申  
 すべき、抑此姫君は、御果報の殊にいみじくて、御當家には生れさせ給へども、前世の御戒業の拙なかりし  
 故にや、賤しき筋の女の腹を借て宿らせ玉へるぞ朽惜き、尤も其腹とて、其原を尋ねなば、筋目なきにも非  
 ざるべきが、尋ね極め玉ふ時は、却つて姫君の御身に迄も、思はざる祟の及ばんと恐しく候ふなり。唯この  
 上は、無上の榮華立身を望み玉はず、萬事御控へ目に遊ばして、良んば一段も二段も劣るとも、然るべき御  
 方を御君に取らせて、安らかに御身を終り玉ふこと專一と存じ奉る、實に御果報は御座しながら、御身に受  
 けさせ玉ふ事の叶はぬは、定業と明らかめ玉へ、御心推量り参らせては、巫も同じ女にて候らへば、思はず落

涙に及て候ふ」と述たりけり。貞松院殿は御心の中に、扱は此程太夫殿が、此姫君に御養子として分地せしめ  
 ん事の評議に及ばれたる時に、脇屋父子が何やらん不得心の様なる口振にてありしと聞つるが、其望は叶は  
 ざるとの占かと、思ひ當らせ玉ひしが、夫れとも明らさまに宣はず、巫も亦その上に申す事も無く、祿物  
 たまはつて、其日は御暇を下されたり。然るに、此巫の顔容の靜姫君に似たるは疎か、左ながら瓜を二ツに  
 割たるが如きは、是ぞ諺に他人の空似と云へるものによと、局を始め女中までも皆取々に噂したれば、貞松  
 院も心の中に、他人にて斯も似たるものかなと、竊に思し召されけり

第五回 岩田備中

朝日の巫が、靜姫の身の上を占ひ参らせてより、貞松院は深く此巫を信仰あつて、其後も度々参上の事ども  
 仰せ遣はされしかど、巫は固く辭みて召に應ぜず、左あらば御使もて御尋ねあるべしとて、時々巫が許に女  
 中使を差向られ、何暮と無く占を尋ねさせ玉ひけるに、巫は朝倉家の御使と云へば、何時も心に染まぬ様  
 もてなしけれども、御使は絶えざりけり。此に朝倉家の老職、岩田備中信高と云へるは、前回にも記せし如

く、當主修理太夫の妹澤姫(先代の妾腹)を妻に迎へ、大内藏晴高と云へる一子をも設け、家老とは云へ一門の親あれば、威權は内外に高く、飛鳥も落ん計りの勢なり、然るに此備中は齡すてに不惑を踰え分別盛りの年輩にて、文武の道にも疎からず、殊に政治向に心を委ね、領分の民百姓を憐れみ、一家中の武士足輕に至るまで、情を隠て取り扱ひたれば、心底の邪正は知らず、此家老なくてはと、皆人毎に譽立て、人望日々に加はつたり。備中表面にこそ斯く賢人を眞似て、只管に人を懐けたれ、其性質を尋らへば、素より佞奸邪智の曲者にて、兼てより心に深き非望を懷き、何かな好機を待ちたりけるに、計らずも觀楓の宴の寄合ひに、主人修理太夫が一族を集めて、民部少輔跡式分地の相談に及びたると聞き、此時なりと備中は心に諾き、貞松院へも修理太夫へも頻に其事を勧め、扱かく定まる上は、我倅大内藏は、現在我君の御傍にて候ふなれば、朝倉の御姓を賜はり、御家門に列し玉はる様にと、先づ其端緒を啓きたるが、夫れに就ても、奥向に然るべき方人を得ま欲きものと心を碎きける折柄に、ふと心に浮びたるは朝日の巫が事なり、彼女この節貞松院の信仰を得たる巫なれば、我方人に附けたらば一廉の効用あるべしとて、竊に其手段を運らして、巫が身の上を探らせたるに、彼が高弟なりと呼べる勝見權四郎と云ふ者は、其以前は猿又三之助と名乗りて、原は

旅役者にて、其後番具師となり、淺草の奥山、あるは回向院の境内にて、見世物渡世したる邪師なりと分つたれば、猶も其素性を探つたるに、當時橋町の踊子瀬川奴と云へる流行子は、其妹なりと知れたれば、幸ひなりとて備中は、酒宴の席にて奴を知つたるに由り、呼近づけて身の上の話に涉り遂に其兄の權四郎を招き寄せ、酒食を興へ金銀を取らせて其心を蕩かしたれば、原來不良漢の權四郎なれば、慾にほだされて、實は己が巫の良人なりと云ふ事まで打明けて、誇顔に話したり。備中は愈々是に縁を得て、權四郎を我味方となし、同人より巫を何と無く説かせて、終に巫と數度の面會に及ぶ迄に運びたり。備中は初より巫の顔容の靜姫に酷く似たるを心に怪しみたれど、色にも出さずして體よき話しにもて做て、巫を懐けたれば、巫は初めは厭せく思ひたりし備中を情けある人と思ひ、此の人ならば、ことに寄つては我が心中の一大事を打明けて頼むべき歟と考がへたるぞ淺ましき。或日備中は供をも具せず、唯一人にて黄昏近き頃に、巫が住家は此所なりと聞知つて突然に音信て「權氏は居るか、朝日御前は家にやおぼす」と案内しつゝ、返事も俟ず押上つて障子を明け、奥の間に入つて見れば、恰も晚餐の頃とて、巫は權四郎と一ツ膳に向ひて、酒のみて居たりけり。巫も權四郎も備中が來れるに驚きて、俱に顔打赤めて、周章ながら取り繕ふを押止めて「ハ、ア朝日

御前、去とは他人向の接遇かな、弟子にもあれ良人にもあれ、和御前が權氏を酒の相手に致すこと、何の不  
 思議のあるべきぞ、此備中も好物の酒なれば、いざ一盞振舞たまへ」と、杯取つて其の座を繕ひ、殊更に打解  
 て「イヤ何も角も備中は固より承知、橋町の奴をば恥し乍ら某が情を掛けて世話する上は、此權氏は取りも  
 直さず某が兄貴も同前、その縁に繋がる和御前ゆゑ、固より他人とは存じ申さぬ、御身にも打明けて語り玉  
 へ某も折入つて御身に頼の筋もある」と、膝を進められたれば、巫も同じく進み寄り、權四郎と共に三ッ鼎に成つ  
 て額を聚めたり

第六回 秘密の相談

備中は聲を潜めて申しけるは「既に權氏には話し置きたれば、御身も定めて聞て在さん、靜姫君は貞松院殿  
 の眞實の孫にて、女ながらも朝倉家の血統、それ故に亡父民部殿の跡目、三萬石分地の爲の御養子いま其評  
 議の眞最中、然るに、靜姫は民部殿の隠し子にて、其母と申すは、言に言はれぬ賤しい素性……イヤサ腹は  
 假物じやと申しても、其腹も腹に由ると、尤も其素性は、側用人の佐々木源五兵衛が死たる後では、存じて

居るものは某ばかり、秘密の上の秘密ゆゑ、決して漏るゝ氣遣は無けれど、先日評議の御席に於て、脇屋  
 殿父子の衆が、其素性を糺されば、分家の沙汰は相成まいと、言ひ出だされたる横槍は、若や秘密を知つた  
 るかと、此備中が心の苦勞、扱また我主人修理大夫殿が、大内記殿の舍弟采女を、靜姫が舞にせんと仰せあ  
 りしは、先頃より奥向の噂に聞ば去年御本邸の觀櫻の折に、靜姫が采女と二人で、御茶屋の椽で話を仕て居  
 られたを、垣間見たる女中の口癖、イヤ何でも御二人は色であらう、イヤ相思の中であらうと長局の噂沙汰  
 それを貞松院が聞き込んで、主人にでも話された故であらう、所て脇屋下野守は、又その次男の小次郎を靜  
 姫の御養子に仕度が内心、それに又加役の新太左衛門殿が、壯年をして岡嫉妬とは笑止至極、併し斯く話をも  
 つれて來ては、大内記方脇屋方と、雙方の睨合に相成つて、何れに團扇が上つても騒動の基、氣の毒なは靜  
 姫の身の上、コリヤ別に何とか宜工夫を附けねば、御家の爲に相成らぬ、其上ならず、主人の奥方操の前に  
 は、御嫡子の式部承殿、その次には定姫とて今年十六歳の御息女あれば、同じ分地に成るものなら、垢の他  
 人の靜姫よりは、自分が生の定姫をと思はれんも亦女の情、さう成つた曉には、貞松院が御一人御座つて  
 も、靜姫の御身の上は、決して安心なり難し、此に一ツの手段と云ふは某が一子の大内藏晴高は、當主人の

甥にて、正しく静姫とは従兄弟の中、先つ頃、密に艶書を静姫に送つたとか、送られたとか云ふ噂あつて、是以つて素より證據も無き事なれど、世の人口を憚つて、其以來は某より申し付けて、大奥へは某と同道の外出入無用と差止あるが、近日改めて御家門に列せらるゝ上は、某が考ては、大内藏と静姫とを夫婦になして、某その後見たるこそ、尤も宜かるべしと思ふなれ、夫れに付けても静姫が心を定むると尤も大切なれば、巫よ御身此事を引き受けて聞玉はらずや、大内藏には某が屹と申し聞せて、敢て異議は言はせまじいぞ、此事成就する時は、貞松院も安心あつて、第一静姫には、不肖ながら岩田備中が附添ひ居つて後見の大磐石、その上に權氏とても、某決して見捨は致さぬ、武家になり町人に成り、望に任せて取り立て申さん、殊に御身の望の筋も、何にもあれ備中が力の及ばん程は、適へ得させて進ずべし、去りながら、若も静姫、ほかに意中人ありて、大内藏を嫌はるゝと有らば、強て云はんも其甲斐なし、其時は脇屋父子の衆が、根を掘り筋を尋ねて、静姫が生之母の素性を問糺し、何なる禍難その爲に起るとも、此備中は更に頓着いたすまじ、吳々も此邊を考へて、静姫にも心を早く定めらるゝ様に、御身の取り做、頼み入り申す也」と理を分たる備中が依頼。朝日の巫は胸に徹ふる話の始終、もしや我身の秘密を知つてか知らずか、如何なれば斯く相談掛けられ

しぞと干々に心を惱めつゝ思案にあぐみたりけるが「兎も角も仰せには背き申すまじ、朝日が力にて、成り得ん限りは試み候ふべし」と諾ひてければ、備中は大に悦びて猶も密議に及びたり。

### 第七回 静姫の心移

朝日の巫は岩田備中に語らはれて、如何にもして朝倉家の息女静姫をば、岩田が一子の大内藏に縁を結ばせんものと思ひ、兎も角も試み候ふべしとは諾ひたりけるが、夫れに付いても其の大内藏と云へる子息を見知らずでは便り悪し、殊に其人物をも一應は見置かでは如何にも不都合なりと心附きたれば、其後岩田が宅に赴きて大内藏に逢ひたるに、此大内藏は今年廿ばかんなる若き漢にて、美男と云ふ程にはあられども、眼鋭く鼻筋通りて、自から威風を備へたる人なれば、巫は稍々心を休め、此人ならば静姫の夫になしても、敢て憎からぬ男なりと思ひ定め、其日は暇を乞ひて我家に歸り、朝倉家の御使をば、常はいぶせく思へるに引替

て、早く來よかしと俟たりけり。  
去程に、四五日も経て、朝倉家より貞松院の御使とて、奥女中は巫が假住居に音信て、懐より恭しく貞松院

と静姫との兩人が引かれたる一字の紙を出して、此墨色に付き吉凶如何に其判断を尋ねたしとの趣を述べれば、巫は暫し此紙を打眺めて御使に向ひ、「別に是と申して御變は在せ玉はねども、姫君の御墨色を見奉るに何とやらん御心に掛からせ玉ふ事のおはしてか、喩ば明月の上に薄雲の懸つたる様に見えて候ふ、但し其上の御事は、御墨色のみにては臆氣にて此巫には善惡とも分り侍らず、御沙汰に由つては御邸へ参上いたし、親しく覗ひ奉るべうもや候ふべき歟」と答へて、御使ひをば歸したり。果せるかな、其翌日再度の御使に及ばれたりければ、巫は然らば参上仕るべしとて、溜池なる阜月御殿に罷登りて、例の如く占ひ觀まわらせて後に、巫は膝を進めて申けるは、「明ら様に申し上んは、憚り多う存じ侍れど、言はて止まんは心苦しく覺え候ふまゝ、打附に述べ候はん、先頃召されし時と今日とは、姫君の御運は遙かに開けさせておはしますこそ目出度う候らへ、是は思ひの外なる所より御後見の出て、現在その人は姫君にも御存知の人と見え候ふ、但し其はいまだ御心附ず在まし玉ふならん、唯恐るべきは、姫君の御心の底にて、此人はと思し召すなる其方は思ひの外姫君の御味方であらで、誰とも未だ心に掛けさせ玉はぬ方こそ、御身の爲に頼もしき後見て候ふらめ、……イヤ／＼左な宣ひそ、其兆は既に物事の上に顯れて候ふを、凡夫の悲しさには、是と見極の附ざ

るにて侍れば、遠からぬ内には、朝日が申したるは此事にてありつるよと、思ひ當らせ玉ふ事の候ふべし、努々疑はせ玉ふまじ」とて御硯箱を乞ひて短冊にさら／＼と走り書して「此歌の心よく判じて御覽せ玉へ、其上にて猶も申し上ぐべし」とて其日は態と罷りけり。静姫は巫が書たる短冊を取り上げて見玉へば、筆の運びも拙からで、

おほぬさの引手あまたにきこゆれば

思へどえこそたのまさりけれ

とは書いてありぬ。静姫はつく／＼見て、「此歌は伊勢物語に載せたる歌にて男をあだなりと聞いて、つれなさの餘りに、讀て遣はしける歌なるを、巫が書て置いたるは抑いかなる心にや」と其心を解せて、案じ煩はせ居玉ひけり、斯て巫は我宿に歸りて後に、猶も種々心を運らし、既に古歌もて静姫が心を動かし迷はせ置たれば、徐ろに是より手段を盡し、兎も角も岩田父子を後見に附くべしとのみ、思を碎き、他事なかりける。さて此静姫は、岩田が云ひたる如く何の程にか大内記が弟の采女を見染め、初戀の心の動きたりければ、采女も固より姫の顔容と云ひ心ばえの優なるを慕ひ、誰が架け渡しけるか、戀の橋の下紐とく迄には至らぬ

ど、物いひ替して末樂しみに思ふ程の中とはなりにける、然るにいま又巫の詞にて、其頼みも漸々疎になり、外に心を移す様に變りゆくこそ憂てけれ。其事は後回に詳かなり

### 第八 朝倉大内藏

高きも卑きも凡て女心ほど變り易きものはあらじ、別けて春心動きたる處女が、初戀に思ひ染めて其人を慕へる初には、水の川端の様にあんなれど、絶て其人を見ざるときは、いつと無く疎くなりて、外に心を移す事もあるものぞかし、朝倉家靜姫とても亦その如くにて、此春の觀櫻に采女を見染め嬉しき五ひの語らひに、未だ枕こそ交され、此人ならでは外に男子はあらじと迄に、思ひ詰めて慕ひたりけるが、當時諸侯邸の風とて、男女の中の隔ての厳しかりければ、其後は采女と顔合する事も無く、消息の往來も、其架橋の無き儘に、音信すべき様も無くて打ち過たり。然るに此姫に心をよせ、或は玉章もて、或は侍女の傳をもて、思の丈を言ひ寄せたるものは、彼の脇屋が次男の小次郎義秋と、岩田が惣領の大内藏晴高の二人なりけるが、靜姫は其玉章さへ手にも觸れず押戻して、耳をも傾けずして居たりけるに、其頃に至りて、朝日の巫が申したる占

の節々に、我が思はざる人に頼もしき後見のある由を聞き、其人は誰やらんと、心の中に案じ煩へる處に、侍女どもに向つて、巫が大内藏殿は尋常の若殿原の浮たるに似もやらず、いと頼もしき心掛けの人かななど、賞ける由を聞き、若し此人にやと思ひ居たるに、今また巫が書示したる古歌さては采女には引手あまたの女のあるなれば、頼むに足らずと云へる知らせにてあるかと、考へに餘つたり。

此に岩田備中は、兼て深く巧める大望のありければ、倅大内藏御一門に列せられ度旨の願を出し、貞松院の附の局女中へは、費を惜まず音物を送り取り成させ、又朝日の巫して占に事よせて同じ趣を言はせたる程に、金銀の力は其験大いに顯はれて、大内藏の評判は、修理大夫の膝下にも、皁月御殿にも通り好く、誰あつて彼是と異議するものも無く、其議尤も然るべしと勸めたり。然らばとて、修理大夫は其年の十一月十五日の佳節を以つて、改めて大内藏を召出し、上段の間の同席に於て禮酒の獻酬を行なひ、一門に列し一字を與へ、朝倉大内藏元高と改名せしめ、連枝とはなされたり、尤も修理大夫が妹の出生にて甥に當る大内藏なれば、敢て異數と云ふにはあらねど、家中一門みな目を側だて、其威光を羨み、心ある儂は此末如何と愛ひたりき。斯て大内藏は右の御禮として奥へ參上なし數々の献上物ども奥方操御前へも奉り、殊に貞松院殿

静姫君には心入して差上げて、夫々に一門の對面を行なひしが、夫れよりしては早月御殿へ日毎の贈もの引  
 もきらず、月に雪にかこ附けては、貞松院の機嫌を窺ひ、御意專一と心掛けて、眞實まごころに振舞たれば、貞松院  
 は世に頼もしき者に思召し、座臥に大内藏々々と宣ふ程に、静姫もいつと無く其詞に心動き、憎からず思  
 ひ玉ひ、朝日の巫に夫れと無く占はすれば、「此頃すでに静姫君の後見は近く在おし候ふなるに、此巫に問はせ  
 玉ふ事の侍るべきやは」と答へ奉りたり。其上に早月御殿の侍女の中にて、静姫が氣に入りつる某など云へる  
 者は、寄々に大内藏の噂をなし、果は玉章を取次ぎ、返詞を静姫に書せて大内藏に送り、老女は固より賄の  
 黄金にて耳は聾なくなり目も盲またれば、侍女は心太くも手引して、大内藏をば早月御殿に伴なひ、冬の夜の闇  
 を便りに静姫が寢室ねやに導きしに、静姫も大内藏が爲に下紐を解かせたるぞ淺ましきの限にてありぬ。  
 却説、脇屋小次郎義秋は、おのれが心を寄せたる静姫には、采女と云へる女敵めかたありけるに、今また大内藏が  
 一門に進みて、早月御殿の覺めてたしと聞き、愈々嫉妬に思ひ堪兼て、其由を語りけるに、父の下野守は云  
 ふも更なり、兄の新太左衛門も大に胸悪く思ひ、畢竟この分にて差置きなば、采女か大内藏の兩人ふたりの内にて、  
 一人は静姫が舞となりて、分地三萬石を物するに至るべし、是妨ふさげではと密に其計畧を運らしたり。

## 第九回 後家お澤

此年(天明五年)の歳暮としのくれの除目に、脇屋新太左衛門は御目付おめつけより御徒頭おたてがしらに歴選れきせんなし、明れば天明六年の正月に、  
 火附盜賊改役を命ぜられたり、此の御役は當時普通には加役と稱して、逮捕たいほ糾問きうもんの事を司つかさどり、其古いにしへの檢非違  
 使しの如き役柄にてありければ、おさく威權ありて世に尊たげられしかば、愈々川沼關老の爪牙つまがとは成つたりけ  
 り。或日新太左衛門は、密かに父の下野守に謀りて申けるは「扱あも静姫には、去年既に分地と事定まり、近  
 日大内藏か然らずば采女をば、舛養子にすべしとの内議ありと承はる。詮ずる所、さありては兼て我家の物  
 に、かの三萬石を成さんとの望は斷え果て申べし、之を妨るには先づ内々にて静姫の身に疵を附るが專一な  
 り、夫れに附ては先頃も某が氣附の通り、彼姫が母を取調ぶるに若くは無し、尤も此程より、朝倉家の用人六  
 角左太夫を尋れたるに、彼静姫は側用人そばにやうにんの佐々木源五兵衛より受取たる趣にて、更に其素性を存じ申さずと  
 の申し立、依つて源五兵衛が身の上を尋れたるに、彼は七年前貞松院の騎奢を愛ひて諫を爲し、其事よりし  
 て修理大夫の勘當を蒙りたりければ、祿を辭して浪人なし、其後程なく死去いたし、唯今にては彼が後家の



おさはと申すもの、悴源次郎娘おゆみと三人にて、本所吉岡町にて微の住居に其日を送り罷在る旨、其筋の探整にて相知れ候ふ、就ては何かに事よせ、此お澤を召寄て静姫が母の素性問糺さば、必らず相知れ申すべし、此義如何思召され候ふや」とありければ、下野守は打詰きて「よくこそ心附たれ、然らば其方の手にて十分に詮議いたされよ」と答へたり。左らばとて新太左衛門は其奸策を運らしたり。

此は脇屋新太左衛門が邸の白洲：「本所吉岡町家主彌兵衛店、浪人佐々木源次郎母さは」と呼び出せば、應と答へて手先等が、腰繩打て白洲の上に引出したるは、四十三四の婦人、着服とても姿々しきが、此四五日は召籠置かれしと見えて、顔色は蒼白て髪もおどろに亂れたり。椽側には脇屋新太左衛門、自から出て隸屬の役人等を遠ざけて、お澤に向ひ「朝倉家の元家來佐々木源五兵衛が後家さとは其方よな、斯掛かり役人共を遠ざけ、此方自から相尋ぬるは、大切なる事柄なれば、包み隠さず有躰に申し上よ、先年其方ども夫婦にて、朝倉民部少輔より預かつたる静姫と申す女子、その出生の母親は何者なるか、逐一に申し立よ」と思ひ掛けなき尋ねの個條。お澤はハツと打驚き胸蕩きて暫し詞も出てざりしが、故主の大事、姫君の浮沈は

此時なり、假令主君の怒に觸て浪人なすとも、故民部様に見込まれて頼まれたる秘密の大事は、背を割れて鈴の熱湯を注込まるとも、口外すなとは、夫が今わの遺言なれば、此の時なりと心を定め「是は〱思ひ寄らざる御尋、もはや十六七年前の事ゆゑ、確とは記憶て居りませぬが、或夜夫源五兵衛、出生より漸く三月も経たりと覺しき女の子を、懐に入れて歸り來り、此御子こそ正しく民部様の御種、仔細あつて某へ密に御預けなされたれば、御養育いたし申すべしとの差圖、それより乳母を抱へ入れ、夫婦が手鹽に掛けて御育て申して居つたる中に、民部様は御他界に相成りまして、其御中陰の後に、當殿様の御説とあつて、夫源五兵衛より六角左太夫へ御渡申し上げて御座りました」とは答へたり。脇屋は「ム、其儀はさうて有うが、シテ其静姫が母と申すは何者だ「ハイ其母は何者やら一向に存じませぬ「イヤ其方が知つて居らぬ筈は無いが「左様に御座ります、夫源五兵衛が存生て居りますれば。是は心得て居つたて御座りませうが、私は些とも存せず、又源五兵衛へ尋ねた事も無く、同人より私へ咄した事も御座りませぬ「黙れ、さわ、其方が其母の素性委しく存知と申す事、御上には御存あつての御尋なるに、隠しだてを致す不埒の女め、白狀いたさぬに於ては、不便ながら拷問に掛けても言はするぞ「いかにお叱を蒙りましても存知せぬ事は致方が御座りませ

ぬ」と、流石は民部少輔が、其秘密を明かして、一子を託したる佐々木源五兵衛が後家のお澤、覺悟を極たる返答に、新太左衛門も、コハ一應の威迫にては白状せざる面魂の女なり、猶詮術あるべしとて、其日の尋ねは是に止めて、獄屋の内に撃ぎ置きたり。

第十回 花川芳江

話頭一變て、此に朝日の巫が高弟、勝見權四郎と云へるは、前回にも述たる如く、元は猿又三之助と呼ばれたる不良漢にて、蛇娘、猿小僧、蜘蛛男、大女と、何にまれ常態に變つたる者を、尋れ出しては江戸に連れ來り、見世物に出すを渡世となせる香具師にて、俗に野師又は因果者師と呼ばれし者なりけるが、淫酒博奕に身を持崩して、果は妻子を置き去りになし、逮捕を恐れて江戸を逐電し、近在遠國を彷徨しが、其後大阪に登り、河原者の群に入つて、其日を送り居たりけり。然るに、其頃千日前の小屋掛けに、道化師と云ふ名を附けて興行なせる小芝居あり、其座には花川芳江と云へる女役者ありて、年の頃は三十一二、さかりは既に過ぎたれど、世にも稀なる美人にて、舞も唄も其伎勝れて秀でたりければ、江戸芳江とて専ら世間の評判もの。可

惜女や、賣て是が歌舞伎者か、又は尋常の身分にてあるならば、如何なる人の妻にも隠妻にも成るべきに、乞食の群に居る事の不便きよと、皆人ごとに噂したり。權四郎も原來この仲間に親しく交はれる者なれば、同じ江戸者として、芳江といつしか懇意になりて、果はわり無き中とは成りにけり。權四郎は芳江に勸めて、同じくば、何とかして此の群を脱け、立派なる女俳優になりて、世にも噂されなば如何と勧めたれども、何故にや此芳江は、同じ所に永く止まりて、人に面を晒す事を嫌ひ、もはや大阪も是までなれば、更に他の地へ罷りて、別に姿を更へんこそ望かりとて肯ぜざりけり。其後權四郎は、いき見世物の種を得て、京都に持行き興行したる中に、權四郎は博奕および其他の悪事露顯して、町奉行の獄に撃がれたり。芳江は其ころお勝と名を變て居たりしが、立寄る木蔭も無き所に、如何にしてか、陰陽師の某とて富たる者と、密に狎染て、深く己が身の上を包み、隱妻の様に成り、木屋町邊に住居たりしが、其時よりして觀相卜筮の事など其陰陽師より教を授かりしに、天性器用の質とて、其術の呼吸を吞込で遂に其傳書秘法までを窮めたり。程なく其陰陽師の牀に就きて、今は世に果なく成りける時に、お勝も看病とて其枕元に侍つたりければ、遺言には死後に至り、聊の黄金と觀相卜筮の書物道具どもは、皆お勝に譲り與へたり。是よりしてお勝は、更に土

御門家より其免許を乞ひ受て、朝日の巫と名乗り、専ら其門を張たりけり。斯て其後權四郎は刑期満て出牢したるに由り、お勝は又再び權四郎と關係を結びて、去らば京都も是迄なりとて、江戸へは下り來りし事はなりぬ。

權四郎が江戸に置き去りしたる妻は、其頃すでに死果たれども、其悴に吉之助と云ふものあり、是は權四郎にも増たる悪漢にて、既に十七歳の折に、權四郎に勘當を受け、諸所を彷徨ひ、今年方に廿七歳、幻の吉之助と人に知られたる破落戸なり。父の權四郎が、今は江戸に歸りて、淺草なる朝日の巫が高弟と面表を飾ひ、其實は夫なりと偵り知つたりければ、好資本の穴を得たりとて音信たり。勘當せしとは云へ、おのれが實子ではあり、別れて丁度十年ぶり、其恩愛に絆されて、若干の黄金を與へ、是にて何業にてもあれ商賣の途に取附けよと恵みたるに、忽ちに酒色博奕に遣ひ果して、其後は度々の無心に、權四郎も困じ果て、況て朝日の巫のお勝は、猶更以つて忌み嫌ひたり。今日は二月の八日、春とはいへど朝夕は、まだ肌寒き頃なるに、吉之助は女もの、布子を身に纏ひ、其夥伴の小猿信吉と云へる者と打連て、巫が家の勝手口より入來り、權四郎を尋ねたるに、其の日は權四郎は他出して巫のみ家には居たりけり。巫は吉之助が合力にほと／＼愛想

を盡したれど、我夫の子と云ふものを、無下に歸さんは、權四郎が思わくも如何なりと思ひて、聊の黄金を紙に包みて「今日は權四郎殿も留守なれば、御身の用は便ずまじきが、是は私が心入れ、これ持つて往き玉へ」と與へたり。忝なしと吉之助は戴いて取り納め、そ／＼に暇を告げて外に出で「サア是て寒凌の飲代は出來たるぞ、如何に小猿、和主は手を又き小首を傾けて何を考へて居るぞ」と問へば、小猿は「さればなり、幻よ、あの巫が和主の父の妻と云ふが、其面さしの河原者の金次郎に生寫し、しかも聲音まで其儘なるは不審しと、合點ゆかずに考へて居るにこそ」と答へたり「ハテそりやア他人の虚似にやあるべき、彼巫も我父の妻となる程の女なれば、まさかに素直の女では有るまいが、乞食の出ではよもあるまじ、其や其出にもせよ、斯く黄金を與ふれば、我爲には大切なる御得意よ」と打笑ひて、藏前の方にぞ歩行たる。

### 第十一回 幻小猿

幻吉之助は、朝日の巫が恵みの金に仕合よしと、悪友の小猿三吉と俱に、いで一酌せんとて、藏前より淺草御門を入り、路を轉じて横山町の方に赴きたるに、向ふより供の漢に包を持せ、小棧を取つてわざと雪の足

を露し、歩行み來れる一個の佳人は、其頃花柳社會に名を轟せる橋町の踊子やつこなり(今の藝妓)此やつこは前回にも演たる如く、實は權四郎が末の妹にて幻が爲には叔母に當る者なれども、幻は幼くして權四郎に勘當を受けて家出なしたる者なりければ、斯る血縁とは知らず、唯々橋町の瀬川奴とて、當時流行の踊子と知つたる丈なり。況て小猿は猶更以つて知るべき様もなかりければ、幻が目くばせに、小猿は早くも夫れと悟つて、少し足早に歩行て、ドンと奴に突當る。突當られて打驚き、身を外さんとする所を、幻は行違ひ様に、奴が島田鬻の髻に指たりける珊瑚珠の太き七分ほどもある銀足打ちたる簪を抜き取つたる手練の早業、アレと云ふ間もあらばこそ、黄昏の往來繁きに混れ入り、雲を霞と逃去たり。供の漢は大いに氣を焦立て、追掛けゆかんとするを制して「左まで周章に及ぶべき、僅に簪一本にて、數多の人に顔を見られ心の底まで測らるゝこそ耻かしけれ」とて去氣なき體にて、招かれたる酒樓を指て赴きたるは、流石に瀬川の奴なりと、居合せたる人々は知るも知らぬも感じたり。

箱崎の畔にて、川を前にしたる小體の酒樓に、障子の衝立を陰になし、差向ひにて酒酌交して居たるは、幻吉之助と小猿三吉と兩人なり。酔の廻はる儘に、小猿は例の高調子になつて「ム、幻兄イ、今日はお前の淺

草行で一才飲代に成つてから、其歸り道が横山町の大仕事、コレじゃア運が直つて來たぜ、所で我も早く其配當を貰エ度」と云へば、幻は打諾いて「承知だよ、我だつて幻の吉之助だ、手前の骨は盗ま無エや、併し莫大の品だから、浮かり仕した所に持つて往つて見れエ、直に足が附いて逮捕まア、神田の叔(蓋し贓物買)に相談して金にするまで俟て居るイ「ム、そりやア承知だ、そう話が極て居りや安心だ、時に兄貴、あの朝日とやら云つたお前の爺の妻さんは、どう考へても小屋者の金次郎にそつくりだぜ、我やア去年ごろ少し譯があつて、その金次郎と心易く仕した事が有つたが、其節金次郎が云つたにやア「余は委しく知られエが、余の叔母に當る御守殿お高と云つた女は、滅法界美人で、踊も甘く出來たさうだが、十六七年前から往衛知れず、生きて居るなら三十四五であらう」と云つた事があつた、が顔恰好と云ひ、年輩と云ひ、動もさうな様に思はるゝね「さうかも知れれエが、夫れじゃア手前、我が爺は小屋者の亭主だと云ふのかイ」少し怒りを含んで詰り掛ければ「コレサ兄貴、そう腹を立ちやア困るぜ、何も我が小家者の亭主だと云つた譯じゃ無し、唯噂話に仕た丈の事だなア「噂話だつて大體に仕る、面白くも無エ「イヤそう言はれちや我も面目無が、我が悪かつたから、マア堪忍して呉ねエ」と詫入れれば「ム、そう云なら、何も我が別に腹立と云ふ譯でも無け

れど、餘りそんな事ア言はれエ様に仕るイ……隣まじりの座まじりに圍座まじりしたる四五人は加役かやくの探偵たんてい、この邊あたりに見込みこを附けたる悪漢わるものありて、之を調逮てうたいんとて此酒樓しよろうに集まつて綱つなを張はたる所なり。職務しよくがらとて先程さきほどより幻小猿まじりの兩人ふたりが談話だんわ、様こそあらめと耳みみを澄すして聞きたるに、兼かて御頭ごとうの脇屋わきや殿どのより、密ひそに身みの上うへを探盤たんぱんせよと内命うちめいあつたる朝日あさひの巫まじりに由縁ゆかりのもの、マダ其上そのうへに、過さ刻こく横山町よこやまにて大仕事おほしごとを仕たと云ひたるは、奴やつが簪かんざしを拘摸くもたるに相違ちがなし、何なににもせよ見遁みのがす事ことやあると、彼の探偵等たんていらは直ただに手筈てづかを定め、其一人ひとりは突然とつぜんに衝立つむぎの外そとに出て「モシ御免ごめんなせい、お前まへさん方は、過刻こく横山町よこやまで簪かんざしを御拾ごしよひなすつた御連中ごれんちゆうでせうが、どうぞお返しなすつて下くだせいでし」と云ふを聞くより、扱あはと悟さとるまぼろし幻まぼろしは、それと小猿こざるに目めで知らせ「へエ、イエそんな事は一向いっこうに存ぞんじませんが……」と隙ひまを窺のぞひ、二階にがいより飛下とんとする處ところを、ドッコイ遣やらぬと四五人四五にんにて押止おしとめ、重かさり合あひ、遂ついに繩なわを嚴げんしく掛けて、脇屋わきやが役宅やくたくへぞ引ひいたりける。

## 第十二回 處女のお弓

朝あまだきに朝日あさひが巫まじりの假宅かりやまを音信おんしんれて「母ははの災難さいなん、兄あにの病氣びやうき、この末すえの事ことともいかに候まをふべき、哀あはれ御占ごせんひ下くださせ玉たまへ」と打萎うれて、涙なみだに眼まなこを腫はしたるは、十六じゅうろくばかりなる處女ぢよむにて、身みには怪あやしの布子ふしの處々あちこちに綴つあて、垢染あかぢたるを纏まとひ、目めも常とこられぬ様ようなれど、自おのからなる顔容かおようは世よに秀あでて嬋娟せんげんにて、村雲むらぐもに覆おはれたる月つきの如ごとくぞ見えたりける。巫まじりは筮竹しちやくを算あへ卦面くわめんを考かんがへ處女ぢよむの人相ひとあひを觀みて「御身ごみが母御ははごは、思おもはざる疑あやひを受うて、今は獄屋いどやに繋つれておはすよな、又また兄御あにごは傷寒しょうかんの邪熱じやねつにて、今は九死くじ一生いっせうの境さかいにて候まをふと覺おぼゆるが、母御ははごの災難さいなんは、一年いちねんを経へぬ中に、疑あやひ晴はれて原もとの身みに成なりたまふべきが、但ただし事ことによつては其間そのまに命いのちにも關かるほどの憂目うれめをも見たまふならん、兄御あにごの病氣びやうきは是こゝも覺東あきとうなき危あやきに臨まめども醫藥いやくの手當てあての行届ゆきとどかば本復ほんふくもあるべきが、非命ひめいの最後さいごを遂ついげらるゝの恐おそあり、また和御前わごぜんは一方ひとかたならぬ苦勞くるうを重おもぬる相あひにて、猶なほ此上このうへに愛事あいごとの限かぎりに逢あひ死しんとまでも思おもひ玉たまふ事ことの一兩度いちりやうどもあるべきが、孝行きやうぎやうの徳とくにて末すえは運うちも開あけて愛度あいどかるべし」と占うらなひて其旨そのこゝろを諭さとしたりければ、處女ぢよむは恭こなき由よしを述のべて懷こころより鳥目とりめを出だして敷しへ、紙かみに包かみて「僅わずかの御初穂おんはつほ

耻かしう候へども、心ばかりの御禮なれば、納めさせ玉はれよ」と差出だしたり。其舉動もの越しは、天晴身分ある人の息女と云ふとも耻しからぬ取りなりに、巫は座に哀を催して「イヤ其料には及ばぬものを」と押返したれど、處女は「いかでさる事の侍ふべき、切に納め玉はれよ」と乞ひたりけり。巫は然らばとて受納めて「扱も御身は如何なる人の御娘なれば、かくも苦勞をし玉ふぞ、母御の災難、兄御の病氣、御身を助けて世話し参らする親戚の方はおはさずや」と問へば、處女は涙に聲を曇らせて「かく優しく問はせ玉ふ上は、何をか包み奉るべき、父は元朝倉家の侍にて、佐々木源五兵衛と申し、者にて候ひけるが、仔細あつて浪人なし、五年前に死亡て後は、母と兄の源次郎と妻の三人にて、本所なる吉岡町に幽の烟を立て候ひけるに、今月の上旬、母は加役の脇屋殿に召捕れ、今以つて牢に繋がれて候ひぬ、兄は酷く驚き憂ひて、家主その外を頼み、其罪を密に尋ねければ、今より十七年前とやら、父にて候ひける者が、主君の次男民部殿とか申し、御方より、隠子の姫君をば預りて、其後その姫君を御隠居へ差上たるに、其姫君の素性を知るものは、母の外に無きゆゑ、それを御尋あらん爲、しかるに母は深く是を秘て更に申し立てぬに由つて脇屋殿の御怒り厳しく、拷問に掛けても白状させんと御見込なれば、尋常の事にては中々赦さるべうもあらずとの噂にて

候ふ、兄の源次郎は、貧苦の中にも、母の難儀を救はんと、千々に心を碎きつる折から、情なや夜寒の風に胃されて、此程よりして邪熱を起し、本性までも失ひて、讒語ばかり云ふ程の苦しみ、母が牢屋の差入物、兄が病の看病まで、妻一人が計ひも、其日に迫る貧苦の身の上、手も廻らねば資も無く、途方に暮て候ふぞ」と語るも涙せき合ず。巫は聞くより胸の中、ハツと驚く話の刺符、扱は佐々木源五兵衛の妻は捕はれて、靜姫が生まの素性を尋ねられ、白状なまらずに居つるか、胸の立波打騒ぐを、自から押へて涙を拭ひ「初て聞いたる御身の上、アツ孝心深き處女なるに、なか神佛の擁護し玉はざるべき、心強く思ひ玉へ、御兩人とも御命には別條なし、是につけても此巫も、母に死別れて今の悲嘆の思をなすものなれば、御身ごとき孝女を助くるは、母の菩提を用ふ功德、聊かなれども巫が恵みの此黄金、これ持ち返りて兄御の看病、母御の差入れ、その補にも成したまへ」と傍の手箱より黄金若干紙に包みて處女に與へ、辭退するをば説つ諭し強て受納させ「猶その上に用事もあらば、必らず來ませ、御力になり奉らん」と信切に云ひ聞かせたれば、處女は巫を伏拜み、左ながら地獄にて佛に遇ひ奉りつる心地して、幾度か恩を謝し「左らば母兄の爲に此贈物を用ひて救ひ候ふべし」とて嬉し悦びて去つたりけり。此處女は即ち前回に述たるお澤が娘のお弓なり。

## 第十三回 脇屋が訊問

却説も脇屋新太左衛門は幻吉之助、小猿三吉の兩人を白洲に呼び出し、一通りの尋問を遂げたる上にて、竊に心に思ひけるは、かの朝日の巫と静姫とが顔色容貌、瓜を二つに分つたる如しとは、兼て朝倉家の侍女どもより聞及びたる事なるに、今また其巫に小屋者の金次郎が似たりと云へる小猿が申し立て、然るに彼の朝日の巫は京都より下つたりと申す條、その言語は隈も無き江戸生れにて、素性の知れざる怪しき女、もしや彼が静姫が生母にはあらざる歟と、心に浮びたりければ、其翌日新太左衛門は、幻小猿を呼び出し役人を遠ざけて「扱も汝等兩人は、公にも御存知の悪漢、すでに五十兩以上の價ある絆を盗み取つたる上は、死罪は固より免れ難し、然るを此新太左衛門が情を以つて助け得させんが、其代りに朝日の巫が身の素性、逐一に探整なし、證據を擧げて差出せ、其功を立する時は、舊惡を免す上に、褒美をも吃度與ふべし、其儀心得たらば當分汝等兩人とも細目を解て放ち置かんは如何」と諭したりければ、兩人ははッと領承なしたるにぞ、脇屋は直に命じて兩人が絆を解きて放ち遣つたり、是よりして幻小猿は、盜賊忽ち變じて脇屋の爪牙となり、

頻りに探整を事となし、先づ第一の手掛かりは、小屋者の金次郎なればとて、搜索したれども、金次郎は去年よりして行衛知れず、幻は夫れよりして表面を神妙に粧ひ、朝日の巫が假宅に屢々往きて、父の権四郎に面會するにも、手土産こそ持参すれ、無心合力の事どもは少しも言はず、如何にも機嫌を損ぜぬ様に振舞たれば、権四郎は深く悦びて近づけたり。巫は此もの油断なり難しと、初より心に思ひたれど、何の廉も無きに其出入を差止めんも如何なりとて、其儘に致し置きたれば、幻は朝倉家の奥より、巫が許に度々の御使あると、亦巫が岩田備中に深く交れる事、および備中の物領大内藏と静姫の中を結ぶは、巫が望みたる事ども、都て其秘密を権四郎より聞き出して、脇屋新太左衛門へは内通したりけり。

脇屋は、猶も小屋者の金次郎が素性を聞知せたる上にて、もはや用意は宜しと心に諾き、組の與力某に申し付け「朝日の巫御尋の趣きあれば、脇屋新太左衛門宅へ明日罷出へきもの也」とは達せさせたり。巫は心も穩ならず、既に佐々木源五兵衛が後家のお澤、かの脇屋に捕はれたるに、今又我を召寄するは、若や後家が拷問の苦痛に堪へ得て、我が身の上を白状したるに非ざるかと、懸念に懸念を重ねたれど、原來女ながらも剛氣の朝日、些とも驚く色をも見せず、翌れば二月十七日と云ふに、殊更に取締ひ、乗物にて脇屋が宅へ赴きた

り、土御門家より別段の許を受け、特に吉田家の取次にて禁裏より宣旨を得たる巫なれば、無下に取り扱はゞ、京都より後日の祟如何なりとて、書院に通して厚く遇ひ、新太左衛門は肩衣袴にて出て合ひて見たるに、巫は緋袴に小袷を着て、髪は長く下げ、首には宣旨を袋に入れて掛け、書物の手箱を側に置き、威儀を作つて扣へたり其體中々に侮るべくも見えざりけり。新太左衛門は、巫が身柄を問糺したるに巫は謹みて「妾は京都の陰陽師某（即ち先年お勝と云ひたる頃に圍はれたる仁なり）が妹にて斯の通りの素性なり」と土御門家の書類をも取出して示し「尤も幼少の砌より父に従ひ、十二三歳まで江戸にて育ちたれば、言語も自ら交りて候ふこそ耻く候らへ」と陳て些とも障はる所なく「朝倉家へ出入りいたすは、彼方より召されての御事なり、是は同家のみならず、諸侯清華衆、何方へも罷出て候ふ」と聊か臆せず述べたりけり。脇屋は聞て「其通り明白の上は巫御前に對して新太左衛門不審を存する所なし、斯召寄せて嘸迷惑にて候ひつらん」と挨拶して更に四方山の咄に移りて「巫御前の容貌の朝倉家の息女靜姫に似たるも不思議、それは兎も角巫御前には、淺草の金右衛門と云ひし者を存知なきや」と尋ねたり。惻りなせども色にも出さず「イヤ一向に存知申さぬが。そは何者にて候ふや」「ム、存知なきや、彼の金右衛門と申しは、淺草の小家者にて、

男女の子供數多あり、長男は金五郎、その次々には某々にて、末の娘は高と申したり、然るに其高は久しき前に行衛知れず、金右衛門金五郎其外も死果て、今は金五郎の倅金次郎と云ふものあり、其金次郎は拙者も宜く見知りあるが、所謂他人の虚似とやらて、巫御前の面體に寸分違はず、聲音までも似たるゆゑ、フト尋た丈の事、かならず心に障られな、ハ、ア」と打ち笑ひたる心の底、知つて言ひしか知らずてか、流石の巫も測りかれ笑に紛らし居たりしが、脇屋は夫れと覺りてか、更に詞を繼て「金右衛門一家のもの、存知なくば夫れまでなり、但し佐々木源五兵衛が後家の澤と申す女は存知ならん」と尋ねたり。巫は益々驚きしが「イヤ其者も同じく存知侍らず」と答へたれば、脇屋は、不様かと云ひたる而已にて、其日の御用は相濟たりとて、何事も無く歸宅せしめたり。

#### 第十四回 幻の密使

朝日の巫は脇屋が邸を出て、虎口を道れたる心地にて我家に歸りしが、其日の仔細は權四郎へも委敷は語らず、獨り心に秘匿て、熟々考へしは、扱も脇屋新太左衛門は、如何にして我が密事をば知つたるか、小家者



の金次郎は我任にて、其の父の金五郎は我が兄と云ふ事まで、既に探鑿しての事なるか、其上に静姫と我と顔容の似たりと云ひたる詞の中、深き仔細を承知して、態と我口裏を試したるか、何にもせよ、一世の大事浮沈の瀬戸、もし破綻の切れ掛かつては大變なりと、心を苦しめ、左しも平常は其氣象、男に勝れる朝日の巫も、胸の痛に煩ひたり。斯て其後幻の吉之助は時々巫が許へ訪問れて、権四郎と俱に出行ける事も屢々ありしが、巫が脇屋に召寄せられてより、凡そ十日ほど日數経たりしに、或日幻は例の如く來りて、奥なる一間にて稍々暫く密談に及びて後に、巫にも語り合はする事あれば來り玉はせと招きて、三人鼎足に座を占て、幻は容を改めて申しけるは「さて此吉之助が、今日參つたは、其實脇屋殿の内々の頼に由つての事、その御口上の仔細と云ふは、巫にも既に知らるゝ如く、朝倉家に於ては、女隠居の貞松院、その孫娘の静姫に、静養子を取り分地させ、故民部少輔が跡式を建させんと望み、當主修理大夫殿も承知の所に、佞人ばらの勧めに由つて、家老岩田備中が悴の大内藏を連枝に上せ、静姫と娶せんと云ふ噂あり、斯く相成つては、朝倉一家の騒動にて、世は備中の物となり、安危太だ心許なし、余(脇屋)苟くも朝倉家の親類たれば、深く心を惱して、彼是と案ずる所に、此期に及び静姫が心を引戻させて、正路に導かん者は、朝日の巫ならては

外に無し、幸ひなるかな、巫の顔容は静姫に生寫しなれば、静姫が實の母は我なりと名乗出てよ、此新太左衛門父子にて骨を折り、必らず母子の對面、表向にて取計らはん、其上にて母の威光を以つて、大内藏にあり、一門の采女にあり、姫が心を思ひ切らせて、余が弟の小次郎こそ、正しく故越前の守の殿の孫なれば、静養子に迎ふべしと勸めてよ、事すべく行なはれなば、巫は即ち小次郎静姫二人が親と崇め尊び、夫れにつながらる権四郎吉之助の兩人とも、身分立派に取立て、榮耀榮華は望に任せん、此儀巫に得心させよ、得心とならば余が喜び此上なし、去りながら、若も巫に於ては備中に一味なし、否と申す其の時は、余も詮方なし』先づ小家者の金次郎を初め呼び出し、京都へも掛け合て、巫の成長身の素性、先の先まで詮議する、何程巧みに言拵へても、幕府の御威光役目の働き、飽まで原を糺して見せう、然らざる時には、巫の身の上がいかなる祟が出やうも知れぬ、権四郎吉之助の父子とても其通り、固より甚惡少からざる者共なれば、何所の陰に潜んでも、召捕て吟味に及び、殊に寄たら首と胴との生別れ、恐しい目に逢はうも知れぬぞ、又静姫が生の母、これも佐々木源五兵衛の類をば、厳しく拷問したる末は、其者の知れるは必定、かく數人の難儀に及ぶも、夫れに替つて出世に成るも詰る所は巫が心一ツに出ると、此の道理を解き分て同意の返答い

たさせよ、確と申し付けたるぞと内々の御沙汰、それで参つて御座りますが、何と色よい御返答を御聞せ成すつて下さいまし」と仔細を聞より、巫は確と胸うつ釘、背まで貫く思ひにて、詞も出ず差伏きたり。權四郎は腕組して聞いたりけるが「ム、成る程汝が吩咐つて来た、脇屋殿のお頼も悪くは無いが、岩田様には、余も是まで重々の御恩を受け、妹の奴までが御最負に成る且那樣、いま更向ふ面にも仕悪い譯だが……と云へば幻は嘲り笑つて「何の脇屋様でも岩田でも、金にさへ成れば宜じや無か、義理も絲瓜も入るものか」「ム、夫やア其通りだが、どつちが金に成るか、其が思案の仕所だ哩」「アモッ前、御互に加役の脇屋様に楯を突いて、縛られて見れエ、元も利もすつて仕舞うぜ」と親は岩田方、子は脇屋方と立別れ、果は言争ひに成り掛かつたれば、巫は押止めて「これさ父子の中で何を日くじら立て喧嘩するのだへ、マア静にお仕な、吉さんの方も立て、お爺さんの心にも叶ふ様に、良い分別の仕様があらうよ、滅多に早まつた事をして、虻蜂取らずじやア詰るめエゼ」と取りなだめて、其座は夫れにて済んだりけり。

## 第十五回 藝子金糸

朝日の巫は、鬼も角もと答へて、幻の吉之助を返したりけるが、大内藏と静姫との間柄は、原來おのれが戀の棧橋を渡したる中と云ひ、殊に心の底には、深く岩田備中を頼みたりければ、夫の權四郎とても欲に迷ひては油断ならざる人物ではあり、其上に倅の幻に勧められては、いつ何時の變心するやも知れざれば、寧ろ此事備中に告知するに若じと思ひ定めて、權四郎にも知らせず、其事をば密かに話しければ、備中素より去者にて、然らば先づ大内藏と静姫の婚禮沙汰は暫らく見合て、脇屋の息を抜くべしとて、沙汰止の姿とは成したりけり。

斯て一月も経たる後に、備中は或夜忍びやかに出立て、所狎の酒樓に赴き、橋町に使を馳させ、奴を呼び迎へたりしに、奴は使と共に來り、酌とり、杯替して申しけるは「此程橋町に金糸と名乗て廣めを爲したる藝子の侍るが、年は十六にて勝れたる美人なり、妾も彼奴が主人に頼まれてあんならば、召し玉へよ」と乞ひたれば、ソレ呼べとの詞に迎の者を遣はして、程なく金糸は襖の外より一禮して出來りぬ。備中は近く招きて顔

を見るに、何とやらん見覽まのある様なれば、ハテナと考へたるに、金糸は備中を篤と見て、アナ恥かしと首を俛れて上げ見ざれば、奴は忽ち嫉妬の思ひをなし、扱こそ二人が中には、既に仔細の有たるかと、同じ角たて、責問ひけり。備中も金糸も、コハ筋なき濡衣かなとて、互に語り出るを聞けば、見知たるも道理にこそ、此金糸は佐々木源五兵衛が娘のお弓にてありぬ。扱もお弓は、母のお澤が静姫の生みの母の素性詮議に付き、加役の脇屋新太左衛門に召捕はれて、獄屋に縛がれ、兄の源次郎は傷寒の大煩ひ、漸く命は助かりたれど、未だ一身の働も自在ならず、母の獄屋の差入物その外に差支て、遂に年期を入れて藝者に拘へられ、其金子にて母兄の難儀を貢ぐ料に充たる次第を語りければ、備中は且は驚き且は怒り、返すもくも脇屋が邪心、かく迄も深きものかなと、心の底に恐れを成したりしが、左あらぬ體にて「かく御身の落ぶれさせたるは、不便と申すも愚なり、備中決して疎略には存ずまじ、心強く思ひ玉へ」と云ひ慰さめ、奴にも説き聞かせて、直に金糸が身の代を償ひ得させ、更めて自前となし、奴が許に看板をかけ、其稼は都て當人の所得になして、母兄の貢に用ひさせたれば、奴は金糸を妹の如くに思ひ金糸も亦備中が大恩に感じ、此人の爲ならば如何なる苦現も厭はじものと思ひ詰たりけり。備中がかく金糸に恩を掛けたるは、他日この妓を使ふ

べき時ありと計りて、豫じめ懐け置きたりとは、後日に至りて知られたり。かくて備中は、金糸が母のお澤を獄屋に繋がせ置きては、若も其爲に思はざる障りの出来らんも計り難し、兎も角もお澤を救ひ出し遣らてはと、心に屹と思案して、竊に傳を求めて外人より厚く脇屋に音物させ、賄賂を以つて頼み入れ、更に又星影宮内に而會なし、話の序の様に、静姫が生之母素性詮議の爲にとて、佐々木源五兵衛が後家澤と云へるもの、脇屋殿に召捕れ、當時御吟味中と申す事なるが、主人修理殿よりは去る頼も無きに、抑も御一家方よりの御内頼にや」と問ひたりけり。宮内は此時すでに御使番より御目附に昇進してありけるが、是を聞いて「ハテナ心得ざる脇屋が計ひよな、假令頼ありたりとて、斯る事は加役がせまじき業なるに」と訝りつゝ、其の後その事の由を脇屋に尋ねたり。脇屋は親類ながらも、兼て煙たく思へる星影宮内、殊には監察の役ではあり、旁々不氣味なりと當惑せしが「否々其澤と申すもの、外に嫌疑あつて召捕たれど、其嫌疑も辨たれば、己に昨日放免いたしぬ」と答へ、此女とても白状すべき體も無く、又これに附いて待設けざりし賄も取れたれば最早用なしとて、其日直に放免したりけり。是にて星影宮内は、脇屋と云ひ、岩田と云ひ、兩人ながら朝倉家の爲に然るべき者に非ずと心に覺り、様こそあらめと目を注ぎたり、

## 第十六回 假癩病

却説朝日の巫は、脇屋岩田の間に挿まりて、板挾の有様となりければ、幻吉之助を程よく説て一時は逃れしかども、幻は其後頻に來りて同意を促し巫が岩田備中へ此内情を打明たるを既に推察したるにや、幻は「脇屋殿にては、一兩日前に小家者の金次郎を召捕つて繋置かれたり」とは語つたりけり。巫は何と思ひけん、決心の様に「如何にも妾、今は決心して候ふなれば、脇屋殿の仰に従ひ、静姫殿の母なりと詐つて事を謀り候ふべし、夫れに付ては、殿へ参上なして面のあたり伺ひ奉ることの侍るなれば、其手續を定めて告知らせ玉へ」と幻に返答したりければ、幻は打喜びて「然らば其趣を殿へ申し上げて猶も参るべし」とて出せりぬ。権四郎は、巫が返答を聞いて「御身かく悴に答へしは何事ぞ、シテ岩田殿の方は如何にせんと思ふてや」と問へば、巫は「さな案じ玉ひそ、妾存する旨のあれば、御身の爲に必ず悪くは計ひ候ふまじ」と言ひ慰めて安心させたれば、権四郎は「然らば我等も夫れにて落ち付きたり」とて日暮頃より朋友が訪ひて一酌せんとて出て往きたり。巫は兼て心に思ひ定めたりければ、今夜を過すべきにあらずとて、急ぎ硯箱引よせて

『我等事宿願の仔細の候ふなれば、是より直に江戸を立ち、靈山靈社を拜み奉りて、猶も神道修行いたさばやと存じ、只今より發足いたし候ふ』と詞短に書殘して机の上に置き宣旨免許狀および持合せたる金子若干を懐に納め、寢巻の衣の上に幅狭の帯を締め、何時の間にも買求め置きたりけむ、小さき器に生漆いれたるを袂に容れ、裏口よりソツと出て、夜に紛れて千住の方へぞ落たりける。

斯て巫は、其翌日は松戸の宿に身を潜め、賤の女の旅支度を整へ、夜に入つて後に用意の生漆を取り出し手づから自から、己の顔へ一面に塗たりけるに、暫くあつて其痒みは痛みと共に堪がたき程に激しく起りて、曉に至ればひたと腫出して、雙方の頬の肉は腫と俱に高く膨れ、顔の色は赤く黒く色取りて斑になり、毛穴は都て粟粒の様に持上りて、左ながら癩病の如く、兩手の指さへ同じ様に成りて、巫が昨日までの眉目よきに引替て、恐ろしくも醜き顔に變じたり。巫は借置きたる鏡を取り上げて、熟々打ち眺め、是にて宜し、斯く顔容の變る上は、朝日の巫と知るものはよもあらず、小屋者の金次郎にも朝倉家の静姫にも似たりと云ふ噂は、自づと消て、後の祟も無かるべし、いでや是より、更に手段を運らして岩田殿に力を添へ、静姫が身の出世を謀るべし、彼人ゆみならば我身を棄るも惜からねば、斯ばかりの苦み、何か厭ふ事あらん、とは云も

の、此姿、これが小屋者で、そのあれ、其昔、人に知られし御守殿お高の身の果か」と思はず、翻す涙の露を袖にて拭ひ「エ、我ながら心弱し」と氣を勵まし、ニツコリ笑つて立ち上がり、旅宿の女を呼び、朝餉は心地悪ければ認むるに及ばじ、此儘に出發んとて、手拭にて面を包み曉に紛れて何所とも無く落たりける心の中ぞ無慙なる。

巫が假住にては、巫が姿の見えざるに驚き、權四郎も歸り來りて、彼書置を見て餘の事に呆れ果て、途方に暮たりけるが、扱しも有るべき事なられば、夜の明るを待て、事の次第を密に岩田備中に報せたるに、備中は是ぞ巫が我に興して、脇屋が奸策を外す手段なりと覺りけれども、色にも出さず、程よく挨拶して濟せたり。脇屋も亦幻より巫が往き方知れず成つたりと聞き、齒噛をなし「扱は彼下司女に計られて、油断したるこそ口惜けれ」とて配下の者に吩咐て、巫が行衛を寄々に穿鑿させたれども、更に其手掛かりも無く、且つ金次郎を召し捕たりとは、素より痕跡も無き恐喝なりければ、脇屋は靜姫が生之母の詮議も其儘に延したりけり。

### 第十七回 遠馬の歸路

頼みと思ひし朝日の巫は何所とも無く其影を隠したりければ、岩田備中が倅の大内藏は大に其望を失ひ、脇屋新太左衛門も亦靜姫に祟を與ふべき方便を失ひたりければ、朝倉家分地の事も、靜姫が舞臺子の事も、先その儘にて萬づ見送の姿に月日を送りて、今年もはや秋の初とはなりぬ。大内藏は、皁月御殿の局侍女等が取り持ちにて、靜姫との中は益々深くなりて、寄々に人目の關を忍びつゝ、水漏さぬ契を結びしかば、表向きに妹背の語りひするを待兼ねて、夫れと無く備中に促がしたりけるに、備中は啞々と打笑ひて、大内藏に向ひ「扱も御身は年若とは云へ、淺間なる男かな、我子ながらも、御身は正しく先君彈正少弼殿の御孫、當君修理大夫殿の甥に非ずや、既に御連枝に列せられて一字を賜はり、朝倉大内藏元高と名乗り、其上に當家の血統靜姫と夫婦になるべき契のある上は、僅か三萬石ばかりの内分分地で鷹の間の小諸侯になり、夫れで一を送る心か、逆も大望を思ひ立ほどならば、何とて越前十八萬石朝倉の家を相續せんとは思ひ立ぬ、…イヤサ朝日の巫は固より某が腹心速に姿を隠したるは、是れ脇屋父子が巧の手筈を破る計略、更に驚くべ

きに非ず、必らず人知れざる境より我に力を併するならん……サア本家を押領なき人には、第一障碍は若殿式部丞景正、彼奴本年十九歳にて、昨年巳に嫡子御目見まで相済たる上は、容易に除き難し……ナニ毒殺せんと、ハ、ア小説や物語にある毒殺話、これが實地に行はれうか、愚かなる事申されな……式部丞を除くには某心中に思ひ設けたる事あれば萬事某が計ひに任せ置かれよ、次に妨げなるは定姫、彼も今年は十七歳、色染掛かる初紅葉、色もて誘ふ手段もあれば、是以つて難きにあらず、斯く兩人を傷ものに仕たる其上では、朝倉家の相續は御身と静姫二人のもの、是程の大望を懐かずでは、男に生れた甲斐もあるまじ、心得られしか大内藏」と初めて明す謀叛の心底。大内藏はたと膝を打て「驚き入たる父上の大志、左までに此大内藏が出世を思召し玉はると、御恩は海山譬へ難し、此上は幾重にも仰せに従ひ働き申さん」と俱に悪事の結構に他事なかりけり。

斯て其後九月にもなりければ、或日備中は若殿式部丞に對ひて申けるは「若殿にも定めし聞し召されつらん、此備中、先頃駿馬を一頭買求め候ひたれば、時々乗試みつるに、鞍の上、誠に穩なる逸物ゆゑ、献上し奉らん、同じくば御試の上にて近日遠馬の御供仕り候はん」とて逸物を獻じたるに、式部丞は性質遊惰にて、文

武の道には疎けれども、馬術ばかりは好む所なれば、大に喜びて、右の馬を日々乗試み、去らばとて、九月十六日と申すに、備中が勤めに任せ、近習一兩輩に供乗させて、備中と共に乗出し、其頃駒込染井あたりは菊の花盛りなれば、是を觀ながら王子の方に遠馬なし、其歸路には、備中が兼て借設たる、朝倉家の用達町人の某が別荘の、根岸にありける所に立寄りて、用意の酒筒を取り出して、一酌に及び、種々の珍味ども所狭しと出並べ、打解けたる酒宴の興に入つたる頃合を見計ひ、「同じ酌交す杯も女の酌ならては旨からじ、貴邸を離れし根岸の里の御忍の遠馬、などか苦しかるべき」とて、召出したる數人の美女、これ備中が前々よりの計ひにて橋町および柳橋あたりの踊子共藝子共の中にて、殊更器量勝れたるを選び出して、奴と共に侍らせたるなり。廻る杯の廻るにつれて、果は酒に廻されて、備中が奴と由ある中さへ、端なく見顯はされ「扱もく厳格なる太夫も斯る内證の樂ありつるか」と近習の輩が口走れば「是は閉口恐入つたり、何分大目に御覽じ玉へ」と備中が挨拶に「サア斯なる上は無禮講」と言ふ儘に式部丞は一入興に入りて、其の座の一人の藝子に眼を注ぎ、近く膝元に招き寄せて酌とらせ心を移しければ、其藝子も同じく秋波を送つたりけり、此藝子は餘人ならず、即ち備中が恩を施して奴と同居せしめたる金糸なりけり。

## 第十八回 佐々木源次郎

朝倉家の若殿式部丞は、遠馬の歸路に根岸の里にて金糸を見初てより、其のあてやかなる容顏は、目の先に  
 ちら附いて忘るゝ事の成りがたければ、竊に近習の者に意中を明して謀つたるに、近習の某等は素より備中  
 の内意を含みて、心得たる者共なれば、早速に其便を貸め、再び遠馬に托付て根岸の別荘に赴き、金糸を招  
 きて式部丞に逢はせたり。金糸は備中の恩誼と云ひ、且は奴が周旋に争て否と云ふべき、若殿の轉寂に侍り  
 て、初て手枕の夢を結びたりければ、式部丞は夫れよりして、金糸の色香に心を奪はれ、忍び通ひの浮れ  
 遊びに興じたり。側役等は大いに心を痛めて諫言を奉れども、棟に釘付たる程の利目も無く、此上はとて家  
 老の備中に謀れば、備中は打笑つて、左ばかりの小事敢て諫むる程はあらずと、事も無げに空耳を走らせ  
 り、然る上は其金糸が身を償ひ、假親を拵へて若殿の側室に上んとすれば、金糸身受の相談思ひも寄らずと  
 辭退たり。斯りける程に若殿式部丞の遊蕩は、備中が豫て期したる壺に中りて益々増長し、此年の霜月ころ  
 には、病氣保養の爲なりと申し立て、澁谷の別荘に引移り、近習に命じて彼の金糸を呼び寄せて日毎の娯樂

を事とせり、是も備中が内々承知にて、取も構はず式部丞が思ふ儘に振舞はする事なれば、憚る所もなく、  
 別荘の奥向は左ながら酒樓に異ならず、淺ましき有様とは見えたりけり。  
 話頭一變て金糸が兄の佐々木源次郎は、妹が身を穢子に沈めて貢ぎたる黄金にて、醫藥の手當も出来て、漸く  
 に一命を拾ひけるが、其後母のお澤も免されて歸り来りければ、歡に附けても悲みしに附けても涙ばかりに  
 て、幽かの煙りを立たりけり、然るに妹のお弓(金糸)は俄に全盛の身となりて、母兄の許へ多分の黄金を送  
 りて活計を助けたるが、其様子を聞けば云々の次第なりと知り、源次郎は母に對て申けるは「岩田備中は表  
 の善を飾つて裏に悪を謀る奸物、すてに父上源五兵衛殿が、貞松院殿の御意に悖つて御勘當を被り、一生を  
 日蔭の身に送り玉ひ、我々また此状況に沈めるも、畢竟は備中が密になせる業とこそ承つて候へ、然るを妹  
 が備中の恩を被んは心好からずは候はずや」と述べたれば、母も之を聞いて「實に汝の言はるゝ通りなれば、娘  
 へも篤と意見して、夫れと無く岩田と親しくせざる様に致させん」とて母子二人にて其旨を説きたれども、  
 金糸は「岩田殿は、さる悪人には候はず、我身の爲には世にも頼もしき人にこそ御座なれ」とて聞入るべく  
 も見えず。其後また世の噂を聞くに、故主朝倉殿の若殿式部丞は、金糸の色に溺れて不行跡一方ならずとの

事なれば、お澤は源次郎と兩人して、金糸を呼迎へ、左右より涙と俱に諫めて、以來は式部承殿につれ無く當りて心を返させ奉れよと頼みたれども、金糸は、式部承殿と既に契を交せし上は、飽までも思ひ捨て奉る事かなふまじと、膠なき答へをぞ仕たりける。此上は故主の家に仇なす女、母でも無ければ兄でも無しと、お澤と源次郎は金糸と中違に及び、其責は一切受けずして源次郎は儘に手習謡曲など近所の子供等に教へて、母を養ひ居たりけるが、愈々聞ゆる式部丞が放蕩沙汰、それも金糸が傍より勤むる所業、此上は故主への忠義には、妹が命も替がたし、詮ずる所は妹をあの儘に存し置ては、式部様の御身持、御直りは餘もあらじ、又佐々木源五兵衛が娘ゆゑとあつては、亡父上の御耻辱なり、不便ながら妹を刺殺して御家の無事を謀るの外あらじとて、源次郎は心を鬼になして、竊に金糸が出入に心か附けたるに、頃は霜月廿二日の事なりけるが、夕方より駕籠に打乗り澁谷の別荘へ赴くべしと聞き今夜ぞ妹を打捨んと志を決し、場所は此ぞと溜池の畔なる二本榎の側に身を潜めて待ち居たり。

第十九回 溜池の同士打

駕籠に點たる提灯こそ見覚えある紋所なれ、不便なれども妹お弓(金糸)母兄が意見を聞かざる上からは、汝が命は御家の爲に唯今この兄が申し受るぞと、佐々木源次郎は刀の鯉口寛げて研附んと、足場を計つて待つ所に、是も同じく覆面に顔を包める一個の武士、彼方の樹蔭より顯れ出て「命は貰うた、金糸覺悟」と言ふより早く、氷の如き刀を抜て、駕籠を目的に研掛かる。斯と見より源次郎は、電光の如くに飛掛かり、彼曲者に抜行せて、此を先途と切結ぶ。抑も源次郎は、初め己が手に掛て金糸を刺殺さんと思ひ定めて待受ながら思はずも外より金糸が駕籠に研て掛かると見て、是を相手に戦ふと、不審き様なれども、凡そ人の情は斯るものにて、分て其妹をば我見る前にて他人の手に掛けさせんは素より武士の愧る所なれば、源次郎が我を忘れて金糸を救ひたるも、即ち眞の情なるべし。ソレ喧嘩と云ふより早く駕籠昇の者も供の漢も、金糸を捨て、何所とも無く逃去たれば、金糸は怖き恐しさに駕籠の戸を明て、跣足の儘にて飛出て見れば、黒白も分かぬ夜の間に星の光に切結ぶ刀の稻妻「アツと驚き溜池の方へと逃げ出たるに、誰とは知らず後よりヌツと



出たる一個の武士、是も同じく覆面したるが、聲立てさせじと手拭にて金糸が口へ猿轡、あがくをしツかと羽搥締脇に抱きて雲を霞に逃往たり。

源次郎は金糸が引渡はれたりとは知らず、彼の曲者と太刀打なし、右を拂へば左に避け下を斬れば躍り上り、頭を打てば首を地に付け、互に争ふ虚々實々、孰れも劣らぬ勇士と勇士、勝負も果しなかりしが、源次郎は長煩の病氣揚句、次第に氣力衰へて、息もせはしく成つたるが、とある小石に躓きてよるめく所を一刀に袈裟に斬られし大事の深手、覆面さへも落散りて、其の儘動と仆れたり。折しも山王の杜の木の間より立昇たる月影に、彼の曲者は源次郎が顔つくくくと見て「ヤア貴殿は佐々木源次郎殿ならずや」と聲掛られて起直り「ムムそう云ふ貴殿は何人なるや」「見忘ありしか六角左門で御座る」と覆面取れば、幼少き頃よりして友垣結びし左門なれば「誠に左門殿、シテ此次第は」と尋ぬる聲も秋の虫細るばかりの息遣ひ、左門は手負をしつかと懐き「何をか包まん、貴殿の妹金糸には、若殿を放埒に沈むる女、生し置ては御家の大事と、不便なれども今夜の通行、待受て命を貰はん所存なりしに、思はず、貴殿に妨げられ夫とは知らず此場の仕儀」「扱は貴殿にも其心にてありつるか、我も同じく云々と苦しき息の下よりも、心底明して物語り「然るに二人

が同士打なして深手を負ひしも、某が武運に盡たる因果と思へば、貴殿に對して更に恨みを存する所なし、此上は朝倉家の御事、貴殿へ頼み置き申すぞ「氣遣ひあるな源次郎殿、岩田備中が底意知られぬ頃日の振舞、若殿式部丞様が御身持の崩れたるも、原はと云へば備中が奸計、不肖ながら此左門、命を的に御家の安泰、一筋に力を竭して謀らはん、夫に付けても夫れ迄は、某が命某へ御預け下されよ、事治まつたる其上では、尋常に貴殿の由縁の人を尋ね、其の手に掛かつて相果るか然らずば、貴殿の墓所にて腹掻切りて、申分けを致すて御座らう」「イ、ヤ貴殿が命は尤も大切、暮々も頼み申すぞ」と云ふも今はの斷末場、其儘息は絶えにけり左門は涙ながらに合掌して「アツ忠義に凝つて現在の妹まで殺さんとせし源次郎殿、知らぬ事とて我手に掛けて殺したるは、神も佛も無い世であるか、左門が罪業暫しの間許させ玉へ、南無精靈頓生菩提」と回向なし責て死骸を隠さんと、見廻す所に目につく空駕籠、コレ風竟と抱き入れ、懐中より取り出したる金子をば手早く紙に押包み、弔料にと心の氣轉、死骸の膝に乗せ置きて、駕籠の戸ハタと立切て、人目に掛からぬ其中にど、刀の血を押拭ひ、鞘に納めて身を繕ひ「夫れに付けても姐己の金糸、何れへか逃去たと覺えたり、斯ばかりに思ふと鴟の嘴とは成りつるか」と歎息しつゝ、袂の塵を打拂ひ立上る其途端、左門を目掛

けて打出す手裏劍、風切る音に心得たりと身を殺し、見返す時しも村邊に月は覆はれて、再び暗とぞ成つたりける。

第二十回 證據の小柄

「オイ姉御、コレサ奴さん、黙つて居ては分られエツ、先月廿二日の夜溜池の人殺し、殺されたのは金糸が兄の源次郎、その側に落て有つたは此小柄、丸に算木は岩田様の定紋、我も其晩、中間の内會で、赤坂に往く其道で、人殺の大騒、そこに有つたを拾つたが、此中からも云ふ通り、四の五の野暮は云ねエから、貴嬢の執成で高直に買つておくんナセ」と幻吉之助が肩いからせての掛合ひに、奴は殆ど當惑して「サア貴兄だつて兄さんの息じゃア無いか。何もソウ聲高に岩田様くと言はずとも静におしな、旦那(岩田備中)がお出に成つたなら、取次で言つて見やうが、先月から十日許りと云ふものは、頓と御日に掛からぬに由つて、何れ私の方から挨拶を致しませう」と、云はせも果す「エ、其挨拶が何時の事だか知れるものか、爺殿は朝日の巫が身を隠した其後でも、貴嬢の縁で岩田様の御最負に成るそうだが、夫れに引替へ此幻には、脇屋様の

一件から、親子ながらも他人接遇、それも大方皆が馴合で、余を袖にするのだらう、さうされりやア此方も他人だ、此小柄を證據にして、恐ながらと断へ出りやア、金糸を拵帶したのも、源次郎を殺したのも、岩田備中だと、直に疑ひの掛かるは知れた事だ、しかし人の首に繩を附けやうよりやア、金にする方が御互の利方だと思つて、斯優しく掛け合ても、其筋合が分らざア仕方がねエ、出る所に見せてやらアへん面白も無エ、この師走の數日に便々と挨拶が待つて居らるゝものかい」と弱身に附込む幻が益々募る高ゆすり「オ、其品手前が買て遣らう」と納戸を明けて出てたるは岩田備中「サア貴郎は旦那、どうして此へは「オ、サ唯今しがた参つた所、聞慣ざる男の聲、大方近所の遊び人が、合力にでも來たのかと察した故に、裏口からソツと参つて納戸にて委細の様子は聞いて居た、イヤ勝見權四郎が悴にて、噂に聞いたる幻吉之助とはお手前であるか、長い短い言ふは面倒、いかにも其小柄は、其夜溜池にて取り落したる身共が品に相違ない、尤も人殺に關係はない事なれど、夫れもお手前に話した所が無駄な事、シテ其小柄買取らうが、價は如何ほど欲いと云ふのか、存分に言つたが宜い、言直に買つて取らせやう」といと大様なる備中が詞に、幻膝を打つて「ム、流石は岩田の旦那様、ソウ奇麗に仰しやる上は、此幻も苦勞人だ、餘計な事を申すめエ、小判で貳百兩、

耳を揃へておくんなせエム、僅貳百兩、それで宜のか、夫れては餘り安過る、三百兩に買つて遣う「コリヤ面白い、買手の方から直上とは、曾しか聞た事も無いが、ソリヤ本統で御座ますか「何戯談を申さうか」へイ有がたう御座ます」と低頭ば備中は、懐中より百兩包を取出して「今夜は所持の金子も少々なれば、先づ百兩渡し置き、後金は明日渡さう「へい夫れじゃア此小柄は……「ハテ後金受取るまで持て居やれ。明日屋敷へ參られたらば、其節に後金引替に受取らう「イヤ御屋敷へ參りますのは「ハ、ア險呑だと掛念いたすのか、見掛けに似合はぬ肝玉の小さい漢だ、併し屋敷へ參るが迷惑なら、午過に小櫻まで參つて待つて居やれ「承知しました、夫れじゃア且那「幻待つて居るぞ」と百兩の黄金を渡したりければ、幻は喜びて暇を告げ、奴の許を立去たり。

奴は備中に對ひて「それじゃ且那、アノ小柄は「ハテ身共が小柄、その夜源次郎を手に掛けたる曲者は、某よツく存じ居る、又源次郎が殺されたるは、金糸を殺す積にて待受たりしが事の起り、ソリヤ其方が聞いても用の無い事、まツた金糸は其夜より往方知れずに相成つたれど、其居所も凡そ知れてある程に安心いたせ、併し其事は其方限り、世間へはどこまでも知れぬと申して置くが宜い「それで私もやつと此胸が落附ました」と、話の内に扉外にて、頻に聞ゆる犬の聲、ハテ彼吠聲は不審と、備中は立上り扉の無双を押し明けて打見れば、此方には立聞したる一人の門附、三味線持て佇めば、彼方には一人の乞食、いざり車に打乗て、是も耳聴て居たりけり。ハタと立切る窓の戸の、其音に驚きて右と左に分れたり。此二りは何ものにも後回を待て知り玉ふべし。

### 第廿一回 六角左門

斯て岩田備中は、其翌日幻吉之助が約束の如くに小櫻へ訪ひ来るを待受けて、殘金の二百兩を渡し、酒肴など振舞ひて「余(備中)すてに奴の縁に由て彼が兄の権四郎へも目を掛くる上は、其方(幻)とて他所に見る事のあるべきぞ」とて夫れよりして手懐たれば、性來慾に目の無き吉之助、忽に備中が手の者とは成つたりけり。抑も備中がかく幻を手懐けたるは彼が脇屋の爪牙たるを知り、却つて脇屋が計略を探り知らんが爲なりければ、案の如く、幻が口よりして朝日の巫が小家者の金次郎に似たる件より、是に乗じて脇屋が目論見たる次第まで分明に分つたるに付き、備中は其計略の裏を搔んとて竊に幻を遣ひて脇屋を陥れんとは工夫したり。

扱また彼溜池にて左門が誤つて源次郎を殺したる夜に、金糸を拐帶て逃去たる武士は、即ち権四郎にてありき、是は備中が兼て六角左門が舉動に目を注たりければ、此日澁谷の別荘より若殿式部丞の指圖にて金糸を呼迎ふる事を故意と左門に聞ゆる様になし、左門へは見張の者を附け置いて其舉動を察はせ、自己も左門が後を附けてことの様子を見届け、金糸は権四郎が手よりしてさらに腹心の用達に托け、再び根岸の別荘に入れ置き、其の夜の事は深く金糸へ口留なし、式部丞へは澁谷の別荘へ召るゝと然る可からずと、近習もて諫めさせ、密に式部丞を誘ひ出して、根岸にて金糸に逢はする様に取計らはせたり、尤も金糸は其兄の源次郎が其夜に殺されしとは夢にも知らざりしなり。

此に六角左門は、金糸をば討漏し、剩へ竹馬の友なりける源次郎をば討果して、思ふ目的は全く齟齬なし、若殿放蕩の聽は益々高く、既に薄々當主修理大夫の耳に入つたれども、備中が執成にて未だ不興までに至らず、去とて此儘に致し置いては、行末如何あるべきかと、若年ながらも父左大夫の跡目を継ぎ、小姓頭に昇つたる左門なれば、思ひ煩ひ居たりし所に、留守居役の許より急に來れと俄の使、畏つたと罷り越し一間に通れば、曾に見慣ぬ一人の武士、黒の無紋の役羽織を着し、着流白衣の装束は聞かても知れたる幕府の役人、

其次の間に跼踞つたる町人體の若漢は、探偵風にぞ見えたりける。留守居の紹介に、彼武士は横柄に左門に向ひて「身共は御小人目付何某なるが、先月廿二日の夜溜池に於て、本所の浪人佐々木源次郎を殺し、蓼子金糸を拐帶して立去たの曲者、すでに金子までも残し置きたる上は、固より物取り強盜の所爲に非ず、其夜かの場所に出て合せたるは即ち是なる探偵なるが、其中し立に由る時は、六角左門と云ふ名をば聞たる如くに覺えたりとの事、御手前には、其覺え曾て是なきや、又た其方は此左門をば、其時夜目に透し見たる曲者に似たりとは見えざるか、右取調の爲に内々に罷り越たり」との口上に、左門は南無三寶露顯に及びつるか、我一命は敢て惜むに足られども、若殿の御身の上にも係る大事、早まる所にあらず、彼探偵が何と云ふやらんと猶豫ひ居たるに、探偵はつくづくと左門を見て「御姓名は同じにてあらんが、其人相恰好は全く相違いたして有るやうに存じます」との返答に、左門は虎口を遁れし心地にて「拙者儀は其夜在宅いたし、更に存ぜぬ事で御座る」と申立れば「然らば夫れに事濟たり、身共も當家の御頼を受け、兼々御出入いたすゆゑ、表立ざる其内に參つたる分の事、人違にて重疊なり」と挨拶したれば、留守居も一禮述べて手當の目録など贈りて歸したり。是ぞ全く備中が計らひにて、彼の御小人目付は、素より朝倉家の出入の幕吏なれば是を語

らひ、幻吉之助を探偵に探たせて斯は謀らひたりければ、左門は更なり、留守居も夫れとは覺らざりけり。斯て兩三日を経たる後に、備中が許より左門を呼迎たり、左門は様こそあらめと赴きたれば、備中は左門を近く招き、家來共を遠ざけて聲を潜め「貴殿が源次郎を手に掛けて殺害なせしは、若殿の放蕩を憂ひ金糸を殺さんとして、誤つて殺せしに相違は有るまいがな、イヤサ隠すに及ばぬ、包むに及ばぬ、貴殿と源次郎と二人が其場の物語は、彼金糸が盡く樹蔭に隠れて聞いたりとの申し立、……、ム流石は左門、天晴なる忠臣義士、その心底を見込み、今改めて備中が苦心の程を打明し、貴殿を頼む一大事あり」と思掛なき備中が詞に、左門は意外の思に返答も出てざりけり。

第廿二回 忠義の假面

岩田備中は、やたら膝を進め、聲を潜めて六角左門に對ひて申しけるは「左門殿、御邊は年若ながらも、忠義に凝たる天晴の武士なれば、今改めて備中が心底残らず申し聞けんが、御邊には今日常朝倉家の御狀勢如何ぞと察せらるゝな。後室貞松院様には、故民部様の御跡目として、靜姫君に養子となして、三萬石の内

分分地、再興させんとお思召し。太守様(修理大夫)には御孝心厚ければ、其儀御承知あつて、既に去年御一族の御寄合に於て、内々の仰せ出され、御親類に於ては異議なければ、追ては其御沙汰にも及ばるべし。抑も大祿を割て分家を立ち立て、備中敢て異存なきに非ざれども、去りとして太守様の御孝心に戻らんは恐れ多しと差控へ、密に愚考を運らす處、靜姫君方へ然るべき御連合を定めらるゝ上は、自から御分地沙汰も相止み申すべき歟と心附きたるに由り、其事に心を配り、漸く目的を達すべき迄には相成つたり(是は備中が悴の大内藏を御連枝に昇せ、靜姫と密に通じある事を、左門も推察したるに付き、其言譯なり)然る上は、御分地も及ばずして、事すべく落着いたすべし、尤も是は申さば一の小事にして、未だ大事と云ふに足らず。大事と云ふは朝倉の御家、十八萬石の御興廢、すでに若殿式部丞様には嫡子御目見も濟せられ、動かす可きにあらずれども、御邊も知らるゝ如き御柔和の御性質を幸に是を退け、當家押領なさんとする非望の心を懐くもの、敢て一人にあらず。先づ第一には、交代寄合大内記殿の舍弟朝倉采女殿、是は朝倉家の嫡々日向守様の御曾孫なれば、系圖より云ふ時は正しく正統の御血脈。次には脇屋殿の御舍弟小次郎殿、これ太守様御實家の從弟にして、當家に御縁は薄けれども、何を云ふにも當時威權並び無き田沼様の御氣に入り、懐小刀

と人に言はるゝ脇屋ゆゑ、如何なる手段を運らして工夫をなさんも知れぬもの。其次には星影宮内様、これ太守様の御舎弟にて、尤も親しき御中なり。然るに若殿の御墮弱、某も御諫申さぬにはあらねども、水の出端の勢なれば、御開入にも相成らず、其上に又事あら立て云ふ時は、彼の人々が好機なりとて、是に乗じて御當家を播亂の恐あり、寧ろ其儘に致し置き、由断させるが却つて御身の爲なりと心付き、太守様の御前をも取り締つては置いたるなり。但し公邊の所は、某が其役筋に手を廻し、豫め防ぎ置いたれば、不首尾の恐は會て無し(是れ若殿へ金糸を進め放蕩に仕込みたる申し譯なり)扱又奸人等は、若殿已てに墮弱なれば、御總領を除かんは安けれど、妨げなすは御妹の定姫君、この姫君を除かねば、非望を達するに邪魔なりと心得たるか、先頃よりして余が胸に落さる御奥の様子。既に昨朝姫君へ御膳を上げたる其の節に、忠義の老女藤波が怪しと見たる御汁の内、御毒味あれよと差圖に従ひ、御腰元の瀧川が、毒味の間も無く其座にて血を吐ての苦しきは、常事ならぬ御殿の騒動。余直に奥御用人に相談なし、深く其事を秘め置いて御膳番はじめ掛かりの女中、夫々吟味をさせたれども、何れが善か何れが悪か、黑白も分ぬ人心、もし此儘にて成し置くときは定姫君の御命は、草葉に置ける白露の、尤も危き御有様、證據も無き事なれば、口外すべきにあらねども、

當家を望む輩が、貞松院殿と心を併せ、靜姫君を立んため、斯く謀りしにはあらざるか、油断ならざる今日の状態、これに付き御邊には、誠この朝倉家の御爲一途と、忠義を貫く心底ならば、定姫君を夜に紛れ、陰に御殿を誘ひ出し、人知れざる其所に忍ばせ申し奉れ、其潛家は云々なりと兩眼より涙を流し、眞實見せて脱たれば、左門は初て聞たる御殿の戀事、且は驚き且は怒り、心惑ひて、備中が心底深く疑ひしは、扱は我眼力の違ひしにてありつる乎と、世事に慣れざる悲しさは、浮と乗たる辨口に、情なくも欺かれ「然る上は此左門が一命に替へても姫君を救ひ奉らん」と諾ひて、猶も密議に及びたり。

第廿三回 女隠居

朝倉家にては一方ならぬ騒動に、奥を表へとの混雜、その仔細を問へば、十二月廿五日の夜、御奥殿にて、御年忘の御催しありけるに、その夜よりして定姫の御行衛知れず。御附の女中、芳野、初瀬の兩人は、無慘にも奥庭の泉水の邊にて斫殺され、其上に奥御締りの非常門の鑰を捻切りて、出たりたる足跡あり。猶も不審きは、御小姓頭の六角左門其夜よりして病氣なりとて出仕せず、其住店を捜させたるに全く逐電の體たるを

隠すべくもあらず。平素より物堅く見えたる壯伎の左門こそ、膽太くも定姫君を誘し拵へて、不義の懸路を  
 通はし、露顯を恐れて斯は伴ひて逐電なしたるなれ。先頃溜池にて御當家の浪人、佐々木源次郎を殺したる  
 も、彼左門と云へる噂も立ちて、公儀へさへも聞こえたるに、旁々以つて不埒の曲者、公儀より御手の入ら  
 ぬ中に、早く此方にて詮議をなし、其始末を附け申さては叶ふまじいざ、と家老川人等一同の評議に及びた  
 りければ、修理大夫殿も其儀に計ふべしとは御沙汰ありけり。岩田備中は、心の底にては、我思ふ壺に入ら  
 りと悦べども、表面は飽まで善人を粧ひ、一座の家老等に對ひて「定姫君の御事、表向の評議は右の如くに  
 決したりとも、仰せに任せて一概に事荒立んは御家の耻辱、もし公邊より御沙汰も有るべき勢ならば、余の  
 手蔓を以つて田沼殿へ内願いたさば、如何様にも其取締は相成べし、先當分の所は、此事極めて秘密になし  
 置いて、御一門の衆へも相知らせず、釋にして内々の詮議に姫君の御在家を相尋ね、すべく御館へ御引戻  
 し申すに若かず、此議如何」と涙を流して述べたれば、日頃備中に同腹の輩は云ふに及ばず、備中に疑を懐  
 ける者までも、其詞に惑はされ、理の當然に服して、其儀然るべしとは、同意したりけり。此輩の迂濶さは、  
 左門をして定姫を誘ひ出させたるも、備中が密計にして、斯も一旦は評議を荒立て、更に是を取鎖めたるも、

備中が深き心の功夫とは、一向に知らざるぞ愚なりける。斯て其年も此騒の中に暮行きて、明れば天明七年の  
 春にもなりて、朝倉家の奥表平年の如くに祝ひ囃せども、何と無く瀉りては見えたりけり。松の内の佳例も  
 果て後、正月十八日と申すに、貞松院殿は皁月御殿を出て、本殿に來り、改めて修理大夫殿に謀るべき事あ  
 りとて備中はじめ家老一同も列席の沙汰を承はり、御次へこそは控へたれ。貞松院殿は、不興氣にて修理大  
 夫殿に打向はせて「扱も當家の不取締、片腹痛き限りなり、女の身にて隠居てはあるなれば、是迄は空耳と  
 聞き流しては候ひしが、最早和殿に申さては相叶はじ、先づ第一は靜姫へ弉養子分地の事、すてに一昨年の  
 十月、一門の評議に事決したるに、今日に至るまで、大内藏どのへの縁組、事行はれざるは如何、妾へ對し  
 ての御疎略か、但し大内藏どのが、和殿の御意に叶はぬゆゑか、確と御返答承はりたし。次に嫡子式部丞殿、  
 去年よりして墮弱の身持、暖しき藝妓が色に溺れ、別荘にて不仕だらの數々、此節にては根岸の里へ忍び通  
 ひて、其藝妓に戯れ申さるゝと世上の取沙汰その隠なく候ふぞ、是が大名の若殿の御行跡と思さるゝか、憚り  
 ながら朝倉家十八萬石の相續覺東なしと、存じ侍るに、和殿には更に御成敗の是なきは如何。次に定姫どの  
 事、六角左門とやら云へる近習の者と密通に及び、逐電の不始末、武家の法度、家法の締り、嚴しく行衛を

詮議して、きつとの御沙汰もあるべきに、其儘に差置かれ、剩へ内々には御箱より見續がるゝと云ふ噂、これ如何。畢竟和殿には式部丞殿と云ひ定姫殿と云ひ、父子恩愛の絆にほだされ御仕置なきも尤なれど、去迎は朝倉の御家、今日に及びて瓊瓊の附をお構ひ無きか。女なれども當家の隠居、和殿の御心底承はり申すべし」と息せき巻まて仰せければ、修理太夫殿ははつと計に胸蕪むき、暫し答も無かりけり。

第廿四回 押籠逐電

修理太夫殿は、稍あつて貞松院殿に對ひ一段々の仰せ、修理忍入り奉る、家政の治まらぬは、修理が過ち、其爲に母上へ御苦勞を掛け参らせたるは不孝の罪遣るゝ所なし、此上は如何様にも母上の思召次第、承はつて取計ひ申さん」と孝心厚き修理大夫どの兩手を突てお答ある。貞松院どの首を打振つて「否々妾は和殿のお訛言を聞くが詮では候はず、又女隠居の分として、争で思ふ様に沙汰いたし申すべき唯々前申したる三箇條につき、和殿の心底承はればそれで済む事、サ、御返答聞かせてよ」と飽まで言詰め有無の返答言はせんものをと詰寄せらる。岩田備中は恐るゝ次の間の罅隙に進みて「アイヤ御母公様、其答は恐れながら此

備中より申し上げん。先づ御分地の一條、殿に於かせられては、素よりして一日も早く取行はれんとの思召し、去りながら、靜姫様の御出生に付しては、己に御一門の御方にも御母の素性如何との御疑ひ、其の上は大内藏どのを御掣とは、前方の御内相談、愈々と仰せ出さるゝには、大内藏殿の性質所業篤と御見定あらんと、御尤の御儀なれば、敢て捨て置かるゝに候はず、是れ今日まで事延たる次第なり。次に若様式部丞様の御身持、決してさる御墮弱に非ず、尤も御曹司の身にて御座あれば、一人二人の御侍妾召置るゝとも、何の仔細の候ふべき、事大形に申し做すは、全く讒者の舌頭に出たる讒言、併し夫れ以つて宜しからずとある上は、御家政を預り奉る此の備中が過ち、如何様とも御咎を蒙り奉らん。次に定姫様の御事に付きては、我殿より殿しき詮議の御沙汰ありしを、今日まで猶豫したるは、是以つて備中が、仰せを矯たる取り計ひ、何様の御沙汰を蒙り候とも聊か以て御恨とは存じ奉らず」と舌も淀まず辨じたりければ貞松院殿も然らばとて其日は其儘にて御歸館なされたり。是ぞ其實は岩田備中が陰に是等の事を貞松院どのに告げ参らせて種々に讒言なし、式部丞は身持不埒につき押籠となし、定姫は出奔したれば追捕の上を押籠となし、兩人とも家督に及び難ければとて、靜姫大内藏をば家督に立んとの陰謀に、貞松院どのも、實の孫の愛に溺れて同意せられ、



扱こそ此尋には及ばれたるなれ。

備中が其身に罪を惹たる返答にて、其場はそれにて済たれども、修理大夫殿は、深く養母へ對して面目を失はれたる事なれば、此儘にて打捨置べきに非ずとて、備中等が諫め聞入れ玉はずして、若殿式部丞を本所の下邸へ移し、公儀へは病氣の由を届けて、押籠の身と成され、厳しく番人を、附け置かれたれば、彼の金糸との通路も絶たれたり。されども備中が内々の計ひにて、番の侍等に云ひ諭し、人知ざる躰にもて成して、猶も金糸をば押籠の間に引入れさせて、式部丞が心を惑はせれば、改悛の念は更に出でざりけり。

次に定姫の事は、左門が誘ひ出したるも、原々備中が取計ひにて、彼の毒殺の事さへ實にありて、然も是以つて備中が藤波と謀りてわざと瀧川に毒味させて死に至らしめたる狂言なれば、定姫はそれとは知らずして、恐れ戦きたる所に、左門が不意の誘ひ出し、非常門の外より駕籠に乗せられ、品川なる御菩提所の方丈へ忍住居して、暫し世を隠れさせ玉ひ、老女の藤娘は日毎のやうに來りて憐を慰めしが、左門は嫌疑を憚りて、外侍に相詰めて、是も備中の報知を待受たりけり。然るに同じき廿三日の夜に入りて、思ひも寄らず、朝倉家の打手の者ども向ひ寄たれば、憐むべし左門は備中が奸計に陥りて、其身を果すとは知らずして、此を前

途と防戦して最期を遂げたりしが、定姫は如何したりけん、其場より行衛知らずに成られたり。

### 第廿五回 松本の邂逅

茲に佐々木源五兵衛が後家のお澤は、娘のお弓が橋町の踊子金糸となりたるにて、稍々飢寒の難儀は免かれしが、思はずも其義姉の奴が縁より、故主朝倉家の若殿に思はれ、其爲に若殿の御放埒、御家の騒とも成るべき程に至りければ、娘の金糸を義絶なし、病上ガリの悴源次郎の稼にて、備に其の日を送りしが、源次郎は何者の手に罹りてか、溜池にて不慮の横死、その上に金糸の行衛さへ知れざりければお澤は左ながら沖に漂ふ捨小舟の如く、寄邊さへ無き身となりて瀬にも沈み、首をも絞らんと、幾度か思ひ詰たれども、源次郎が恨の敵をも報ひ、又金糸が身の上をも知り度ければ、惜からぬ命を承らへ、其の日の活計に盡果て、袖乞と成り、夜々人の軒に立ちて、合力にぞ與かりける。然るに、去年(天明六年)の暮、計らずも、住吉町の奴が宅の塀外にて、立聞したる小柄の噂、踊子の金糸を引渡ひ、佐々木源次郎を殺して立去たるは、岩田備中なりとの懸け合ひ談判、主は誰とも知らねども、正しく子供二人が身の上と始終を聞いて其場を去りしが、

(即ち第廿回の事なり)其岩田備中こそ我亡夫を讒言して、浪人させたる良人の仇、返すくも怨ある備中づら、夫の敵悻の敵、如何にして此仇を報ふべきかと、女の身の力なきを嘆ち、夫に付けても娘の金糸何所に今隠れ居るならんと、案じ暮して涙の乾く隙もなかりしが、年改りて二月の初に至り、或日茶屋使替の吉岡町なるお澤が住家に来りて、一封の手紙を差出して、直に御同伴下されよとの口上、披きて見れば、娘金糸が手にて、直さま深川八幡の松本まで、御出願ひ上まゐらせ候ふとの文面、あらなづかしや、娘のお弓と餘りの嬉しさに、其の身の粧の不恙なるも打忘れ、帯引締て其使と與に、急ぎ松本に至り、一間に打通れば、娘のお弓(金糸)は待兼て、久々の面會互に手を取りて、先だつものは涙なりけり。積る話も一通り畢れる頃に、次の間の隔の襖を押明て、入來れるは岩田備中、お澤は不意に打驚きて、備中が顔打眺めて、唯怨の胸に塞がりて言出す詞も無かりけり。備中は座を占て、久濶の挨拶に及び「扱も御身には某をば夫源五兵衛殿を浪人させたるものと怨みて御座すらんが、源五兵衛殿御勘當は、貞松院様の御驕奢を意見あつて、御憤に觸れたるゆゑ、全く備中が存せぬ次第、その後機もあらば、殿様へ御詫言をと存せし中に、源五兵衛殿の死去、嘆きても其甲斐なし。但し是なる金糸去年計らずも酒席にて面會したるに、源五兵衛殿の息女、

奴に言ひ付け身の代を償はせ、及ばずながら世話させたるも、即ち源五兵衛殿へ盡す寸志、扱源次郎殿の横死、その相手は即ち六角左門、これなる金糸を附狙ひ、若殿を綾なす女一討と、既にかうよと見きたる所に、機よくも源次郎殿居合せて、金糸を救ひて防戦なし、遂に左門の毒手に罹つて、非業の最期を遂げられしを現に某後馳に其場へ参り木影にて様子を見たれば、憎し曲ものと小柄を抜て早速の手裏剣、當は外れて左門は其儘逃失たるが、其詮議を恐れてか、膽太くも定姫君を奪ひて遂電なし、品川の御菩提所に潜み居たるを、此程内々打手を差向け、左門を殺したれば、源次郎の仇は全く討取つて、其怨を解したり。其始終は金糸こそ宜く承知して居るなれば、篤と聞いて疑を解されよ」と、虚と眞を取交へて、辯舌巧に述べたりけり。金糸も亦傍より、夫れは斯々、其時は云々と、事の状を物語りたれば、神ならぬ身のお澤、扱は左様にてありけるかと、稍々恨も解け掛りつるに、金糸はまた其身が危難を備中殿に救はれ、其上に若殿様の御事をば、備中殿の陰になり陽に成りて、守護し参らせらるゝ事の一方らぬ心勞ども、脱き聞かせ、備中も亦、斯く成るからには金糸の身の上は云ふに及ばず、お澤の身がらも引受て世話すべしと請合ひて、夫れに附ては秘密の一條ありと言ひ出したり。

## 第廿六回 御守殿も高

備中は詞を更めて、お澤に向ひ「御身も知らるゝ通り、朝倉の御家は當若殿式部丞様、御家督と事定り、定姫様には、他家へ御縁組相成るべき御身、尤も静姫殿は故民部少輔殿の遺女にて御座あれば、貞松院様御血續の御孫ゆゑ、御秘蔵は御尤、併し式部丞様定姫様を差置いて、静姫殿へ十八萬石の御家督をとほ、過分の思召し、然る時には御家の騒動、幸ひに某が悴は殿様肉身の御甥なれば、御一門に列せられ朝倉大内藏殿とお上通のお扱ひ、依つて大内藏殿と静姫殿を夫婦になして、三萬石の分地、民部少輔殿のお跡目に致しなば、貞松院様のお望も先かつくお足り遊ばされ、御家も圓く治まる道理、すでに此事御沙汰に及ぶばかりの所へ、思はぬ邪魔は御親類の脇屋殿御父子、静姫殿の生の母は俗根賤しき小家者の女とて、淺草の某と云へる非人の娘、その證據は静姫を預つたる佐々木源五兵衛が後家澤と云へる者が、白洲の白狀云々なりと、某へ對して内々この故障、勿論世の諺にも、腹は借もの申せば、小家者として此備中は敢て恐も致さぬが、左様噂これあつては、實に朝倉家の御瑕瑾と、備中心を痛め申す、何故あつて御身には、左様の事を脇屋殿へ申

し立られしぞ」と問ひければ、お澤は驚きて「そは痕跡も無き脇屋殿の虚言なり、其白洲にて問はれし次第は云々」と語りたり。

備中はお澤が物語を篤と聞て「扱こそ脇屋殿の空言にてありたるなれ某も左様でありなん、よも御身程の人が、女てこそあれ、個程の大事を白狀あらんとは思はざりしかど、既に六角左太夫死去の砌り、極密にて某へ語り置たる静姫殿の生母の素性、脇屋殿がどうして其をば存知である歟一ツの不審……」と語りければ、お澤は此備中すてに六角左太夫より聞たる上は、隠し包むに及ばずと思ひて「かく御存知とあらば告げ申さん、私が聞き及びましたるも其通り、其頃民部少輔様、いまだお部屋住にて國許におはせしに、江戸より参りて御城下で興行したる女芝居花川芳江と云へる女俳優實名はお勝と云へるが、稀代の美人にて、年の頃は廿ばかり、如何してか民部様の御目に止り、誰が掛たるか戀路の橋、忍びくの御寵愛に芳江のお勝唯ならぬ身と成つたれば、左太夫殿が御内意受て身二ツになし、御出生の女子即ち静姫様、その芳江をも御召仕にと、身許素性を糺したれば、仰せの通り淺草の小家者金右衛門の娘お高と申すものにて、美人の評判、御守殿お高と云はれしもの、其後江戸を立去りて、素性を隠し、女俳優の群に入りたりと分つたれば、左太夫

殿は大きに驚き、其女には許多の金子を興へて、御城下を立去らせ、民部様へも其事を深く秘て、我夫の源五兵衛と相談の上にて、我等夫婦が預つて、御養育いたしたりと」の物語、備中は扱こそかの朝日の巫は、其御守殿お高の花川芳江なりけりと、心に悟りしが、色にも出さず、打諾きて「某が左太夫より承はつたるも、誠に其通り、併し唯今に至り、其事露顯いたしては、御家の耻辱のみならず、云はゞ故源五兵衛殿、左太夫且は御同様の身の上、此上はどこの迄も隠しおふすの外無し、此後如何なる筋の尋ねに遇ふとも、決して白状す可からず、夫れは兎も角、案じらるゝは若殿の御身、朝倉の御家をば押領なさんと巧む御一家、脇屋殿を初として、或は大内記殿、星影殿三方四方に覗ひ居て、機もあらば若殿を毒殺するか暗殺せんと、内々巧む悪事の段々、此備中が心を碎くは此の事、某に成代り、若殿の御側に忍びながらに附添て、御守護をするは金糸の大役、御身も御苦勞にてあるべきが、今よりしては金糸に力を添へ、陸ながらの御守護、備中折入りお頼み申す、但し御下屋敷の御懐中にて御座れば、金糸とてもお側に居るは、某が内々の計ひ、幸ひ某かの近所にて、或旗本の下屋敷を密に借用いたす手筈、それへ母子が引移り申合せて意を注て玉はれよ」と猶細々と云ひ含めて分れしが、日ならずして其如くに行行ひたりければ、お澤は備中に深き巧のありとは

知らず、飽までも故主の家の御爲と思ひ込み、且は娘が若殿に離れがたきを不便に思ふの餘り、萬事備中の差圖に任せて行ひたりければ、式部丞が放蕩の悪評は益々世間に聞えたり。

第廿七回 金次郎申口

隠すとすれど隠されぬは人の悪事、殊に品行の善悪は尤も世の人口の喧しくて、針程の事をも、捧ほどに噂するが世の習ぞかし。扱も朝倉家の家事不取締の風説は、既に世間に隠なく、若殿式部丞は賤しき跡子金糸の色香に迷ひて、大名の嫡子にあるまじき身の放埒下邸に籠居して、公儀へは病氣と言ひ立、御禮御慶賀の登城さへ等閑がちにてありながら、彼金糸をば内々にて召寄せ、淫酒に耽りて放蕩墮弱に身を持ち崩すとの事また次には息女定姫は、家來六角左門と云へる者と密通なして、本邸を透電なし、今は其行衛も相知れずとの事、次に六角左門は、溜池に於て浪人佐々木源次郎を殺害なし人殺しの大罪人たるを、朝倉家に於ては深く押隠し、其後露顯を恐れて菩提所へ隠し置けるが、陰かに討手の者を差向けて、私の成敗を致させ、公儀を憚り奉らざる事ども、内々は幕府に聞えたりとて、時の關老田沼主殿頭殿より、内使を以つて朝倉家への

注意、同時に大目附衆よりも、内密にて忠告に及べし、此上は公儀より改めて御沙汰の無き内に、式部丞病氣に付き、廢嫡の願を立て、一家一門の中にて然るべき人物を養子に成して、當主修理大夫殿には隠居いたされ相續の願を出されて然るべしとの事なりければ、朝倉家の騒動は喩ふるに物なし。是は岩田備中が貞松院と申し合せ、田沼殿はじめ、御目付の筆頭へも厚く贈物なして、頼みに及びたれば、田沼殿および大目付にも風聞を取糺し、誠に備中が内告の如くなるを以つて、此内沙汰をば成さしめられたりとぞ。

右に付き朝倉家に於ては、一門の大評定、朝倉大内記、星影宮内少輔（此時は既に御目付より御普請奉行に轉任）脇屋父子、朝倉大内藏、其外の歴々列席に及び、當主修理大夫も貞松院と與に、上座に着坐せられたり。修理大夫はもとより其の身家事取締の誤りなれば、諸事一門の評議に従ふべしと申されけるに、大内記則重は深く存する旨のありてや、一言も述べられず、星影宮内少輔も亦沈黙したりけり。貞松院は備中と顔見合せて、左こそと思ひ一座に向ひ「女の身として言ひ出ださんは、憚あれど、妾こそ當朝倉家の血統にて當主修理殿の正母なれば、存する所を申し出べし、式部丞身持放埒とありて、既に公儀の御聽に達し、定姫また不義なして出奔の上は、當家相續いたさんものは、靜姫ならで外に無し、姫は正しく故民部殿の娘にて、

朝倉家の正統、かつ大内藏殿は、當主修理殿同腹の妹の出生にて、血筋の切なれば、大内藏と夫婦の内祝言も、此程この尼が執行はせ置いたるに付き、此由緒を以つて、速に公儀へ御養子の願、差出されて宜しかるべし、此の儀如何思はるゝや」と女性ながらも、理を推して申し出されたりければ、一座の議論は區々に分れ、落着すべしとも見えざりけり。脇屋新右衛門は一聲張上げて「否々靜姫の事、其生母の素性、尤も賤しき身分なれば、非人の血筋を以つて、朝倉家を穢さしむるは尤も無用なり」と批難の點をぞ打たりければ、一座白らけて見えたりけり。次の間に扣へたる岩田備中は、進み出て「コハ怪からぬ仰せかな。シテ靜姫様の御生母を、非人なりと御意あるは、如何なる證據の御座あつてか一言ふな備中、かの靜姫の生母は某と云へる女俳優、その素性は淺草の非人金次郎が叔母たる事相違なし、已に此程金次郎を呼出し、取調に及びし處、これ此通り白狀と、懷中より書面を取出して讀みたりける、其文體に云く

淺草非人亡金五郎悴

金次郎

恐ながら申し上げ奉り候、私祖父金右衛門には悴金五郎娘たかと申すもの兩人御座候、金五郎は私父に御座候、たか儀は生得器量よろしく、其頃世間にて御守殿お高と評判いたし候よし、然る所、十七歳の頃不曉いたし、家出欠落、行衛相知れ不申候、尤も其後上方筋へ罷越し、身分押隠し女役者と相成り候趣、亡父金五郎存生中、隙に候旨申聞候、右御尋に付、申上げ奉り候、以上

天明七未年正月

右 金次郎判

どうじや、備中一言の疑はあるまいがな、ナント感心いたしたるか」と小鼻齋動して一座をきつと見渡したり。

第廿八回 朝日の書置

岩田備中は片頼に笑を含みて「これはく脇屋様には、御守殿お高の身許御詮儀御入念の程感心いたして御座りますが、其たかと申す女が、静姫様の御腹に相違ないと申す確な證據が御座りますか」と問掛たりければ、脇屋新太左衛門は「別に書面の證據は無けれど、故民部丞いまだ部屋住にて在國の砌り、城下へ罷り越し芝居興行いたしたる女役者を寵愛なし、腹に宿したるが静姫と云ふ事、深く秘密には致せども、其隠は更に無い、其事實が即ち證據なる程、然らば其女俳優が、非人の高に相違は御座りませぬか」「サア非人金次郎の申し口にも女役者と相成つたとある上はそれが争はれぬ事實で無いか」「是は怪しからぬ、此の日本國中に許多ある女役者、それを非人のたか一人に御差極とは、近頃以つて脇屋様、御役柄にも御不似合かと存じまする」「黙れ備中、この新太左衛門が、御目鏡を以つて仰せ付られたる盜賊火附改役の眼を以つて睨んだ上は、其女こそ非人のたかに相違無いワ」「もし相違いたしましたら、當御本家へ對せられて、尊公には御申譯を何と成されまする」「御本家へ對して申譯には切腹する」「確と左様で御座りまするか、然らば静姫様御生母の素

性。備中攻めて申し上ませう」と傍の用箱より取出して、一座の前へ差出たる書面の數々、先づ第一は朝日の巫より岩田備中へ相送つたる書面にて其大意を舉れば

我等(朝日の巫)今よりして心を決し、遍く諸山廻歴して神道の秘意を修行いたす所存にて、此程人にも告げずして、江戸を立去つたり、就ては貴殿より、此旨を貞松院殿へ宜しく御申上下さるべし、次に宣旨御免許状とも、別封の如く御預申候間、我等修行相畢り候まで、大切に御預り下さるべし、抑々我等此念を發したるは、我身往時の不埒、ひたと懺悔よりの事なり、其故は、其御許の靜姫殿こと、實は我等の出生に候ふ、我等が父は京都御藏小舎人、多々見備後守と申すもの、母は萩生宰相の娘うき橋、其頃父にて候ふもの、若氣の誤より、御所へ仕へたる女房浮橋の局、即ち我等が母と不義の密通いたし、露顯の上にて、御所御暇と相成り、兩人同道にて江戸へ下り、由縁を以つて根岸に住居いたし、父は栗田頼母と改名して、上野寒松院の寺侍と相成り、我等其頃出生にて候、其後、我等十歳の頃、父死去いたし、十三歳の頃、母と同道にて京都へ歸り、岡崎村に住居、十五歳の時に母も死去いたし候に付、其頃女舞相學び候ふ者の手筈を以つて、大坂へ下り、花川芳江と改名して女役者と相成り、諸國打廻り候節に、十八年前、美濃へ

罷り越し、同所御領主の御舍弟朝倉民部殿に契り、女子を生落し候、然るに御同人家來六角左太夫と申するもの立入り、女子は縁切にて先方へ相渡し手切の金子貰ひ受けて、同所を立去り、爾來諸所興行の後、右の業跡を相止め、山緒を以つて京都住居陰陽師水谷全之進一心齋の養女と相成り、陰陽道相學び、養父死去の後、跡目相續いたし、其道出精生達に付き、土御門家の御執奏を以つて、恐多くも朝日の巫の宣旨を頂戴仕り、江戸表へ罷下り申候、然るに計らずも、朝倉家へ相招かれ靜姫殿を見參候ふに、正しく其昔し我等が生みたる女子、名乗るには名乗られず、實に我身の上の過とは云ながら懺悔の至り、我と我に耻申候ふ、此條にては神明へ對しても恐あるを以つて、心を清めんが爲に、修行に立出申候ふ、此事門人等へも告知せ申さず候ふ間、御秘め置下さるへし

「此主意にて天明六年四月十三日の日附、朝日の自筆、印形をも据たれば疑ふ所あるべからず。此手紙に添たる宣旨免許状は封の儘にて此にあり、御一覽あるも差支は候ふまじ、次に備中が手にて、此の事實如何と取調べたる處、上野寒松院に於ては、栗田頼母と申す侍先年召使たるに相違なしとの返詞にて、年限も符合いたすなり、次に根岸を取調べたるに、上野宮様御代官より、此通りの返事、これ以つて一々符合せり。俗

其次は京都の方にて、御藏小舎人多々見備後守密通の罪科にて御暇の事、事實相違なしと、禁裏附諸大夫よりの御回答、また荻生宰相殿の御家にて浮橋加殿家出の事、その後年を経て岡崎村へ住居の事も其通りなり但し此事世間へ披露あるべからずと、同家諸大夫よりの返翰、一々此通りなり」と、数々の書面を取揃へて、一座の方々に示したりければ、一分一點疑も無き確の書面、貞松院を始め一座みな打驚きて、扱はかの朝日の巫は、静姫の生の母にてありけるか、道理こそ顔容の宜も似たりけれ、斯る素性の女子ならば、其父母は正しく堂上官人として、筋目正しき身分なり、それを賤しき素性非人の腹とまで罵られたるは何事ぞやと、貞松院は殊につぶやき申されたり、備中は得たりと云はんばかりに、脇屋新太左衛門を見て「脇屋様、これでも静姫殿は非人のたかが腹の御出生で御座りますか」

第廿九回 非人の叔母

右の如く、岩田備中が一座に示したる書面の中にて、朝日の巫が書置は、いかさま自筆に相違なく、宣旨免許状みな眞物たる云ふ迄も無し、其外寒松院、上野御代官、禁裏附、荻生家の返書回答、これ以つて其通り

に相違なけれども、其實は岩田備中が密に朝日の巫と謀りて斯る書置を拵らへ、其より厚く黄金を賄ひて、皆この如く返書回答を得たるなり。去れども此事誰も知人なかりければ、追の脇屋新太左衛門も口を針ぎて一言なく、況て其他の方々は皆静姫の生の母の素性に驚きて、斯る上は貞松院殿の宣ふ如く、静姫殿に聲養子して朝倉家を相續せしむるとも、更に差支なかるべしと迄に、評議は進みたれども、脇屋は未だ全く同意せず、さるにても御守殿お高が素性こそ怪しけれ、朝日の巫は其お高であるべきにと云ひ張りて居たりけり、斯る所に取次の侍は罷出て「脇屋様へ申し上げます、浅草の非人なりと申す女、金次郎同道にて、過刻御邸へ参上いたしたれば、是へ御越しとの事に付き、早速罷出まして御座りますとの事で御座ります」と傳達したりければ、脇屋は「ナニ非人の金次郎が、御守殿お高を同道して参つたとな、ム、幸ひく、丁度よい所であつた、苦しう無い直に此なる庭先へ廻らせい、サア御一座の御方々、此新太左衛門が静姫の眞の母を御覽に入れう、備中も心を鎮めて見物せい」と恰ながら早天に大雨を得たるか、敗軍に援兵の來れる思ひにて、俄に蘇生の心地して、來るを遅しと待受たり、程なく庭の切戸より入來るは非人の癩病女片輪車に打乗りて、金次郎に引かれて、殿げの藁の上に轉ぶが如くに座したるは、興覺て見えし。脇屋は聲荒げて「コリヤ非人



の金次郎、何故あつて見苦き此癩病を召連て、目通りに参つたか、シテ其方が叔母のたかは、何れに居るか」と叱り附れば、金次郎は恐る／＼「ハイ是なる女がたかて御座いまする」「ナニそれがたか、あの御守殿お高と云はれた女か」「ハイ左様で御座いまする、昨晚遅く突然に私小屋へ参りましたに付き、段々と承はりましたる所、形は此通りに變つて居ましても、全くたかに相違御座いません、小家内の年寄共が集まつて、種々と尋ね試みましたるに、返答と云ひ、昔咄し、一々符合いたしまするに由つて、たかと申す事が相分りましたゆゑ、兼てのお差圖に従ひ、早速召連まして御座います」との申し立、癩病の女は「ハイ私がお尋のたかて御座いますよ、一鉢非人小屋では、一旦欠落をした者は父子兄弟でも、二度と再び、戻さぬがきつい作法。私も若い時に同じ仲間の二才野郎と乳揉合ひ、お腹には子は出来たし、仕方なしの欠落で、諸國を流浪いたしましたるが、子は亡なり、男には死なれて、とう／＼乞食になり下り、其上に此通の病氣に成つて乞食仲間の嫌はれもの、詮方盡て此中から江戸へ歸り、噂に聞けば加役の脇屋様で私をお尋れて、朝倉様と云ふお大名のお姫様のお母はお高だらうと仰しやつたとやら、御詮議ものになれば、戻つて宜いと昨夜歸つて聞て見れば、愈々それに相違ないと申す事、……ハイそりや若い時にやア、少しばかり小面も禿て居ましたから、

御守殿お高と仲間のものに評判もされましたが、今じやア埒口もござえませんよ……ナニ女役者に成つた事があるだらうと、所が奥山の乙藏でも烏賊藏でも、女を入れて道化をするのは、御法度だから出来ませんよ……成るほど東海道から上州あたりは、お貰ひ申して廻りましたが、美濃までは往つた事ありません……若殿さま、御戯談仰しやいますな、雪駄直しの芝居じやアあるめエし、其な馬鹿氣た事がござえすものか……ヘイ尊公がさう仰しやるなら、さう致しても宜しうござえます、成程小家者の金次郎の叔母で、御守殿お高と云つた女が、當家のお姫さまのお母に違エねエと極つたら、私が其お高だ、こいつア有がてエ、思ひ掛ねエ御供養に預るんだ、金次郎も是から樂が出来るぜ、叔母さんの余がお墜で、お大名の親類だよ、さう成りや脇屋様の旦那、貴所も私も同じ親類だ、こんな所に置かずとも、お座敷へ上げておくんなせエ……ナニ知らねエと、オイ女だと思つて馬鹿に仕ちやア可ないぜ、此方じやア些とも覺えの無エ事を、貴所が好このんで、勝手にさうだと極て置で、今に成つてゆすりかたりたア、何の事でござえます、サアかう成りやア此のお姫さまのお母アだ、オ、腹が減つた、飯を食はせて貰えませう、それよりやア熱燗一杯つけて下せエました、……ナニ歸れと、歸られぬエよ、人をわざ／＼呼び付けて、其上にゆすりかたりの悪名を附けて

モウ用が無から歸れと云つて、空手で歸れるもんか、どうか極りを附けておくんなせよ……と飽まですねたるれだり言、脇屋も是には困り果て、備中に相談なし、幾許の金子を與へ、此事決して他言すまじき旨を申し含め、漸々の事にて、納得させ、裏門より人目に付かざる様にして出し遣たり、但し備中も此かたいが朝日と云ふ事には氣づかさざりけり。

## 第三十回 朝日の墓

斯て其年の春も過ぎて、夏は既に央になりけり。將軍家御他界にて事後たれども、朝倉家の家督の事は、愈々式部之丞廢嫡と内議も決し、大内藏をば更て養子となし、靜姫と表向て婚姻せしむべしと事定り、岩田備中、年來の宿望此に成就せん計の時に至り、頼みと思ひたる田沼殿は不首尾の免職、その代に出られたるは、松平越中守殿、廢嫡の願は星影宮内少輔(此時大目付)を以つて、其儘に下げ戻され凡そ是まで一般に諸大名不行儀、甚以つて、台慮に適はず、去りながら既往の事は、別に御咎めなし、向後は當主嫡子は申すに及ばず、次男厄介に至るまで、急度行狀相憤み申すべしとの御口達、これにて備中が年來の計略も盡餅と

は相成つたりけり、其上に定姫には當年の春、左門が打死の刻より、大内記が邸へ逃込して事の仔細を逐一に告げたりければ、大内記は扱こそ備中が奸計なれと悟り、星影宮内少輔と密に謀りて、遂にかのお澤金糸が事までも聞き出して、直に修理太夫に報せ、嫡子式部丞を招寄て、其放蕩を誡め、併せて願末をも問糺したるに、是以て備中が内々にて遊蕩を勤めたる事と知れ、又貞松院を煽動し、靜姫の愛に溺れたるを奇貨として大内藏と夫婦になし朝倉家を相續させんとの巧み、残る方なく露顯に及びたれば、修理太夫の沙汰として、備中の家老職を免ぜられたり。備中は今は分疏も詮なしと思ひてや、六月廿八日の夜細々と謝罪の書置をなし、此事全く備中一人の逆意にして、貞松院殿、大内藏殿には素より少しも御存知なき旨を陳じ認めて、麻上下に服を替へ、物の見事に腹一文字に掻切り、自から咽を突いて自殺したるは、悪人ながらも流石に武士の根性は失はざりけり。

是に依つて嫡子式部丞は、本邸に歸り、病氣全快の旨を届出で、登城なし、定姫は大内記の弟、朝倉采女が内室となり、靜姫は大内藏と婚姻して、即ち分地三萬石にはなされたり。扱この分地の願聞届られたる後、數日ありて、鮫が橋の畔にて、片輪車に乗りたる、癩病の女乞食が懐劍にて左の乳の下を貫きて自害したり

けり。檢使も濟みて、非人に引渡されたるに、非人金次郎が申乞ひて、形ばかりの葬を爲したりけるが、其後施主は誰とも知れず、其墓に朝日之墓と云へる文字を彫たる石塔を夜の中に建たりとかや。

片輪車終

買收大策士序

噫政海の秘密は斯の如くに陰險なる乎、議院の擒縱は斯の如くに奇變なる乎。居士は門外漢なり、之を知るに由なきなり。但し世間の傳説する所を聽けば、醜怪、卑劣、貪吝、狡獪、たゞ黄金の令する所に是れ任せて、意見議論を上下するに似たり。噫、これ果して真なる乎、居士これを知らざるなり。姑く聽まゝを録して所謂買收政略に於ける秘密機關の實に然るや否やを、江湖の博識に問はんと欲するのみ。

明治三十年六月

櫻癡居士

## 罷去來辭

罷去來兮、内閣將ニ倒レントス、胡ゾ罷メザル、既ニ自ラ心ヲ勞シテ世ノ嘲ヲ買ヘリ、奚ゾ狼狽シテ與ニ慌ルヤ已往ノ失言ヲ悟リテ、輿論ノ恐ル可キヲ知ル、實ニ局ニ當リテ其未ダ遠カラザルニ、計窮シテ策非ナルヲ覺ユ、説搖々トシテ輕ク變リ、論飄々トシテ蝶ヲ吹ク、策士ニ問フニ方略ヲ以テシテ、政綱ノ凡庸ナルヲ恨ム、乃チ議院ヲ瞻テ、載チ懼レ載チ戰ク、書記冷迎シテ、守衛門ニ候ス、伴食位ニ備ハツテ、松隈猶存ス、帽ヲ脱シテ室ニ入レバ、案アリ机ニ滿ツ、草稿ヲ將テ自ラ讀ミ、演壇ニ登ツテ顔ヲ赭ス、質問ニ遇フテ鬪ヲ排シ、椅子ノ安ンジ難キヲ審カニス、議日ニ涉リテ變ヲ現ハシ、口設ケタリト雖凡常ニ關セリ、策歩ヲ扶ケテ蹇偃シ、時ニ首ヲ鳩メテ相談ス、胸ニ算ナクシテ綻ヲ出シ、答聽クヲ倦ミテ

妄ヲ知ル、足跟々トシテ逃ントシ、胸膈ヲ撫テ呻吟ス、罷去來兮、請フ冠ヲ挂テ閣ヲ退キ、世我ト相遺レン、徒ニ止ツテ言レ焉ニカ求メン、魂膽ノ茶話ヲ催シ、買收ヲ勞メテ急ヲ凌グ、黨人予ニ告ルニ機ノ迫ルヲ以テシ、將ニ議案ニ論アラントス、或ハ謙遜ニ托シ、或ハ抱負ニ逃レ、既ニ曖昧ニシテ嗤ヲ招キ、亦糶糊トシテ嘲ヲ惹ク、氣奄々トシテ絶ナントシ、脈纒々トシテ僅ニ存ス、壯語ノ責ナキヲ證シテ、吾運ノ行々休ムヲ感ズ、已矣乎、身ヲ内閣ニ寓スル復幾時カアル、曷ゾ念ヲ斷ツテ去留ヲ決セザル、胡爲戀々トシテ尙止ラント欲スル乎、富貴吾願ト雖凡、政局理ス可カラズ、遺憾ヲ唱ヘテ自ラ欺キ、或舊ニ仍テ僅ニ免ル、門下ニ向ツテ漫リニ誕キ、宴會ニ臨ミテ熱ヲ吹ク、聊カ時ニ乘ジテ世ヲ瞞ス、夫天命ヲ怨ムモ復奚ゾ盡ンヤ、

罷去來辭 (原文)

罷去來兮。內閣將倒。胡不罷。既自勞。心買世嘲。奚狼狽而與慌。悟已往之失言。知輿論之可恐。實當局其未遠。覺計窮而策非。說搖々以輕變。論飄飄而吹螺。問策士以方略。恨政綱之凡庸。乃瞻議院。載懼載戰。書記冷迎。守衛候門。伴食備位。松隈猶存。脫帽入室。有案滿机。取草稿以自讀。登演壇以赭顏。遇質問以排闥。審椅子之難安。議日涉以現變。口雖設而常關。策扶步以蹇偃。時鳩首而相談。胸無算以破綻。答倦聽而知妄。足跟々以將逃。撫胸膈而呻吟。罷去來兮。請挂冠以退閣。世與我而相遺。徒止言兮焉求。催魂膽之茶話。勞買收以凌急。黨人告予以機迫。將有論于議案。或托謙遜。或逃抱負。既曖昧以招嗤。亦模糊而惹嘲。氣奄々以向絕。脈縷々而僅存。證壯語之無責。感吾運之行休。已矣乎。寓身內閣。復幾時。曷不斷念決去留。胡為戀々欲尙止。富貴雖吾願。政局不可理。嗚遺憾以自欺。或仍舊而僅免。向門下以漫誕。臨宴會而吹熱。聊乘時以瞞世。怨夫天命。復奚盡。



(一) その出身

『目鯨辛めがまからし、目鯨辛、フーム面白い姓名だ、コリヤ當人の戯名どめいであらう、否々當節流行の陶製標札せとあへらまの、然も第一等大形の品おほなまに、東京府士族目鯨辛と、筆太ふでぶに麗々と書いてあるからは、勿論戯名では有るまい、ハテ不思議な姓名だ、どう云ふ風の人物であらう、此漢の面おもてが見たいものだ』とは、是れ其門前を通行する人々の獨語。僅かに三字、たつた三字の姓名でさへ、此通り諸人の注意を惹ける目鯨辛、況て此目鯨辛と云ふ姓名は、日清戦争後より俄かに世に知れて、某株式會社の理事、某合資會社の取締役、曰く何頭取、曰く何委員長、曰く相談役、曰く監査役かんさぎ、曰く評議員、定議員、幹事長、検査役、世話役と、毎日の諸新聞紙廣告欄らん内に、其姓名を載せざる日無く、殊に鐵道、鑛山、製作、開拓等かいたくの事業に就いては、相手あいて變られど人變らずで、目鯨辛は何時でも發起人はつしや創立人の初筆しよせ、ある統計學者の説

を聞けば、此目録辛は、商事會社の役員を兼ねると廿八、學事團体の社員に列なると十七、遊戯團体に加盟すると廿三、諸會社の株主、若くは組合員たると三十六、現時出願中の諸鐵道、諸會社の創立願に調印すると四十五なりと云へり、諸々御苦勞千萬にも調査したる哉、諺に云ふ隣の寶を數へるとは此事なるべし、但し此調査にて、目録辛が如何許り社會に持離されて、羽を伸しつゝある歟を知るに餘りあるべし。

是程の勢力ある俄富限の流行紳士、御前、殿様、檀那、大將、大盡、長者と到る處であらゆる尊稱を以て崇められ、天翔る雁をも一日に睨み落し、水潜る鱈をも咳一ツて瘧ます計りの見脈、内證の機關、内幕の遺線は知らず、表面の所ては姓名こそ新顔なれ、金力と智惠の働きては、從來東京で五本の指を折られたる豪商等に、一步も譲らぬ目録辛、岩崎が明日にも辭職したらば、日本銀行總裁は、余ならでは外に適當の人物は無いはずだと、憚り無く口外する程の豪傑、されば世間にては此目録辛の出身に就ては、頼まれもせぬに寄ると障ると種々の評判、區々の報告……『左様さ實に彼奴の出生が分りませんよ、まさか天から降つたても、地から湧いたても有るまいが、一跡全跡何處の那處より出現して來た人物で御座らうな』さればサ、出生も分らぬ、が一旦に金儲けを仕た事歴が、猶以て相分らぬ、原は何者で、何を仕て居た漢であらう『東京

府士族と云ふからは、生れは武士だらうが、彼の詞つきては、勿論江戸生れては無い、慥に九州筋の訛りだが四國調子も交つて居る様に聞えるネ『原籍は何縣だらう、區役所に往つて、戸籍を調べたら分るであらうけれど』その戸籍だつて、本統だか偽造だか、知れるものかネ『併し十年前には一時、青森縣あたりで私立小學校の教師を仕て居た事があつたと云ふ説だぜ』さう云へば、其前には政黨の仲間て、巖に政府反對の運動を仕て、警察に目を注げられた事もあつたと、當人自からの話に聞いたと云ふ説を傳聞したよ『待玉へ、思ひ出した、彼奴は七八年前には、大藏省で判任を勤めて居たぜ』さうだ、内務省でも何課にか居た様に思はるよ』はてな、僕は彼奴が六年計り前に、横濱トロンペット商會の銀座支店で、支配人を勤めて居たと、確に聞いて居るぜ』さうか知らん、併し、其頃無種會社と煙商會との合併の時に盡力したのは、彼の目録だつたと云ふ事だぜ』さう聞いて見ると、僕も今思ひ當つたが、明治二十六年の冬、諸株が大落の時に、企と々の店で、大賣りに賣つて酷い所を搦つて、我輩の買方に大損をさせやがつたは、彼奴に違ひ無い、現に僕は其時分兜町で、彼奴が面をよく見掛けたよ』シテ見ると、其次に炭鐵を煽り立つた時も、彼奴は連合の仲間だつたらしいネ』其れにしても、朝鮮に戦が始ると、直に彼奴は朝鮮に出掛け、夫れからと云ふも

のは、通し陸海軍に附いて御用を聞いて居たぜ『さうさ彼奴が素速ツこくて、何時でも先ッ潜を仕やがツたには、追の大倉組も高田組も閉口したと云ふ事だ』それから彼奴の運が向いて来て、此節の仕事を見玉へ、實に手酷い伎倆で、其上に遠慮會釋なしに遣付て、然も平氣だから恐れ入るよ……』と寄合ひての噂だらう、以て目録辛が履歷を臚氣ながらに想像するを得たり。

(二) 邸宅の状

この目録辛が本邸は、東京十五區の眞中で、四谷區神田竹川町の河岸通り、昔は御高三十万石の御大名の中邸、戊辰の變後は、去りし儀の残らねども、唯一ツ残つたは古き白川御影の石燈籠、古田織部正が京都の邸に置いて秘藏したりしを、寛永八年に江戸へ持つて来て、此邸の庭に据えられたる有名な燈籠で、茶人、古物家、骨董家が、涙を流して拜見する名物、この燈籠がどうした理か、獨り此邸に居残りして、目録が一年買入れたる時まで、庭の片隅に悄然として立つて居たりけるが、目録が此邸を我物として新に座敷住居を普請なし、内庭外庭をも作らせたる時に『斯んな古燈籠の微臭いのを置いては目障りだ……何の古物だと

名物だと、馬鹿ア云へ、僅か三百年許りの星霜を経て、然も古田ごとき奴が秘藏したとて、貴重する程の價があるものか、こんな品を余が庭に置いては、憚りながら目録辛の人物が下がる、今に御影に注文して、大々的の大石燈籠を新規に作らせ、上野東照宮境内の大燈籠に一層大きい物を、此庭の眞中に建て、世間の奴に見せてやる……』と右の織部燈籠を取除させたと云ふ事、これにて萬事推察すべし。但し其概略を簡短に紹介せんに、先づ其地面が河岸に面して三方地面で、總坪千八百九十七坪一合二勺、何の様に作り方があるべきに、四方眞角に伊豆石にて高さ八尺五寸に積み上げたる石塀、所々に物見の如く櫓の如き圓き塔を建てたるは、歐洲大陸には今以て残つてある中世諸侯の小城、唯今では囚獄に變つたる建物に彷彿たり、北向に表門を建て、鐵で鑄たる唐草透の中に、おのれが定紋の笹龍膽を徑一尺八寸位に鑄出させ、其上に金箔を置いたる扉を八文字に開かせたるは、來人をして朔風に寒からせんと趣向、玄關前の庭は大笠松を心となし、下には一面に態笹を植ゑ、紅梅の低いのを取り合せて、松竹梅を描へたる馬車廻し、玄關、寄付、表座敷、次の間、書齋、取次部屋等で、凡そ百三十坪は、お定りの西洋造り、屋根はゴチック柱はコーリンツ窓はレネッサンスと云ふ諸式混同の建築、獨逸の椅子机、白耳鏡の絨氈、瑞西の時計、伊太利の油畫と、



各國の仕入れ名物を以て飾り立て、金箔の眩ゆきは、眞宗の御佛壇に左も似たり。廊下傳へて其先が、御住居の日本家、紫檀、黒柿、鐵木刀、神代杉に百日紅、如輪目の櫛、葡萄目の柿、その外名木珍材で造つたる寄木細工、およそ俗味と云ふ俗味、氣障と云ふ氣障、一ツとして備はらずと云ふと無し、庭は勿論開張場の造り物、泉水築山すべて田舎源氏の挿繪が標本と見えたるが、杏抜庭石の頭抜に大きなは、蓋し水神の八百松を壓仆せんが爲めなるべし。

別荘は下根岸の大糞横町、その普請は本邸に打つて變つたる大洒落で、芳原の金子、柳島の橋本を方則で、下地窓澤山、筋違の間仕切、少し背の高い者は、頭をコツリと打ち當てる鴨居を所々に作つて、入り来る敵を待ち受けり、尤も一鉢が都て橋本金子ならば、此節流行の料理屋兼待合と心得て濟む所なれども、此主人の目録が、其實公然の秘密で、無鑑札無税の待ち合ひを此所にて相營み、御客は擇み討の歴々たち、警入の風にも當らざる怖るべきの妖魔窟でありながら、是ては餘り割烹店じみて見識が無いと、自己立案の注文を出し、數寄屋の屋根を銅瓦で葺たり、なぐりの濡椽の所に硝子障子を建てたり、芳野丸太赤松の關鴨居の間に西洋戸を建て、ピシンと錠を卸したり、忽然と天井の板が開いて其中から電燈がぶら下がったり、不意

に疊が持ち上がつて床の下から夜具蒲團がせり出したり、書籍棚がクルリと廻れば其奥に隠れ座敷があつたり、三階の小室にも押し入れの中には顔洗ひの阿伽棚並に便所が設けてあつたりして、不倫は不倫なれども其用意の周到なるは、驚き入るばかりなり。

此外、夏は日光の避暑、冬は沼津の避寒、或は大磯、鎌倉、那須、鹽原と、所々方々に臨時別荘の支店を修理へ、何地へ往つても不自由なだけの準備、おさく／＼怠る所なく、御案内、御伴、御同道、宜しくは御一泊と周旋に忙はしきは、旅宿の亭主をして後に睦若たらしむる程の運動、是ぞ即ち目録が居住の狀にぞある。

(三) 威迫の秘訣

目録辛は机の側なる手筈の中より、若干の紙幣を取り出だし封筒に入れて、擲るが如くに、對座の漢の膝の元にはふり出して『貴公、それ程困るなら、是を持つて往つたが宜いワ。貴公は才智もあり學問もあり、口も手も随分達者だが、ナせさう窮するだらうネ、……ナニいくら勉強して稼いでも、どうしても錢が儲から



抜差が出来ない様に陥し込むのが上策、成らう事なら一所に強盗でも働く事が出来れば、猶更以て結構だが、さうした事も出来ないに由つて、成るだけ彼の輩に破廉耻をさせ、事に寄つたら法律にも觸ると云ふ點までに押し込んで置いて、此方の味方に附けるが一大功夫、さうさへ成れば彼方で夫は否と云ふ時には、「そんなら是迄の魂膽秘密を公然と世間に披露し様か、サア／＼、返答はどうだ」と威し掛けるに由つて、彼方でも背に腹は替へられぬ、致方が無い、承知しますと此方の威迫が見事に通つて、思ふ坪にはまつて行く奴サ……ナンノ／＼、幾度でも其威迫は効能があるよ、畢竟その威迫で、先方の地位に過が生ずるとか、但しは先方の囊中に損が立つと云ふなら、一度で懲々再度は眞平御免と云ふだらうが、先だつて威迫で據なく同意して働いた揚句が、どつしりと纏つた金が取れるのだもの、大恐悦でいつでも御同意、機會に由つては、彼方から、是々の面白い蔓があるぞと、報知してくれる極密の組合員に成つて、威迫の妙用が益々顯はれる、乃公が金儲、濡手で栗の秘訣、ナント妙であらうがな……』と得意の講釋に、彼對座の人物は、ハツと計りに感嘆の外はなかりける。

## (四) 御手ぬかり

英雄胸中自ら閑日月あり。廿六世紀の粗暴なる言説、一たび紙上に現はれ、日本これを轉載してより、大不敬の號呼天下に騷然たれども、何の是しきの事をと、平氣にて更に驚く色も無く、議院の開期方に近づきて政府に反對の旗幟、諸方に樹立し、多數を得ると如何あらんと、當局みな憂色あれども、某の大臣殿更に心配の景色だもし玉はず、偶々相談あれば、ナニ其時に成つたらどうかかなりませうとの挨拶、併し、但し、夫れでも、左ながら、とは云へ、何だか等の懸念詞、頻りに出て、密談日を重ね時を移したる揚句が『それ程御心配なら、宜しう御座います、議院操縦の事は私が引き受けて致しませう』と事も無げに請け合はれるは、蓋し此公、胸中夙に成竹ありての事なるべき歟、仔細は知らず、其落付振りは、一方の領袖たる政治家の價直はあるらしく見受けられたり。

個程の重任を引受けても、左迄忙しとも見え、例刻の退出より歸邸しては、襲服に召し替へさせて、大島紬蚊紬の二枚小袖に、黒縮緬の綿入羽織と云ふ、がらにも無い装束、萌黄縮緬の大座蒲團の上にボカリと座

り、前に桐洞の大火鉢を置き、兩臂を其縁に突いて、俾だらけの御顔に、頬杖を突かせたる所は、木魚變生の如くにも拜まれ、達磨還俗の圖にも似させ玉へり、昔の詞て云へば申次の侍、今の詞ては取次の執事、翻譯すれば玄關番の書生、倉皇として出て來り『アン目録辛どんがア、急ン御目ン掛かりてエち…』と執奏すれば、主人公は『ム、さうか、此エち云へ』との御仰せ、畏り奉りて案内すれば、目録辛は、御座所へぞ参りたる。(中世の物語り文鉢にて記いて見やうならば)目録辛、其頃は四十ばかんの漢なりけり、白地の縮緬の糊強なるを折襟に着て、蘇格羅紗の辨慶縞の所々に赤糸入れたる袴袴を裾摺に穿き、黒綾織の厚羅紗の胸服上着を揃に着て、米國造の金鎖を胸高に光らせて、金覆輪の眼鏡を懸け、右の手袋半ほど脱りながら、御前に罷り出でて、笑顔を作つて敬屈したるは、天晴の紳士振りごさんなれ、物の用に立つべき面魂とは知られけり、主人の殿は目録辛に向はせて、四方山の御話どもありて、麥酒火酒打ち交せて自らも聞し召し、目録辛へも賜せて後に、御膝を進めさせて『扱も目録辛、兼て和殿へ申し含めつる一議、すべく行はるべう覺ゆるか、彼方の旗色此方の雲行は何に』と追の英雄も今度の戦心細くや思召されけん、案じ顔して問はせ玉へば、目録辛は心あり氣に首打ち振りて『以ての外に悪う候ふ』と申す。主人の殿驚き玉ひて『悪しかるべき

筈ては無かりしに、其仔細いかにや何に』と心せかれて問ひ玉へば、目録辛『さん候ふ先ツ目、殿の仰せには今度日比谷が原なる大講堂詮議の庭に列なる大衆、三塔の其中にて随一と聞えたる進歩塔は總勢擧つて御方なり、敵の本陣たる自由塔は云々、國民は是々ぞや、旗色分らぬ輩は斯々にぞ計らはせ置きつれば、汝擲手より進ませんには、彼方には返忠ども忽に起りて、敵は都て裏崩すべきぞやと、手に取る如くに宣はせられたば、其餘にて手段を運らせて候ふに、以ての外に、敵陣は堅ふ候ひて、反問離間の計略、譏誣中傷の毒筆も情なや其度ごとに見顯はされ、却て謀略の裏を搔かれ、世の物笑と成り候こそ口惜しく候らへ、尤も殿の仰せとて某々の俗輩が、何程かの黄金を贈り賂ひて、或は御方に引き入れ、或は敵方にて異存申させんと、柵を碎いて運動いては候へども、某々とても高の知れたる官人あがり察の殿ばら、其運動の無下に掛ければ、未だ手を下さぬ前に、早くも此方の内兜を見透かされて、常に後手々々と相成つて候へば、其詮あるべしとも覺え候はず、畢竟かゝる輩を殿の信じさせ玉ひて、斯る御大事を語はせ玉ひける御事、憚りながら御過失かと存じ候ふ、假令殿上の御僉議、陳の座の御内議にて候ふとも、殿が其總奉行承はらせ給ひぬる上は、などか其始めより御人選に御計廻あらせざりける、其上に御方と頼ませ玉ひつる進歩塔の大衆とても、總勢み

な御陣に参らんと、尤も覺束なう候ふ、其故は彼黨の者共、侍大將より混甲に至るまで、盡く貫首熊連大僧正殿の恩顧相傳と申すにあらず、素より外様の輩も多う打ち交つて候ふなれば、今度大臣方の思召立ち、横紙破りの御計ひ、何にもあれ都て盲従し奉るべしと誓ひたるにも候はねば、彼等が中には、仰せ事の餘りに年來の所望に違ひたるに心を落し、怨を懷き、此上とては見限り奉つて、御手を放れんずべき勢も見えて候ふ、然れば目の前の御大事、此の事にてぞ候はん、敵の勢の者共が、少々ばかり裏切いたし候ふとも、大勢將に傾いて候はんには、所詮前途の安穩、期し難う候ふ、唯此上は急ぎ御謀略を運らして、危難を免かれさせ玉はんも肝要に候ふ、左なきに於ては後悔臍を嚙ませ玉ふとも及び難く、あはれ是迄の御苦心は春の夜の夢、うたかたの泡の如くに消えさせて、御運の果なきを嘆ち玉はんも、案の内にて候ふべし、誠に危き御身の上とは、思し知らせ玉はずや」と諫め奉りければ、大臣殿も實にもと思召されけん、打ち濕りて見え玉へり。

## (五) 買収の方略

さう云はれて見れば、此方にも思ひ當る事があると、主人公の某殿も顔色變つて俄に心配「モウ落付いては居られぬ所だ、目録、貴公の名策一功夫して、此の急場を救つてくれい」と大政治家の英雄も、凝ては思案に能はずで、投首しての御頼み。目録此ぞと心中に悦びながら、故意と心を惱ませる風を見せて、眉に八字の皺をよせ、音聲を沈めて「サア其功夫が容易く出来る位なら、私も是程に苦勞は致しません、有りさうで無いものが、智慧分別、これには此辛も閉口仕ります、併し強ひて愚案を申し上げいと御意あるなら、所存を取り撮んで申しませうが、抑々一政黨に依頼して、此難關を渡らうと云ふ御賢慮が、失敬ながら浅果と申すもの、いくら進歩黨が力身でも、自由黨が威張つても、どちらと云つても、議員三百の過半数を占むる事が出来ぬ言はゞ小政黨、ヤレ主義だの方針だのと、大層に吹き出しても、サアとなれば、是と云ふ方略の定まらぬワイ、連中、良んば此連中が皆残らず御味方でも、其餘が盡く反對では、矢張り議院では味方少数で、政府の敗北、それでは大變とあつて、窮策を運らし、種々の卑劣手段を以て、反對黨を分離させたり、

反覆させたりした所が、夫れで首尾よく多数を占め様とは、さう旨くは烏賊の何やら、此方に荒神さまがあらば、彼方にも愛染様があるに由つて、當事と何やらは向ふから外れるの恐れあり、中々以て引當には成りませぬ、幸に都合よく思ひ通りに成つた所が夫れでは尊公方が進歩黨に致されたので、彼黨を巧みに利用したと云ふ功現は見えすまい、前門に狼を防いで後門に虎を入れるの諺で、天下は進歩黨の天下に成つて、内閣は其鼻息を窺はれば相成らぬ勢ひに陥ります、左様相成つては尊公方の御苦勞は、何の詮も無く成つて、意外の結果を見るばかり、(説入つて劉切) 恐れながら明治今日の日本を作つたは、陸長の方で、其中でも尊公方は第二の元勳で居らせらるれば、全體なら日本人民が、壯大なる頌徳碑や、宏偉なる記念像を造つて、其恩徳を永く謝せれば成らぬはず、(主人公得意) 然れば當分の中、二十年か三十年の間は、尊公方が常に内閣の椅子を占め、富貴權威を十分に有して御居てなさるが當然、何も不思議はありません、夫れを兎や角と論じて、ヤレ藩閥政治だの、元勳内閣だのと攻撃するのは、詰り嫉妬偏執の私心より出づる邪説妄言ゆゑ、苟も天下の真相を看破して居る有識の士は決して其れには迷ひませぬ(主人公大得意) ナンノ、今や大日本の國勢膨張して、戦後經營の時機、どうして片時たりとも尊公方がお退では、逆もく

政府は持てませぬ(益々大得意) 是じやに由つて、今日では尊公方が、どこ迄も踏み止まつて、内閣の地位を保つて下さられば相成りませぬ。コリヤ尊公方御一身の爲では無い、即ち日本帝國の御爲で御座ります、(説得て妙) 此一大理由あつて組織せられたる現内閣だから、眼中に政黨なしで、表面は超然て往かねば成りませんが、去りとして議院で失敗しては叶ひませぬに由つて、議院の多数を得るが肝腎、その多数を得るには、是迄の如き離間、中傷、説得、説諭だのと云ふ小策士の小刀細工では、間違かしい、短刀直入で公然と議員買収を御断行が宜しう御座ります、何の世間を憚る事がありますものか、既に先年は選舉干渉すら成すつたては有りませんか、況て金を出して買ふのに何の遠慮が有りませう、左様々々説を買ふと云へば、多少世論があらませうけれど、此方の説に同意だに由て贈與すると云へば何も差障は御座りませぬ、其金は内閣機密費から、ハ、ア内閣御請け取りの節に、前内閣から前年分の機密費剩餘八萬餘圓を引續がれましたと、猶更以て重疊、それをずんくと、御支出が宜しい、ナンノ其れが盡きれば特別内證の機密費を算段いたすのは至つて容易なる事、憚りながら、其才覺は此目驗辛が方寸の中に御座りますれば、少しも御案じは御座りませぬ、何き、彼奴等がいくら威張つても、囊中頗る寂寥で、財政幾ど必追

の極に達して、窮鬼百方より聚まると云ふ内情は、此辛が脱んで罷居る、既に彼奴等に貸金があつて、今日にも執達吏の手に渡さうと迫つて居る高利貸等は、大抵私の手下に屬せる輩ゆゑ、買収の方略たる私の手で行ひますれば、金は半にして、功は之に倍徒すると請け合ひて御座ります。萬事は秘密中の秘密、すべて機關は私の胸中に納めて、屹度成功して、買収の實効を顯はして御覽に入れる、平素閣下御愛顧の恩に酬ゆるは此時、辛一身を擲つても、此事は必らず貫きますれば御安心下さりませ。一寸御一判下さりませれば、私が何程でも立て替へて相渡します。』と最頼もしげにぞ請け合ひたる。

(六) 方正嚴直

『入ッしやいまし。』へい目録様の御つれ儀で御座いますか、先程からお待ち兼ねて御座います、どうぞ此方へ。御外套は私が持つて参りますよ。』と道に如才ない女中の案内に連れて、ズット奥座敷へ通つた。此家は木挽町にて満月と云へる有名な待合、十二疊の上の間に八疊の次の間、床には抱一上人が一昨年ころ筆を揮はしたりと覺しき紅梅と白牡丹の二幅對、その前には五條坂青磁の花入に、ぼけと水仙を挿入に

なし、傍の違棚には黄粉蒔繪の料紙硯箱を乗せ、地板には碁盤一面を安置せり、但し碁局の内には、半紙を引烈て白石三個四個をお捻の如くに包みたるは、何の用に供せる爲なる歟、蓋し知る人ぞ之を知らむ。いま入り來れる人物は、抑々如何なる人物ぞ、年齢四十五六にして、色黎く鼻低く、頬骨突出して口大きなは、何と無くこちと云へる魚に似たり。目録は此人物を見て『ヤア是は、甘利君、ようこそ御來車、骨抜君も先程から御入來で、唯今も尊公様の御噂を致して居つた所、マア、此方へ。』と故意に上席に招じ、骨抜と座を並べての禮待ぶり。其挨拶應對の詞に依つて察すれば、彼の骨抜軟良と呼べるは、時の宰相の機密に參し、腹心の計畫に與かれる記室か、然らざれば其省中に於て一局の長と仰がる、官人とは、其鼻下將の非常に長らかなると、言語の丁寧なるが中に自から横柄らしき語氣あるとにて知られたり。甘利篤川は元是政論營業の出身、現時は某黨の幹事、議院に於ては一方の旗頭、隈々連の餓鬼大將と、其仲間にて持離さるゝ剛のものなれば、目録に對しては左まで無くとも、骨抜に向ひては、一應一答の間更に油断の状もあらざりけり。

目録はこの兩人が談話に口を入れて『御兩公が、さう眞面なお話ばかりでは、主人の目録も辟易仕るよ、公

務の時は十分に眞面もお宜しいが、今夕は打寛いて語らうてはありませんか、實は心腹を披いて御兩公に御相談を願ひ度いことも御座るに由て……』と説き出だせば、甘利は見開いたる眼を頻りに瞬たきて威嚴を粧ひ『サア貴君の御文進にて、是非とも僕に面晤を要する緊急問題があると仰せ越されたゆゑ、議案調査の必要時間を繰り合せ、車を飛ばせて参つたが、全體貴君がたの常套として、兎角斯様な待合船宿などにて會合を催さるゝは、僕輩に取つては頗る迷惑いたす次第、御存知の通り、諸新聞紙の探訪など云ふ族が、常に僕輩の起居出入を視察して、雜報の材料にするのは不得止と仕た處で、反對黨の紙は其れに據つて直に揣摩臆測の筆を下し、私行を許き尾緒を付けて、譏誣中傷の蜚語を構造するの恐れありて御座る、其で僕は黨中の士氣を振肅せんが爲に、此五年以來と申すものは、割烹店、待合、茶屋小家には、曾て一度も足を容れた事はありません、以來は朋友の會合に於て、斯る場所へ御招待は急度御免を蒙り度い』と云へば、骨抜も打諾いて『甘利君の高説、實に御尤、苟も天下の經綸を以て自ら任じ、特に親しく其局に當るものは、李下の疑ひ瓜田の譏りが甚だ恐るべきである、小官の如きも、夫故に野暮極まるに似たれども、足跡曾て狭斜の地に到らざると茲に十有餘年、今夕の如きも、實は有名なる甘利君と、公席にては御出會すれど、更に目録君の

紹介で、御懇親の榮を辱くする機會とあるに由つて、平素の節を枉て是へは参つたが、いま甘利君の高説を承れば、全く小官の志操と冥符暗合である故に、小官が目録君に望む所も、亦甘利君の御望と同様と思ひ玉へ』と宛然閻魔が鹹漿を呑めた顔色と一般。目録大きに恐入つて『イヤ御兩公の正義直言、何とも以て陳謝の詞なし、仰せの如く、我等紳商の風として、待合を以て俱樂部に致すのは慣習であるに由つて、御兩公の方正嚴直を承知いたしながら、つい此家へ御枉駕を願つたは、全く僕の過誤失策……併し、今夕の所は既に用意に仕つたに因つて、枉て此で一盞を御取り上げ下さる様相願ひ度い……ナニモ是しきの事で御兩公の公德を傷くるでも御座りますまい……』と且つ謝し且つ慰めて、漸くに得心させ、手を打ち鳴らして女中を呼び、酒饌を命ずれば、準備は疾に整ふたり、お膳盃洗爛德利、持ち出だすものは新橋にて、實は何某と餘り人に知られざる一人當千の若手の下等尤物、白襟紋附の大禮服を着飾りて、五六人ばかり現れ出て一禮したりけるが『オヤ甘利さん昨晩は『アレ骨抜の殿様一昨日は酷い事よ、長谷川さんて皆に見せ附けてサ『甘利の旦那、此間は私を揚干にして、三イちゃんと合乗て花月さんから夜遅く巴屋へお出てなすつたのを知つて居ます……』と云れて化皮は忽ちに顯はれたり。』



(七) 化の皮

「貴殿も我等も、原を糺せば信田の狐「化現して飲むと仕やうか」とは昔し忠臣蔵の由良之助が「力にて九大夫を逆さまに欺きたる機轉の計略。いま満月の座敷にて、目録辛が骨抜局長、甘利議員の化の皮を剥たるも、稍その趣きを同うせるに似たり。目録は此兩人をば先づ組合せて置くが、買収方略の上に必要なりと案へたるに、兩人が兩人とも揃ひに揃つて眞面賈の偽君子ばり、好々、然らば其巢穴を搜して計らはんずる旨ありとて、探鑿を下したるに、案の如く、新橋にては煉瓦地烏森と南北に跨りて、密かに遊び歩き、然も有名の襦袢買専門で、三圓よろしい、五圓高いと、直段の押引に物慣れて、即諾の廉物に功名瀕する下品下性の悪客、尋常のお茶屋には鼻を摘まるゝ素寒貧なりけり、目録は猶も穿鑿して其所狎の白拍子等呼び迎へ来る何日の夜は、満月にて約束すべし、約束の常、玉十二本祝儀二圓の外に、特別賞與一圓づゝを與ふる程に、甘利骨抜に對ひて、遠慮なく平素の私事を語り、否てもあらうが我慢してべた附くべしと、言ひ含めれば、此輩平日は一圓こつきの敵放の格なるに、三圓に成るとは忝なしと、大きに悦び、扱こそ未練容赦

も無く斯は争ひて言ひ出したるなれ。

了得の甘利も骨抜も、今は遁るゝに道なく、品行自慢の大言壯語、その舌の根の乾かぬ中に、饒舌立られたる我身の不仕だら、辨解答辯すべて其詮なきを見て、目録さこそと啞々と打ち笑ひて『御兩公、何も御隠蔽には及びませぬよ、英雄色を好み豪傑酒を飲むと、古來東洋の特色、殊に勝敗の上とあるからは、女將軍の物でも藝者の物でも、取つて歸るとは至當の英斷、この目録も同意で御座りますな。サア斯う御同様にお里が知れた上は、幸ひまだ時刻も早いに依つて、顯微鏡の小戦でも洒落に始めると仕やうか。ム、機械は此匣の中にすツかりと備へてあるとは、感心々々、ハ、ア此軍配團扇が後殘の章か。成程々々此小策に入れたるものは豫備だな。』と目録が一撃に遇ひては、偽君子忽ち變じて眞の小人の正躰を現はし、怪しからぬ座興の振舞、所狎の婦人に作戦させて、打標が悪いから宜しいを喰つたとの叱責、人の見る目も耻かしと思ひもせぬが、即ち鄙鄙卑劣の本性、實にも「花にこそ人の心は見ゆるなれ、目に角立つる、石ひとつにて」と或大人が讀まれたるは、今こそ誠と知られたれ。

『サア徐々と是から飯に仕やうが、其前に此で少し内證話があるから、卿等は少しの間、下に往つてくれい

……ム、其間に下で遠慮なしに茶づつて、しつかりお腹を拵えて置くが宜いワ、腹が減つては軍が出来まい……ハ、アどうでも宜いから喰るがよからうぜ……』と目録はその座に侍りける白拍子等を退座させ、甘利骨拔と三人、鼎足に成り、火鉢を圍みて密々談話。其問題は案よりして秘密中の秘密、昔の戯作者が「其後は作者もこれを知らず」と書いたる所なり。但し隔の唐紙の外に時々洩れ聞ゆる詞のきれくには……成るほど、さう成れば入費は君が所から僕に廻してくれ玉ふか……勿論々々僕が受合つて廿六人だけはきつと同意させるから、安心だ……ム、君の方に夫れだけの人数がありやア、過半数には成るよ……ナンノ別に慾張ると云ふ次第では無いが、其話を纏めるには、飲食などの雑費が随分掛かるに由つて……それじやア骨拔君、その積りで大臣公には君から具申して置いてくれ玉へ、僕からも言ふけれど、こんな事と云ふものは聊でも嫌疑が有つては良ないから……甘利君、その運動費は決して御懸念には及ばぬよ、失敬ながら此目録辛が引受くるに由つて、安心して十分に君の伎倆を振つて成功させてくれ玉へ……

『サア、もう内證話は済んだから、皆、こゝに出て来て宜いよ……』と更に酒飯を出ださせ、且つ酔ひ且つ喰ひ、且つ戯けて終に其往く所を知らず。目録は一人其席に止まり、微笑して云く『先づ巧く生捕つた、それ

れに思ひの外に廉價で話が出来た哩、あの骨拔を使ふのが、此方の手とは、ヘンお釋迦さまでも御存知あるめエよ……

(八) 追加支出案

黄金湯の利現、忽ちに其効ありて、左しも黨中にて硬骨を以て知られたる甘利篤川先生は、某殿の味方となりて、然も目録辛には頭の上がらぬ金樽、進退懸引、すべて目録辛が注文通りの傀儡とは變じたり。某殿はまた既に目録の議論に感服して買収の密事を托したるに、其腹心たる骨拔軟良が、目録の運動は云々なりとの報告を得て、益々信を目録に置き、今は策士中の大策士の如くに思ひ込みて、何事も腹心を披きて依頼するまでに至りけり。

今日しも目録が宅の奥座敷にて、對座の密談は、主人の目録に客の甘利の兩人なり。目録は聲を低くしながらも、稍々鋭く勵しげなる聲音にて『サアそれだから君困るじやア無いか。どうて君の黨中には、多少この變説に反對者のあるのは、知れ切つた話だ、君だつて唯の鼠じやアあるまいし、山に千年川に千年、劫を經

た老狸ふるだぬまだもの、サアと云へばコウと云ふ心算が無くツて、オイそれと請け合ひ玉ふ筈はあるまい、其れが今日に成つて、僕の心底にも任せぬとは、平生いつしゆの計略家にしては頗る不似合千萬かと、僕は甚だ疑惑するよ』と詰り懸れば、甘利は火箸にて頭を搔きつゝ、『ソウ正面から論じられちゃア、生も陳辯ちんべんの詞に苦しむ譯だが、尊公も亦少しは察して下さるが宜い、抑々當一月、満月の樓上にて此談しが始まつて、生が眞先に同腹と相成つて、其れから運動に掛かつて、御注文通りの人数を引き入れれば引き入れが、其相場は餘り廉過る直段これ表向に玄關から来て、お頼み申しますと云つた日には、設たごひ田舎出の屁餅議員つぼこでも、三百や五百は攫つづませ無けりやア、諾うんとは云ひませんぞ、其を重立つた奴が二百づゝ、下廻りが八十か五十の零金はしなで買ひ入れたのだもの、少しやアブツゝぬかすのは當然たたりまさ、併し要する所が、彼奴等だツて、眞底再び變心して、現内閣に向つて反旗はんきを挙げ、公然議場に於て攻撃を仕やうと云ふ程の決心はありやア仕ないサ、實の所が彼等が選挙區の飛び上がり連中が、田舎漢いなかものの癖で、我縣の代議士にして左様な變説の不徳義があつて、買収されたとあつては、慷慨悲憤かうがいひひんに堪へられぬなんぞと、今日開明の氣風も知らずに力身出して、既に詰問委員まつもんいんを上京させるとと騒いで居ると云ふと、如是そん奴等に來られては堪らぬに由つて、ヤレ黨議とうぎが行はれぬに由つて、脱黨だつとう

るとか、黨中に氣に喰はぬ者があるから、除名を望むとか、所謂世間への聞かせを云つて、其氣欲きよくを避る苦肉の計略、なんの本心から出た譯で無いから、敢て御心配には及ばぬ、憚りながら此篤川が一身の榮譽えいように誓つて保證いたします』と辯解に及びたり。目録は打ち諾いて『ム、そう云ふ申し合せの狂言で、一時をこまかす仕組とあらば、心配は無い様なもの、愈々議場ぎじやうに於てと云ふ時に成つて、反對でもされて見玉へ、第一某殿へ對して、僕の顔向けが出来ないよ、其れだから天の未だ雨ふらざるに隔戸くわくこを網繆ちぢやうすと云ふ工合ひに、今一層シツかりと固めて置くが必要じゃア無いか甘』所が今急に其れを固むるには、唯今も申した如く買収金額が餘り少なかつたに由つて、何程づゝか、追加豫算ついか増支出ぞうしゆつを仕て貰はねば成りません、連も空手からつてでは承知がさせ悪う御座ります目』それじゃア君、最初に車賃を極めて引き出してから、途中で増し錢や酒價さかをねだると云ふ、風の悪い辻車つじぐるま、見た様だぜ、甘』勿論々々、彼輩かたがひは朦朧組まうろうぐみの辻車、昔ならば風の悪い辻つじ籠かご、足許を附け込む蛛介くもすけだから困ると云ふのでありますよ、其上に某殿の手許からは確に五萬圓出たに相違ない、所が我々の手に渡つた高は三萬足らず、其剩餘せりりは尊公と僕とでちよろまかしたらうと云ふのが、一般の推測、そこで此面倒が持ち上がつて來た理由目』テモ君にやア別に千圓と云ふ大金を骨拔が立會つて渡し

だから、ソウ思はるゝのも仕方はあるまいテ甘ソウ仰しやりやア尊公だツて、まさか素通しに成すつたても有りますまいが目『當然だ、どこの國に金銭を素通しにする間拔があるものか、……宜しい、分つた分つた、詰る所が買収の増を出せと云ふのだらう、僕が承知してきツと出させて見するが、併し其高は……ナニ惣牀で二萬欲しいと、高い、ザツと引きたまへ……引かなけりやア僕が直接に掛合つて、國別談判の手段を取つて、廉く押付けて見せるぜ……ヨシ一萬三千で手を打つた……さうなれば其積りで某殿を怖しに掛かるが、少し時機が早い、君の作略で、大ごた附きの様な振を見せて、新聞にも出る様にして、狂言を仕たまへ……それで急度出させて見せるから、旨く遣つてくれ玉へ。其狂言が本統の事に成つちやア大變だぜ……ム、君の事だから巧みにやるで有らうとは思つて居るけれど……ナンダ別にいくら貰へると、ハテ扱、欲に掛けちやア抜目の無い男だなア……仕方が無い、其時に無つたら四百圓やらうよ……ナンノ僕だツて、さう儲かるものか……』

(九) 依頼の手紙

『閣下どうて御座りまする、尊公は増支出の三萬圓を、彼是と御意遊ばしたが、其功能は忽ちに現はれて、餘算案は見事に委員會議を經過しましたらうが、先づ此の一場は御安心で御座りまする』と祝詞を奉つたれば、某殿閣下は、欣然とし玉ひて『ム、目鱈、さすがに貴公の働きて、まづ好結果を見さうじや、昨夜も骨抜が来て、貴公が今度の運動はひどい盡力じやと感心して居つた哩……さうじやが外務の方は少し困つたなア』と仰せらる。目鱈は米搗ばつたの如くに、ヒョコ〜と頭を下げて『私が盡力、御賢察下し置かれ、御賞詞に與かつて難有う存じまする、併し此一場は旨く往つたからと云ツて、全く御安心は出来ませぬ、前途途遠だに由つて、其中またどんな變が起らうも知れませぬ、だから常に彼等の歡心を繋いで置いて、此方の手足の如くに使うが肝腎、それが即ち巧みに議院を操縦するの伎倆……ソリヤア姫を呈するじやア御座りませんが、閣下の御英斷と御宏量で、全く行はれた次第、とても他の大臣方の及ばぬ所て御座ります、コリヤア其人に自然と備はつたる徳望だから、眞似は出来ません……併し外務の方は豫算が減額に成つても、何